

## 論文

### 都市と祭祀センター ——アンデスにおける都市化についての概念的挑戦——<sup>1</sup>

クリストフ・マコフスキ  
(渡部 森哉 訳)

#### キーワード

都市化の比較 (Urbanismo comparado)、先スペイン期ペルー (Perú prehispánico)、先コロンブス期の建築 (形態と機能) (arquitectura precolombina- formas y funciones)、アンデス文明 (起原と展開) (civilización andina - orígenes y desarrollo)、祭祀センター (centro ceremonial)、アンデスの都市 (ciudad andina)、アンデスのセトルメント・パターン (patrón de asentamiento andino)

#### 1. はじめに

20世紀終わりの発見により、都市の発展に関するプロセス考古学の古典的モデルの普遍的な価値に疑いがもたれるようになった。そうしたモデルは、ユーフラテス川、チグリス川、カルン川の下流、およびメキシコ高原におけるセトルメント・パターンの先駆的研究によって裏付けられてきた (Marcus and Sabloff (ed.) 2008)。こうした議論の推移を見定めるにあたって、中央アンデスの事例を検討することで、とりわけ適切な視角を獲得することができる。それは、先史時代のペルーで展開した「広義の」都市化 (アーバニゼーション) が独特の特徴を有するためであり、また完全な定住生活が始まった前4千年紀後半から1000年の間の、まだ土器が知られていなかった時代に都市化が進んだという、その驚くべき古さのゆえである。

本論文の目的は、アンデスの都市化をその特有の技術的社会的文脈の中で定義すること、そして、アンデスの都市化の主要な原理が、メソポタミアやテオティワカンの交流域における都市システムの基本的な特徴と様々な点で異なっていることを示すことにある。この目的のため、先土器時代後期の記念碑的 (monumental) 公共建造物に関する議論を追い、次に論争の基本にある理論の概要を検討する。最後に、中央アンデスにおいて都市とされ

---

<sup>1</sup> 本稿は、2011年6月27日にマコフスキ教授を招いて開催された人類学研究所主催の講演「アンデスにおけるアーバニゼーション (都市化) についての概念的挑戦」をもとにし、その後の知見を加えてこれを大幅に加筆訂正した、スペイン語論文の翻訳である。スペイン語版は、本誌の電子ジャーナル版に後日掲載する予定である。なお、アンデスの都市化に関する論文としては、すでに2本 (Makowski 2008a, 2008b) がある。

る遺跡の特徴を、特にルリン谷のインカ期の都市化のあり方に重点を置き比較分析し、以下で述べるアンデスの都市化に対する全体的な評価を裏付ける根拠とする。

筆者の考えでは、アンデスの都市化は、古代の他の都市化と比較して、完全に異なる技術的文脈で展開した。大量の物資の輸送手段は、海にも川にも陸にもなかった（ラクダ科動物のキャラバンは除く）。牽引する動物もいなかった。農業で人間の力を代替する、犁などの道具もなかった。弓、弩、攻城塔、青銅・鉄製の武器・防具、また騎兵隊のような部隊を用いる技術的に洗練された戦争もなかった。さらにこの発展が起こった舞台は、砂漠や岩だらけの環境であったため、交通や大規模な農業は困難であった。こうした全ての特徴のため、居住域が分散する傾向が続き、その広さは4ヘクタール以下で、平均は約1ヘクタールであった。定住化の始まりからスペイン人による征服まで、この傾向はずっと変わらなかった。研究者が都市と考える遺跡は、政治的首都や行政センターの場合であっても、祭祀センターとしての特徴を有していた。見張り台や要塞化された神殿を除き、一般的に防御施設の証拠はない。記念碑的建造物は、1つの遺跡に集中する場合も、道や灌漑用水路沿いに分布する場合もあった。いずれの場合でも、労働力や生産物の流れを統御し、世俗の景色を聖なる景観に転換し、労役や貢納を宗教的義務と性格づけた。戦争の準備や商業的交換も、こうした祭祀の枠組みを逸脱するものではなかった。建築によって組織化された景観はまた、共有された社会的記憶を物的に支える役割を果たした。それは無文字社会にとって必要不可欠な基盤であった。

## 2. ノルテ・チョコにおける先土器時代の都市化の仮説に関する論争

先スペイン期の都市化は中央アンデスの考古学において最も論争を引き起こしているテーマの1つである。都市化の概念自体、そのプロセスの編年、都市とされる遺跡複合の機能、社会的経済的文脈の特徴について、様々な立場がある。中央アンデスの考古学では、ここ10年の間に都市化をめぐる議論が紛糾したが、これはルットウ・シャディーの解釈が発端となっている。シャディーは、ペルーの中央海岸北部（ノルテ・チョコと呼ばれる）にある先土器時代後期（前2700～1800/1500年）の驚くべき記念碑的建造物を、先史時代の「都市革命」の特徴である核形成（nucleation）のプロセスを示すものとして再解釈したのである（Shady 2006; Shady and Leyva (ed.) 2003; Shady et al. 2001, 2003）。シャディーは、都市文明が早い段階で展開した条件として、内陸での川沿いの灌漑農耕と海岸での網漁の発展が考えられる、とする（Shady 2000）。文明が興った地域は、サンタ川からチリヨン川までの海岸地帯とそれに平行する山地を包摂する相互交流域であり、アンデス山脈の東斜面の隣接する盆地をも含む。以前はチュパシガロ・グランデとして知られていたカラル遺跡は（Burger 1992: 76; Engel 1957, 1987）、彼女の仮説に従えば、都市であり領域国家の首都であったという。そしてその組織は、フヌ（万世帯の行政単位）、サヤ（千世帯の行政単位ワランカに対応する）、パチャカ（百世帯の行政単位）に基づいており、タワンティンスユ（インカ帝国）の行政体制の先駆けとなったとされる（Shady 2000, 2003a, 2003b, 2006）。

シャディーの仮説は、一見すると確固たる経験的な証拠に基づいている。これまで、フォルタレサ川、パティビルカ川、スーペ川、ワウラ川沿いに、太平洋岸と内陸で先土器時

代の記念碑的建築複合が40近く確認されている。それらの遺跡よりも広く、複雑な建築を伴う遺跡は、同じ地域においてはその後の時代に現れなかった。それらの多くは現在、海岸のオアシスの周りの半砂漠的な景観にそびえ立っており、視覚的に認識できる過去の建造物としては唯一のものである。一方、形態的に見ると、テラス状ピラミッド、基壇、円形半地下式広場などの要素は、草創期、前期ホライズンの壮大な祭祀建築より古く、それらの直接の祖型となった。さらに、土器の導入はいかなる重要な文化現象とも連動しておらず、そのため「古期後期(先土器時代後期)」という編年上の名称は、その時代の文化的文脈をよりよく記述する他の名称、すなわち「先土器形成期」(Lumbreras 2006; Makowski 1999)に置き換えなければならないだろう。先土器時代の記念碑的建築複合と、その後の祭祀センター——例えばナスカ川流域のカワチ(図1)などに都市の性格を付与している研究者もいる(例えばCanziani 2009; Rowe 1963)——との間の明らかな類似性は、シャディーの仮説をさらに強化している。先土器時代の遺跡間の面積の違い、公共建造物の複雑性の違いは、同様に、古典的な階層的モデルを適用し、各河川流域における遺跡の空間組織を解釈することを支持している。その結果、1次行政センターと仮定されるカラルは、スーペ川流域、さらには近隣の河川流域に分布する2次センター、3次センターを含む広大なネットワークの頂点にあることになる。

しかし、このプロセスを引き起こす要素について、またプロセスの背後にある、社会や政治の内実についての論争は紛糾している。そして、記念碑的建造物が都市の特徴を有しているのか否かという問いは有効ではなく、その問いに対する答えもまた説得力のあるものではないことが明らかになっている。これは、都市の特徴について意見の大きな隔たりがあるためであり、それゆえある遺跡を都市と見なすかどうかには恣意性が入り込む余地が大きくなる。したがって、「これらの遺跡は都市なのか、あるいは都市ではないのか？」という問いを、「古期後期(先土器時代後期)の初期の定住生活という文脈において、政治的・宗教的側面を含めて、公共建造物の社会的諸機能を、どのように理解するのか？」という問いに置き換えることが望ましい。

シャディーの議論は、スチュワードが着想し(Steward et al. 1955)、チャイルド(Childe 1974[1950])の都市革命モデルに影響を受けた、プロセス考古学による古典的な立論に基づいている。そしてそれは、意図的ではないにせよ、ある種の「間接証明」によって成り立っている。実際、上述のシナリオがあり得るとすれば、答えのない多くの問いが思い浮かぶ。

- ・初期レベルの農業は始まっていたが(Dillehay et al. 2004)、ラクダ科動物の家畜化はまだなされておらず、輸送手段のなかった、先土器形成期(新石器時代)の技術で発展できたのは、どのようなタイプの都市化であったのか？
- ・チャビン・デ・ワンタル(Burger 1992)やクントゥル・ワシ(Onuki (ed.) 1995)といった山地のいくつかのセンターを除き、古期(先土器時代)から続く祭祀建築伝統が、前期ホライズンのはじめに消滅し、同様の地域的な共同建設労働がスペイン人による征服まで見られないのはなぜか？
- ・先土器時代後期(古期後期)のセトルメント・パターンが、都市的とされるにもかかわらず、中期ホライズン(議論の射程外であるが、モチェヤワリなど様々な地域的國家が

覇権を求めて争った時代) のペルー北海岸で知られる都市化とほとんど類似性を示さないのはなぜか？

先土器時代の都市化に関する議論の内容は、これらの問いに対して明白な答えはなく、意見の一致もないことを示している。ジョナサン・ハースと「ノルテ・チコ」プロジェクトのメンバーは、先土器時代の記念碑的建造物が、生業を漁撈に依存する海岸の住人のリーダーと、より内陸で農業を営む住人のリーダーとの間の、暴力を伴う政治的競合を物的に示したものであると考えている (Haas et al. 2004, 2005; Ruiz et al. 2007)。内陸の住人はワタを栽培していたが、それは魚網を作るのに不可欠であったため、海岸の住民が重宝していた。そして争いによって地域的なリーダーシップが確認されることになった。しかしながら、技術の発達や人口密度を考慮すると、複雑な首長制社会 (complex chiefdom) が形成される条件はまだ整っていないし、領域国家の場合はさらに足りない。公共建造物を伴う遺跡は、祭祀センターとしての性格と機能を有していたのである。

調査が進むにつれ、先土器時代後期の社会のヘテラルキー的な傾向を示す証拠が認められ、上述したプロセス考古学的なモデルに対する批判が高まった。セロ・ランパイ遺跡の発掘とフォルタレサ川流域の遺跡分布調査を実施したラファエル・ベガ＝センテノは、建造物の明らかに祭祀的な性格と機能を強調している (Vega-Centeno 2008a, 2008b, 2010)。彼は、記念碑的建造物が 1 つしかないために必ずしも都市的だと認定されない遺跡においても、記念碑的建造物が複数存在する遺跡と同様に、同じタイプの建造物が認められることに注意を促している。円形半地下式広場を伴うマウンド＝基壇は、フォルタレサ川でも、ノルテ・チコの他の河川流域でも、最も頻繁に認められる形態である。セロ・ランパイの発掘の結果は、複数の極めて重要な点において、カラルの発掘と一致している。1 つは、単独の建造物、あるいはそれを含む複合建造物が、土砂や封鎖壁によって意図的に埋められた場合に、基壇が形成されるという点である。基壇上に他の構造物が建設され、またそれも意図的に埋められることがあり、その結果マウンドはピラミッド状になる。さらに、セロ・ランパイの屋根なし、あるいは屋根付き部屋状構造は、カラルの場合のように、基壇ができた後に利用した人々の共同労働によって建設された。これらの建造物への出入りが制限された痕跡はなく、全く逆で、訪れる人々が自由に秩序正しく出入りできるようになっている。

アレハンドロ・チューは、漁撈を主たる生業とする住民によって建設された、先土器時代の記念碑的建造物を伴う海岸の遺跡バンドゥリアを内陸の遺跡と比較し、建造物の複雑さと形態の双方において類似していることを示した (Chu 2008)。2 人の調査者の一致した結論は次のようになる。各地縁共同体は、統御された空間の中心に、彼らの祭祀建造物を単独で、あるいは 1 つの祭祀センターの内部に並べて、建設した。その人々は周辺の住人や同盟関係にある人々と 1 つのセンターを共有し、各集団が類似した祭祀建造物をそれぞれ建設したため、建物が隣接して位置するようになったのである。ベガ＝センテノは次のような見事な観察を示している。「構造物間の規模の違い——目立たぬ場合も顕著な場合もある——を様々な観点から説明することが可能である。例えば、改修や拡張の回数 (建造物の存続期間が長いのか短いかによる)、建設活動に携わった共同集団の規模、あるいはその集団が経験した様々な偶発的な出来事。さらに付け加えておきたいのは、フォルタレサ川

流域の遺跡複合にある様々な大規模建造物は、自然の丘陵の上に建設されているため、実際の規模はさらに大きくなっているということである」(Vega-Centeno 2008b: 39)。

ベガ=センテノの結論は、シャディーの議論(Shady 2003a, 2003b, 2006)に対する筆者の批判と一致している(Makowski 2000, 2008a, 2008b)。カラルは調査者シャディーにより、66ヘクタールにわたる地域に分散した公共建造物と住居の集合体であるとするデータと見解が示されている(Shady 2006: 34-48)。シャディーによれば、円形広場と関連するピラミッド型の基壇が建設されているのは5.27ヘクタールの範囲であり<sup>2</sup>、一方、エリート<sup>3</sup>の住居構造物が占める面積は0.08ヘクタール<sup>3</sup>である(Shady 2006; cf. Shady et al. 2001)。より規模の小さい建造物が占める範囲は3ヘクタールに及ばず<sup>4</sup>、住居としての機能は祭祀機能と結合しているようにも見える。これらの建造物は、記念碑的建造物のある中核地区の周りの、隣接した丘の斜面に位置している。残り58ヘクタールは、建造物の間の、あるいはその周りの空間に対応する。カラルには明らかに祭祀的な(景観にそびえ立つ巨大な)建造物群が7つあるが、そのうちの2つのそばには、住居的構造物が分かれて位置している。シャディーは、エリート<sup>3</sup>のものと考えられる構造物内にある部屋状構造のうち、少なくとも一部が儀礼的機能を有していることを認めている(Shady 2006)。これらの部屋状構造が祭祀や、基壇とベンチを伴う屋根付き空間を必要とするあらゆる種類の儀礼活動(断食、イニシエーション儀礼、饗宴)のための場所であったという解釈の、代わりとなる説明はまだない。これは特に、床を清掃するという儀礼的な行為によって共伴関係が欠如しているためである。建造物間の空間、特にシャディーが「広場」と呼ぶ中央地区(Shady 2006: 36)は、確かにコミュニケーションの空間として利用されただろうし、様々な活動を行う場としても機能したかもしれない。しかし、広場や通りを伴う設計図が存在したという証拠はないし、建造物の大部分が同一の都市計画プロジェクトによって建設されたことを示す痕跡もない。それにもかかわらず、シャディーは設計図があったことを示唆しているが、それは説得力の乏しい1つの論拠に基づいている(Shady 2006)。即ち、土地の起伏(テラス状に隆起した土地の縁)によって、遺跡複合が「上」と「下」の2つの空間に分かれているという。また、祭祀センター、あるいはシャディーのいう「聖なる都市」が存続していた1000年間、あるいはそれ以上の間に、建造物のうち何%が同時に機能していたのかも明らかではない。いうまでもなく、石器の特徴からは精度の高い編年を

<sup>2</sup> シャディーが提示した面積を合計した(Shady 2006: 34-48)。「大ピラミッド」(170.8×149.7m=25568.76 m<sup>2</sup>)、「円形劇場型神殿」(157.4×81.1m=12843.84 m<sup>2</sup>)、「回廊のピラミッド」(71.9×68.5=4925.15 m<sup>2</sup>)、「方形ピラミッド」(65.67×44m=2886.4 m<sup>2</sup>)、「ワンカのピラミッド」(54×52m=2808 m<sup>2</sup>)、「小型ピラミッド」(49.3×43.3m=2160.67 m<sup>2</sup>)、「円形祭壇の中央ピラミッド」(44×27m=1188 m<sup>2</sup>)、N区の「小神殿」(25.9×10.91m=282.57 m<sup>2</sup>)。合計52663.39 m<sup>2</sup>。

<sup>3</sup> シャディーが言及している範囲を合計した(Shady 2006: 34-48)。I-2区のワンカのピラミッド付近の構造物(268 m<sup>2</sup>と158 m<sup>2</sup>)、L13区の円形劇場の神殿に関連する3つの建物：構造物B1(16×12.5m=200 m<sup>2</sup>)、構造物B2(10.6×7.5m=83.74 m<sup>2</sup>)、構造物B5(12.6×11m=138.6 m<sup>2</sup>)。合計848.34 m<sup>2</sup>。

<sup>4</sup> シャディーの計算では、A区の最大の居住単位は20235.8 m<sup>2</sup>で、それにNN2区の4987 m<sup>2</sup>が加わる(Shady 2006: 42, 46-47)。離れたところにあるX区では、少なくとも300 m<sup>2</sup>の構造物が1つある。いずれにせよ、X区に建設された範囲は3000 m<sup>2</sup>を越えない。加えて、残りにくい物質でできた建築物に短期間生活した場所がある。

作り上げることはできない。較正年代の長いリストの中で注目に値するのは、大ピラミッドと方形ピラミッドの建設の開始時期と、A区とI区の居住域（使用された床と廃棄場）の利用時期の関係である（Shady 2006: 60, table 2.7）。これらの時期の年代は、較正年代で前2600～2500年に位置づけられる。実際、較正年代で少なくとも前21世紀まで、大ピラミッドの建設は継続している。円形劇場型神殿と円形基壇のピラミッドという、他の2つの記念碑的建造物の基壇の裏込めから採取された資料の年代はより新しく、較正年代で前2300～2000年に対応する<sup>5</sup>。おそらく、カラルの建造物の総面積の広さと記念碑的な見かけは実際、少なくとも600年の間に行われた建設活動が積み重なった結果のようだ。いずれにせよ、たとえ、遺跡の利用されていた幾世紀もの間、建造物の総面積に変化がなかったと想定しても、祭祀的公共建造物の地区の5.27ヘクタールと、住居としての利用が想定される建造物の地区の3.08ヘクタールを合わせた遺跡を、「都市的」と表現することはできない。これらを踏まえて、アンデスの都市化の歴史を論じた近著の中でカンシアーニは、カラルの時代の現象を括弧付きで「初期の都市化」とし（Canziani 2009）、シャディー自身も、自分の発掘のことを述べる際、都市という名称に「聖なる」という形容詞を加える必要性を感じている。

カラルについての論争は、イエリコとチャタルヒュルクの発見から引き起こされた議論と、いくつかの点で類似している（Makowski 2000, 2008b）。イエリコとチャタルヒュルクはそれぞれ、肥沃な三日月地帯の先土器新石器時代と新石器時代初期の代表的な遺跡である。両遺跡、特に後者は、発見者によって当初は「都市的」と特徴付けられ、社会階級、長距離交易など、都市的という形容詞が含意する全ての社会経済的内容を伴うとされた。それにもかかわらず、さらに数十年研究が進むと、結果は最初の印象とは異なることとなった（Hodder 2007; Wason 1994）。イエリコもチャタルヒュルクも、経済的側面、社会的側面、また技術的基盤に関しても、この同じ地域に数千年後に発展した青銅器時代の都市とは大きく異なるという結論となった。しかし、初期の定住生活にも、社会の複雑性についてのいくつかの側面があることが示された。それらの社会の複雑性の1つが祖先崇拜と関係しており、中央アンデスにおいても同様である。建造物が凝集したチャタル・フユックには通りも広場もみられず、公共建築もない。レリーフと壁画で過度に装飾された「記憶の家屋」（Hodder 2006）——それをメラート（Mellaart 1967）とギンブタス（Gimbutas 1991）は誤って神殿と解釈した——が急増しなければ、「厳密な意味で」都市とされることはおそらく決してなかったであろう。ホダーらによって、それらの建造物は、一時期、大家族の共同家屋として利用されていたが、時代が下ると、死者崇拜を行う場として再利用されるようになったという見解が示されている（Hodder 2006, 2007）。

アナトリアのギョベクリ・テペ遺跡とその近隣の他の遺跡における最近の発見により、相当程度の複雑性を有した祭祀建造物の、人類史上の最初の例が、都市社会と関係しているわけではなく、定住社会によって作られたわけでもないことが証明された（Schmidt 2009）。シュミットは、北米のプエブロ・インディアンの村のキヴァに類似した建築伝統が、ギョベクリ・テペ遺跡で長い期間にわたって継続していたことを示している。そこでは各

<sup>5</sup> シャディーは、12C/13C比を用いて較正した様々な年代を出している（Shady 2006: 60-61, table 2.7）。円形劇場型ピラミッドの年代(Beta-184979)の平均値は3690±110 B.P. (2120 B.C.)、円形祭壇ピラミッドの年代(Beta-184979)は3800±70 B.P. (2210 B.C.)。

構造物内部に「T」字形の石彫が楕円形状に配置されて、その石彫には様々な具象的図像が浅浮き彫りで施されている。この建築伝統は亜旧石器時代に始まり、先土器旧石器時代 A 期 (PPNA) まで続いており、較正年代で前 11 世紀から 9 世紀に当たる。この驚くべき発見についての調査者の解釈は、権力・宗教の物的表現に関する新たな問題提起となっている。つまり、権力・宗教とそれらが表現された建築・図像との関係についての議論に理論的に踏み込んでいる。シュミットによれば、「農耕民に比して、狩猟採集民は、その生業形態のために、より広いテリトリーを必要とする。(中略) この意味で、小集団に分散している社会にとって、定期的な集まりが必要不可欠であった。これらの集まりでは、小集団にとって互いに入手困難なものが交換された。いくつかの場所(遺跡)は極めて重要であったが、それは『中心地』として機能し、新石器時代以前の社会の基本的コミュニケーションを保証したからである」(Schmidt 2009: 264)。

シュミットの推論は、新石器時代のヨーロッパの巨石モニュメントに関する議論の内容と、様々な点で合致している。一枚岩でできた驚くべきモニュメントが、ヨーロッパの中でも土壌や気候が人間集団にとってそれほど適していない場所で、中石器時代から新石器時代の生活へ実験的に移行していった時期に製作されたことを想起しなければならない (Sherratt 1995)。上に引用した狩猟採集民の事例のように、モニュメントを製作した集団は少数であり、多くの場合まだ定住生活をしていなかった。ある社会が石の加工、運搬、集合墓の建設や、祭祀空間の建設に時間を費やす理由は様々であり、同じように建築の形や方向(周囲の景観の関係する点を向いている)も多様である。こうした多様性は、このテーマに関して激しい議論や膨大な量の論文があることから理解できるだろう。そして、これらの議論では、建築活動に携わった集団の記憶・アイデンティティの保持と建築活動の間に密接な関係があることについては、ある程度意見が一致している (Tilley 1994, 2004)。つまり、巨石モニュメントの建設を通じて景観が組織化され、儀礼を通じて景観に起源の歴史と共通の神話が刻み込まれたと考えられている。

先史時代のヨーロッパにおいて巨石モニュメントが現れる現象については、モニュメントの社会的機能の範囲、およびモニュメントと景観との関係に関する議論がある (Barrett and Ko 2009)。この現象はさらに、アンデス考古学で一般に用いられる、いくつかのパラダイムの再検討を促す。これらのパラダイムの 1 つは、階層的で強制力をもった政治システムの出現と、公共建造物の建設に費やされる社会的時間との間にあると推定・予想される因果関係に関するものである。よくあるのは、出現しつつある、あるいは既に確立しているエリートのイデオロギーが、建築に優先的に物質化されるという推論である (例えば DeMarrais et al. 1996)。したがって、この推論では、この種の公共建造物の有無は、集団間の利害関係の敵対化、社会のアクター間関係を支配する機構、特に階層化・都市・国家の有無、を示す指標として考えられている (後述)。しかしながら、当然、このような理由付けは上述した事例には当てはまらず、階層化・都市化と公共建造物の間に因果関係があるとする推論が普遍性を有するわけではないことを証明している。すでに見たように、古期(先土器時代)のアンデス、中石器時代・先土器新石器時代のヨーロッパやアジアでは、少数の集団からなる地縁共同体が力を合わせ、祖先の墓や祭祀センターを建設した。この祭祀特有の戦略と技術発展の間には、従来の議論の想定とは正反対の関係がみてとれる。農耕や牧畜が発展すると、巨石モニュメントが認められる地域の住人は新たな建造物をつ

くらなくなり、そのリーダーは、おそらく都合に合わせ再び使用したり、使用しなかったりした。意味深いことだが、巨石モニュメントを製作する伝統を培った村の周辺に住んでいた人々も、こうした種類の建築を発展させることはなかった。彼らは完全に定住生活をした集団で、ヨーロッパで最良の土壌を利用し、新石器時代に早くに移行するのに成功したと考えられているにも関わらず、である。

したがって、方法論的にもとめられることは、祭祀空間の建設と都市化という現象を分けることである。確かに、祭祀空間および都市空間は文化的なものが物質化される場であり (DeMarrais et al. 1996: 16)、権力が交渉され、生存のために必要不可欠な関係が打ち立てられる場である。しかしながら、権力のメカニズムを理解するためには、マンが提案する、「権威型権力」と「伝播型権力」の区別が有効であろう (Mann 1986)。先土器新石器時代 (先土器形成期) の定住化の途中にある社会の組織の特徴、および祭祀建築自体の特徴が示しているのは、広く共有された宗教イデオロギー・儀礼が権力資源であり、リーダーはそれを操作して人々を了解させたということである。そのため、物質化されるのは「伝播型権力」であり「権威型権力」ではない。それに引き替え、もっと後の時代に現れる、記念碑的な宮殿、出入りが制限された神殿、さらに 1 人の支配者を崇めるために建てられた廟には、しばしば、支配者を不朽不滅として神格化する碑文や人物像があり、支配者が崇拜の対象となった。これらは、「進化型」都市化 (evolutive urbanism)、または「強制型」都市化 (compulsory urbanism) のプロセスで生じ (Makowski 1999, 2002, 2008a, 2008b; 後述)、権威型権力の明らかな表れであり、その正統性を保証するために、伝播的権力との調和を必要とする。一方で、様々な先史学者が、ブルデューの理論に依拠して (Bourdieu 1977)、国家以前の分散した社会の経済的側面を理解する必要があると考えている。象徴資本 (名誉、高潔さ、信用、献身)、客体化された文化資本 (特別な物の集積に見られる)、社会資本 (各行為主体が構築する関係網を通じて獲得される) という概念は、祭祀空間におけるリーダー間、あるいは集団間で行われる儀礼的競争の本質を理解するのに有効である。ここ数十年の間に、饗宴 (feasting) を催す能力が産業化以前の社会における権力の表明の中心的要素の 1 つと認められるようになった (Hayden 2001)。饗宴では、民主的方法でたびたび選ばれ一定期間リーダーとなった者の間で協定が結ばれ、萌芽的状態のヒエラルキーが正当化された。リーダーの下で共同体が集めた経済資本は、こうした祭祀で象徴資本、社会資本に転化したのである。

### 3. アンデスの都市に関する理論とモデル

アンデスの都市化に関する論争は、コリアー (Collier 1955)、ロウ (Rowe 1963)、ルンブレラス (Lumbreras 1974, 1987) によって示された、3 つの理論的な提起に端を発している。それぞれの説は、都市化という現象についての、比較に基づく定義、実用的定義、公理的定義から導かれている。このような分析の焦点の多様性は、世界の他地域の都市化現象の議論でも同じように認められる (Marcus and Sabloff (ed.) 2008)。

コリアーによれば、ペルー海岸地帯における文化発展は、アダムスとウィットフォーゲルが他の文明発生地で見つけた進化的道筋を辿っている (Collier 1955)。形成期の終わりや地方発展期の際に、灌漑や他の技術 (牧畜、冶金) が導入され、人口の大規模な増加が



可能となったという。その結果、武器を用いた争いが起こり、戦士エリートが現れ、まもなく古くから存在した祭司エリートと潜在的な対立関係になった。こうして形成期の神権的首長制社会が、ワリのような世俗的、軍事的、拡大的な国家に変わる状況が生じた。このような仮説的諸段階の根拠として、次のような建築形態の進化が提示された。すなわち、①形成期の祭祀センター、②地方発展期の地方国家の首都（巨大なピラミッド型の神殿の周りに集まった大きな町）、③軍事国家ワリと関連して現れる、都市タイプの計画的な居住域、である（Collier 1955）。シャデールは、都市化についてのコリアーの定義を継承し（Schaedel 1966, 1978, 1980a, 1980b）、各期の建築を体系的に比較対照する試みを初めて行い、アダムス（Adams 1966）がウルク（メソポタミア）とテオティワカン（メキシコ）の遺跡分布データを比較するのに用いた基準を援用した。アダムス（Adams 1966, 1981; Adams and Nissen 1972）とシャデールによる研究は、数世代にわたって影響力を保持し、次のような想定を流布させた。すなわち、ウルク地域における都市と国家の誕生に関する社会的政治的進化のプロセスは、他の文化領域でも繰り返し起こり、変異があるとしても最小限である、というものである。アンデスで比較に焦点を当てたその後の研究として、例えば島田によるモチエの都市化の研究（Shimada 1994）、イズベルによるワリの都市化の研究（Isbell 1988; Isbell and McEwan (ed.) 1991）などがある。イズベルらは、アダムス、ライトとニーリーが作り上げた方法を適用した（Adams 1966, 1981; Neely and Wright 1994）。都市化という現象が国家の行政構造の強化によって条件付けられると仮定すれば、都市の有無は遺跡間の階層構造や空間構造から推論できる。建築複合の規模や形態の違いを、諸遺跡の空間分布と対照すれば、モデルの大筋に従って、首都、地域センター、地方センター、地区センターなどに区分できる。比較研究に焦点を当てるアンデス研究者は、都市化という現象がより時代の下った時期に生じたと想定している。つまり後7世紀から9世紀の間に生じ、首長制社会から拡大国家への変化と直接的に関係しているとする。

シャデールとは異なり、ロウは、形態、人口、空間組織といった基準には重きを置かなかった（Rowe 1963）。ロウによれば、遺跡の空間的な分布に中核が生じることは、都市システムのみの特徴ではない。というのは、古代（ヨーロッパ）の大部分が農村だった地域において、「アコリティック」（acholitic；内部に農民が生活する大きな遺跡が複数ありそれぞれの間が離れている）タイプや「シンコリティック」（syncholitic；中核の周りに農村が配置される）タイプの組織が知られているからである。ロウの都市の定義は実用的かつ機能主義的なものである。即ち都市とは行政官、商人、職人、軍人が恒常的に生活する場である。人口の恒常的な存在は、都市と祭祀センターを分ける基準となる。一方で、都市と町の違いは、居住地のタイプの違いであり、規模の差ではない。この「実用的」と言える視点に従えば、形態上の差異をもつ中核となる公共区域がなく、面積が4ヘクタール以下の場合には、村落的な性格を有する。ある遺跡が「都市」なのか、「祭祀センター」なのか、「行政センター（エリートが生活していた場）」なのかを決定すると考えられる証拠は、当然ながら、広い範囲の長期にわたる体系的な発掘調査なしには得ることはできない。従って、実用的な方法を採用する研究者は、「都市」と「祭祀センター」と「行政センター」という3つの用語をしばしば同義語として、相互に置き換え可能なものとして、あるいは組み合わせで使用する。例えば、「聖なる都市」、「祭祀行政センター」、「人々の住む祭祀センター」などである。ロウによる都市化の定義と編年案を踏襲し、バーガーは前4世紀から3世紀

のチャビン・デ・ワントル神殿周辺域の拡大が、都市化の初期の段階を表していると解釈した (Burger 1992)。さらに、アンデスにおける都市化の始まりをずっと古く、前 2 千年紀、さらには 3 千年紀まで遡らせようとした研究者もいる (Haas and Creamer 2004; Haas et al. 2004, 2005; Pozorski and Pozorski 1987; Shady 2003a, 2003b, 2006)。彼らの説の根拠は、先土器時代後期、草創期のペルー海岸地帯において、行政センターや都市の特徴とされていた証拠が相対的に頻繁に現れることにあった。それは、①計画的で秩序化された空間配置、②記念碑的建造物の形態の複雑さと機能分化、③記念碑的建造物付近の居住域と調理場の存在、④多くの場合 10 ヘクタール以上で、220 まで達する場合もある総面積 (例えばカバリョ・ムエルト、パンパ・デ・ラス・リヤマス=モヘケ; 図 2)、である。ハアスはカーネイロの理論を呼び起こし、複雑な政治組織が早い時期に登場したことを根拠づける理論的基盤とした (Haas 1987)。シャディーの場合は、チャイルドの都市革命理論を彼女なりのやり方で適用し、折衷的視点、比較の視点、実用的視点、公理的視点を同時に用いて、このテーマに焦点を当てることを選んだ (Shady and Leyva (ed.) 2003)。

公理的な方法においては、建築の形態に多様性があり、居住域・貯蔵域・生産域に囲まれた、広大な記念碑的建造物複合の存在は、必然的に、社会経済的複雑性が都市と呼ばれるほど高度に発達していることを示すと想定される (Southall 1998)。この考えに従えば、発達した強制装置を伴う専制国家の成立と都市化は、文明の誕生において普遍的かつ不可分な現象である。アンデス考古学にこのような公理的な定義が導入されたのは、ルンブレラス (Lumbreras 1974, 1987)、およびその弟子のカンシアーニ (Canziani 1987, 2009) がチャイルドの基準を踏襲し、コリアーのモデル (Collier 1955) を解釈したことによる。ルンブレラスらの理論はペルー人考古学者による都市化現象の認識に広く浸透し、同様にコリアーとシャデールの理論も北米の研究者の調査に影響を与えた。史的唯物論の大筋に従えば、「新石器革命」は必然的に、次の革命である「都市革命」の基盤を整えつつあったことにある。つまり、定住生活が一般化し、効率的な農漁業によって支えられ、余剰生産物を生み出すことができるという条件が、都市革命の前提となる。余剰の増大は、提案に従えば、次第に増大する専門職人や支配者を支えるために必要となる。こうした条件が整うことによって、利害関係の対立する社会階級がすぐに出現し、それとともに強制装置を伴う国家が登場する。支配階級は都市に生活し、都市はまた国家権力の本拠となる。こうした視点からは、都市の発展は社会階級の形成を物的に反映していることになる。元々ルンブレラスは、中央アンデスにおける都市化現象の始まりを、後 5~6 世紀のアヤクチョ地方に拡大国家ワリが興った要因と関連づけていた。古期 (先土器時代) と形成期 (草創期と前期ホライズン) の研究が進展すると、ルンブレラスは従来の彼の想定を撤回し、都市化の始まりの年代を、ロウと同様に、形成期の終わりに遡らせた。カンシアーニの場合は、著書の中で先土器時代の建築についての論争を扱い、アンデスの事例においては、「都市革命」は逆説的に、ゆっくりと集積的に変化するという進化型性格を示す、と想定している (Canziani 2009)。都市化のプロセスは前 4 千年紀末に始まり、確固たる形になるのに 3000 年以上もかかったことになる。その中で祭司エリート、それに続き戦士エリートが出現し、エリートと農民の関係は、時間が経つにつれ敵対的になっていった。

上述した 3 つの定義とは異なり、「機能的」定義は遺跡踏査や表面採集の結果から着想を得ているわけではない。逆に、その提案は都市複合と推測される範囲内で実施される体

系的発掘調査に基づき、しばしばポストプロセス考古学に依拠している。発掘の結果は、初期の理論によって推定されていたこととは明らかに矛盾することとなった。都市センターと推定された様々な場での恒常的な人口は、非常に限定されており、厳密な判断基準に基づけば、居住目的の範囲は全体の10%を越えることはなかったと推定されると結論付けられている。この驚くべき特徴は、アサンガロ (Anders 1986)、ワリ (図3)、コンチョパタ (Isbell 1988, 2001, 2009)、ワヌコ・パンパ (Morris and Thompson 1985) など帝国の地方センターと仮定される計画的な遺跡複合にも、カワチ (図1; Silverman 1993) など無秩序に拡大した遺跡にも当てはまる。記念碑的建造物の大部分は祭祀的機能を有し、埋葬機能や行政機能も伴う。より小規模の建造物には貯蔵庫や儀礼用道具の生産工房がある。その結果、これまで発掘された建築複合が果たした機能を説明するには「行政宗教センター」、ある場合には「宮殿複合」という用語が、「都市」という名称よりも的確に当てはまる。同様に、異なる社会間で経済的、社会的、文化的、政治的側面を比較すると、建築形態の類似性は必ずしも機能の近さを示すわけではないことが明らかとなった。中期ホライズンの計画的設計を有する遺跡は、都市空間の組織や利用という点で——ミレトスのヒッポダモスの作品におそらく着想を得た設計図を有し、ウィトルウィルスによって記述されている——ギリシアの植民地やヘレニズム時代のローマの都市とは非常に異なっている。そのため、機能的視点にもとづく議論では、都市や都市化といった概念の使用に慎重になるという傾向がみられる。これは、ヨーロッパにおける文化の起源と発展の歴史を考えるうえで、都市や都市化が不可欠な概念となっているためである。さらに、機能的視点をとることは、アンデスの歴史への1つの挑戦という意味ももっているだろう。つまり、体系的な発掘によって得られた証拠や植民地時代初期の史料の批判的読解から、先住民文化の歴史的な文脈の再構成に挑む必要がある。ロウはこの困難な道を辿り、タワテンシユの首都クスコの独特な特徴を論じた先駆的な論文を執筆した (Rowe 1967)。ジョン・ムラとクレイグ・モーリスも、プーナ (寒冷な高地) の真ん中に作られた非常に複雑なインカの行政センターであるワヌコ・パンパを先住民の文化の文脈において理解しようと挑戦した際に、ロウと同じ困難にぶち当たったのである (Morris and Thompson 1985)。

#### 4. 都市化のあり方は1つ、あるいは複数? プロセス考古学のモデルの普遍性の検証

新進化主義の流れから出てきた比較の視点も、我々が公理的と呼ぶ新マルクス主義的視点も、共通するある1つのパラダイムに基づいている。つまり、チグリス川、ユーフラテス川下流での遺跡分布調査と発掘調査から再構成された、都市・国家・帝国の形成プロセスが普遍的な性格を有し、そのため初期文明が誕生した世界の全ての地域で、多少の変異はあるものの繰り返し認められる、という想定である。そのため、環境・技術・歴史の違いは重要ではなく、同様の都市化のプロセスが全ての場合にあてはまるとされてきた (Adams 1966, 1981; Childe 1974[1950]; Schaedel 1966, 1978, 1980a, 1980b; Service 1975)。しかしながら、ここ数十年の近東における発掘調査のめざましい進展によって、従来モデルに不備があることが明らかになり、新たな知見として、つぎの4点が示されている。

- ①メソポタミアにおける最初の都市の形成プロセスは、チャイルドの「都市革命」よりも1000年古く起こった。そのためチャイルドの都市革命には「第2次都市革命」という名称が現在用いられている (Akkermans and Schwartz 2003; Butterlin 2003; Frangipane 2001; Yoffee 2005)。
- ②都市形成のプロセスは下流域に限定されるわけではなく、上流域や近隣の河川流域も含む地域に進んだ。そして、それらの地域は、人類史上初の「世界システム」という名に値する広大な相互交流域内の中心部をなしていると考えられている (Algaze 1993, 2001; Rothman (ed.) 2001)。
- ③「ウルク周辺地域」(Adams and Nissen 1972)における前3千年紀のセトルメント・パターンの進化は普遍的とは考えられない。というのは、同じ河川沿いの他の地域や、ナイル川など他の河川流域には当てはまらないからである。
- ④チグリス川、ユーフラテス川流域の都市のあり方も通時的に変異した。つまり「第2次都市革命」に続き、さらに2つの「都市革命」が起こり、ペルシャによる征服前の前2千年紀から1千年紀の間に、経済・社会・政治の組織が変化した (Ramazzotti 2002; Ur 2010)。

現在では殆ど疑いないことだが、金石併用時代後期・青銅器時代前期(前4千年紀から3千年紀)には、遺跡の平均規模と空間組織は、土壌の性質、水資源のバランスと特徴に直接関係していた (Cordova 2005)。ラマゾッティ (Ramazzotti 2003) は、2つの河川の中流下流を5つの地域に区分している (Wilkinson 2000, 2003も参照)。各地域には、遺跡の空間組織にそれぞれ異なる特徴がある。典型的な階層組織は、核形成のプロセスの結果であり (Adams 1966, 1981)、いくつかの巨大遺跡(200ヘクタール以上)、大遺跡(40ヘクタール以上)に人口が集中し、それらの周辺には中遺跡(5ヘクタール以上)があり、水の流れのそばに小遺跡が分布し、水路網を伴う。しかし、こうしたパターンはウルク＝ワルカ間地域とニップール地域の2つにしか当てはまらない。しかも、ニップール地域では1ヘクタール以下の小遺跡が大多数である。5つの地域の中には、周期的に干ばつで地形が改変された地域もあるし、下流域では灌漑のしすぎで塩分が増加した地域もある。その結果、ディヤラ川を例外として、5つの地域にはいずれも安定性がなく、前4千年紀から3千年紀のセトルメント・パターンの変化の流れは、それぞれ非常に異なっている。チグリス川、ユーフラテス川の上流域には、同じ方法で分析されたデータがない。しかし、ここ25年の間に実施された体系的発掘の証拠が示しているのは、上流域における進化のあり方にも特有の特徴があり (Ur 2010)、ウルク盆地(ウルク周辺地域)で観察されたプロセス (Adams and Nissen 1972) と比較できないということである。ただし、相互交流があったことは間違いなく、特にウルク期に活発であった。このウルク期にはチグリス川、ユーフラテス川の上流域でセトルメント・システムに急激な変化が生じた。それはハブバ・カビラのようなウルクの植民地が置かれ、在地のセンターが発展したからであり、テル・ブラクの場合のように、在地の物質文化もウルク文化の強い影響を受けた (Akkermans and Schwartz 2003; Rothman 2004)。

メソポタミアの上流域を含めたこれら6つの地域とナイル川流域とを比較してみると、近東には様々なタイプの都市化、早い時期に様々な順序の集住・核形成のプロセスが見ら

れるという印象が裏付けられる。環境の特徴、また環境への定住社会・牧畜社会の技術的対応が、集住や核形成のあり方を大きく規定している。一方でナイル川流域と比較すれば、都市化のプロセス（都市革命）と国家の成立との間の関係を再考する必要があることが分かる。多くのエジプト学者のあいだで意見が一致していることだが、ナイル川流域で形成された領域国家には、隣のメソポタミアで起こったような、その祖型となる都市国家が欠如している（Kemp 1989; Midant-Reynes 2000; Wilkinson 2001）。トリIGGERは、エジプトの都市化の歴史はメソポタミアとは大きく異なっているということを適切に示している（Trigger 1985, 2003）。エジプトにおける都市化は、強制型の特徴を示し、領域国家の登場、進化の結果として生じた。国家の起源は伝統的にナガダ III 期の終わりに置かれていたが、現在では増加した多くの証拠、特にエリートの墓の証拠に基づき、国家の始まりはさらに数世紀遡るとされている（Seidlmayer 2009）。「都市」センターは首都であり、さらに行政センターかつ祭祀センターである。それらのうち最大級のもの（例えばサカーラ）は、直交構造の計画的設計を伴い、王族の墓を維持する役割を負った労働者と役人のために建設されたものである。人口の大部分は小さい村落遺跡に住んでおり、さらにヒエラコンポリスのような主要な都市センターでは居住域が非常に限定されていた（Butzer 1976; Seidlmayer 1996; Trigger 1995, 2003: 139-140; Wilkinson 1996）。両地域間では、都市と考えられる場において記念碑的祭祀建造物が位置する場所も異なる。エジプトでは、公共祭祀空間の規模と比較して居住域は相対的に小さく、居住域は宮殿、神殿、墓を建設する人々や役人が生活するために作られた場所であった。

メソポタミアでは、神殿やさらに宮殿などの記念碑的建造物は、何世紀にもわたる発展の後の遅い時期（ウルク後期）に現れ、密集した居住建築が都市空間の大部分を占めていた（Crawford 2004; Liverani 2006; Stone 1997, 1999; van de Mierop 1997）。メソポタミアにおける最近の調査はまた、チャイルドが提起した都市革命の定義を根本的に評価し直す必要があることを示している。ウルク文化（およそ前 4000～3100 年）の都市センターの発展は、文字の使用が一般化するよりも 1000 年以上も前に始まっている。上流域の都市遺跡では、計算システムの証拠（トークン）のみが見つかった。同様に明らかなのは「第 1 次都市革命」も「第 2 次都市革命」も、前 3 千年紀終わりに起こった社会階層の増加と私有財産の始まりより、何世紀も前に起こったということである（Steinkeller 2007; Trigger 2003）。調査者は、「都市的」と考えられる初期社会の相対的に平等な性格（Yoffee 2005）や、その政治的生活における「シャーマン的な」要素を伴う宗教の役割（Butterlin 2003）を強調する。議論の中で、前 3 千年紀後半の国家の政治・経済の現実を記述する基本となる基準・概念を、前 4 千年紀の複雑社会の成立のプロセスを定義するために用いることについて、その有効性に疑問が生じた。問題となったのは、特に都市国家や世界システム（Algaze 1993, 2001）という概念である。上述の議論の方向性の対案として、とりわけ、中心としての役割を果たす大村落と都市を区別すること、そして先史時代のウバイドやウルクなどの発展を本質的に都市の前段階（プロト・アーバン）と特徴付けることが提案された（Butterlin 2003; Ur 2010）。他方、「首長制社会」や「複雑な首長制社会」という概念でも、前 4 千年紀のメソポタミアで生じた複雑な政治システムの多様性を正確に定義することはできない（Frangipane 2001; Stein 2001）。調査者はまた、メソポタミア上流域とそれに隣接するアナトリアに生じた土着の都市化の特殊な特徴を強調している（Stein

2001)。例えばウルクの神殿に匹敵するような記念碑的祭祀建造物の欠如といった特徴である (Liverani 2006)。アルスラーンテペのようないくつかの遺跡ではその代わり、宮殿建築や戦士エリート墓の最古の証拠が見つかっている (Frangipane 2001)。

こうした新しい証拠がでてきたため、20世紀にスチュワード (Steward et al. 1955)、アダムス (Adams 1966)、サーヴィス (Service 1975) によって提起された影響力のある比較モデルを、他の地域の事例に適用することについて、再考が必要である。メソアメリカでは、メソポタミアにおけるように、核形成と公共建築の登場は全般的に同時に起こった。2つの地域では、「都市的」発展プロセスは進化型性格を有し、文字の使用の始まりよりも数世紀早く始まり、環境的に見ると多様な地域を包含した。最近の研究では、都市化のプロセスの始まりを先古典期前期 (前 1600~900年) に置くが (Clark 2009)、この時代の政治的社会的状況において、オルメカ国家に先立つ首長制社会が成立したと解釈されている。建築やエリートの人物像、さらには球技をする人物像が、こうした解釈を支持している。また、都市の前段階 (プロト・アーバン) の遺跡の中心にある球技場の役割を強調しなければならない。その1つがチアパスにあるパソ・デ・ラ・アマダ遺跡であり、面積140ヘクタールに達し、その中心に記念碑的性格の祭祀建造物がある (Clark 2009)。

これらの証拠に基づき、初期文明の発展した2つの核地域における都市化のプロセスを比較してみれば、表面的な類似はあるが、顕著な違いもある。メソポタミアでは、神殿建設に費やされる社会的時間は、都市国家の発展と共に次第に増加する。階段状ピラミッドであるジグurat、水平形の他の神殿、宮殿を含む、しばしば壁で囲まれた祭祀センターは、ようやく「第2次都市革命」から都市景観の普遍的な要素となった (Crawford 2004)。しかしながら、上流域のエブラやマリなどの都市国家の多くでは、神殿ではなく宮殿が都市的組織の中心にあったことを想起しなくてはならない。「第1次都市革命」のウバイド期・ウルク期における公共祭祀建造物の祖型は簡素なものである。南メソポタミアにおいては、信仰のための建造物は、複数家族用の家屋の設計と同じである。他方、メソポタミア研究者の多くは、「都市革命」が条件付けた社会発展・政治発展には、首長制社会と共通の特徴が全くないということに同意している (例えば Frangipane 2001; Stein 2001; Yoffee 2005)。

上で見たように、メソポタミアとエジプトを比較した場合も大きな違いが認められる (Cowgill 2004)。こうした証拠をはじめて提示したのはトリグガーであり、別の解釈モデルを提示している (Trigger 1985, 1995, 2003)。トリグガーによれば、エジプトでは、地域国家が比較的突然現れ、それに刺激され都市センターが設置された (Kemp 1989; Middant-Reyes 2000; Wilkinson 1996, 2001) のに対して、メソポタミアでは、都市の前段階 (プロト・アーバン) システムがゆっくりと発展し、その後同等規模の諸政体、アカド以前の歴史時代に都市国家が現れたとされる。筆者の理論的な視点からは、こうした違いを別の方法で記述することもできる。エジプトの都市化は強制型都市化の特徴を示し、それは近東よりも古い領域国家によって進められた。そのため、計画的設計の遺跡が頻繁に繰り返し認められる。一方、メソポタミアの都市化は、進化型都市化の代表的な事例となっている。その後ウィルソン (Wilson 1997) とコラタ (Kolata 1997) は、トリグガーによって提示された枠組み (Trigger 1985, 1995, 2003) を用い、アンデスにおける都市化と国家の関係を、より適切に定義しようと試みた。両者はそれぞれ、サンタ川流域とティカカ湖周辺地域を取り上げ、競合する複数の都市国家が成立したと解釈できるような

証拠はない、という一致した結論に達している。彼らの議論からは、アンデスの都市化の特異な現れ方が、メソポタミアの都市の進化プロセスよりも、ナイル川流域の事例と類似していることがうかがえる。しかしながら、インカ帝国は4000年以上にもわたって首長制社会、複雑な首長制社会、国家が発展した後に登場したが、それとは異なり、エジプトの領域国家には先行形態が欠如していることに注目したい。古代エジプトの場合、専制国家の社会変化、盛衰を繰り返す政治情勢を追うためには、例えば、墓地、祭祀センター、都市の範囲の外側にある神殿、都市、要塞などの印象的な公共建造物に注目すればよい。王国時代以前は権力が多くの地縁共同体の長の間分散していたため、こうした公共建造物の祖型となるものは非常に簡素である(Middant-Reyes 2000; Seidlmayer 1996; Wilkinson 1996)。祭祀空間は祭祀の数日前に残りにくい素材を用いて準備され、祭祀が終わると完全に、あるいは部分的に取り壊されたと思われる。

考古学者、歴史学者が、文明の起源に関する議論では以前扱われなかったアメリカ、アフリカ、アジアの新しい地域を含め、都市現象について議論するようになるにつれ、論争はより激しくなり、都市化プロセスの多様性、遺跡の多様性、また遺跡間のネットワークの特徴の多様性が明らかとなった(Marcus and Sabloff (ed.) 2008)。都市化という概念は個別の歴史の多様性を記述するための比較の道具である、という考えは新しいものではない。こうした多様性が存在するため、特定のパラダイムに従い単独のイメージに限定して都市化を考えるべきではない、という確信も、新しいものではない。パラダイムの根拠となっているのは近代の現実であるが、それは中世の終わりから商業資本主義によって形作られ、産業革命によって強化された結果である。都市化の多様性については、何世代もの歴史学者、古典考古学者、フステル・ド・クーランジュ以降の中世研究者が、程度の差はあれ直感で感じていたのではないかと思う。彼らにとって、例えば、大規模に植民を行った時代のギリシアのポリスが、ヘレニズム時代の都市やローマ時代の都市と比較して、あるいはそれらの都市が中世の時代の都市構造と比較して、どれだけ異なっているかは明らかだった。数世紀の間に、都市と国家の関係、都市民と支配階級(人口の密集した都市に必ずしも恒常的に住んでいるわけではない)の関係は劇的に変化していった。これらの違いを追うことが、マルクス主義的歴史学において昔も今も常に重要であった。例えば、エイダン・サウスオールは近年の都市化の歴史を、史的唯物論の視点からまとめ、都市と農村の間関係が、地域・時代によって非常に大きく異なることを強調している(Southall 1998: 8, 15)。マルクスは都市と農村の関係を、生産様式を定義する指標と考え、近東、古代ギリシア、中世ヨーロッパ、近代について以下のように列挙した。

アジア式生産様式	都市と農村は不可分
古代生産様式	都市の農村化
封建制生産様式	都市と農村の敵対的關係
資本主義生産様式	農村の都市化

サウスオールによる生産様式の再定義とギリシア・ローマの都市化の特徴づけについては議論の余地があるが、根本的な考え方には説得力がある。それぞれの都市化では、地域的・歴史的コンテクストに応じて、経済の仕組み、社会関係、政治制度が物的に現れる。

同様に、各タイプの都市景観はシステムの強力な要素である。都市景観は、インフラとして、権力の表示として、社会のアクターによって蓄積される複数の資本 (Bourdieu 1977) の物質化として、あるいは共有される記憶を伝える手段として機能する。例えば、ヨーロッパの歴史や文化についての教養をもった人間が地中海を旅すれば、様々なタイプの住居 (エリート、農村と都市、要塞化しているかどうか) の間の関係が、異なる設計の都市 (計画的かどうか) が、また神殿や修道院が、時間の推移と共に、また技術的、社会経済的条件の変化と共に変わっていったことをすぐに読みとることができるだろう。歴史を知る者は、ローマの時代から現在まで、様々な文化景観が折り重なっていることを見出すのである。農業技術によって変化していった土地所有の構造もまた、景観に刻み込まれている (例えば Vermeulen and de Dapper 2000)。他方で、マルクスと彼を追随するポストモダンの研究者にとって (例えば Mann 1986; Wolf 1982)、都市化のタイプは全ての経済システムと同様に、技術発展、特に海・川・陸上の輸送手段によって条件付けられている。以上のような他の地域の概略から、アンデスの中で出現した都市化は異形であり、他とは異なる特異な特徴を有しているに違いないことは明らかである。アンデスの生産様式は血縁関係に基づき、その経済システムは共有財産に特徴付けられ、国家が長距離交換を独占し、しかも輸送できる物資の量は非常に限定されていた。

## 5. アンデスの都市化の特異性

近年、筆者は、他の研究者の意見や批判を集め (Anders 1986; Morris 1972; Morris and Thompson 1985; Rowe 1967; Silverman 1993 など)、西洋の都市化の本質的特徴を基準とするならば、アンデスのシステムは本質的に「反都市的」であったのではないかと述べた (Makowski 1996, 1999, 2000, 2002, 2008a, 2008b)。筆者とは別に、コラタがティワナク国家の首都の特徴を言及する際に「反都市的」という言葉を使用している (Kolata 1997)。中央アンデスでは、先土器時代からの全ての時代において、人口の大部分は農地の外側に分散して生活していた。地域の中心地や戦士エリートの居住地と考えられる場所を別にすれば、居住地の平均面積は4ヘクタールを越えることはなかった。4ヘクタールを越える大規模、中規模の遺跡があるが、それらの多くは連続して利用された間に水平方向に広がり、また以前使用されていた区域が放棄されたからである。200ヘクタールを越える広大な密集した居住域が確認されている数少ない例である、ワカ・デル・ソルとワカ・デ・ラ・ルナ (図4)、ワリ (図3)、パンパ・グランデ、カハマルキリヤ、チャンチャン、ワヌコ・パンパなどは、国家による「強制型都市化」の結果である (Morris 1972)。これらの遺跡は、建設された政治的的局面が終わると、いずれも放棄された。都市的と考えられる複合建造物は、首都、行政センター、祭祀センターとしての機能を果たした。アンデスでは、例えばスペイン人記録者がインカのシステムについて記録しているように、効力を有する宗教イデオロギーと、数多くの祭祀に関わる暦に従って、年ごとの集団移動、奉仕活動、貢納物資などが定められた (Rowe 1967; von Hagen and Morris 1998)。道や灌漑用水沿いに分布し、様々な大きさの祭祀センターの内部に集中する記念碑的建造物は、労働力や生産物の流れを定め、世俗の景観を聖なる舞台に作りかえ、労役や貢納を宗教的義務と性格づけた。戦争の準備や商業的交換も、このような祭祀の枠組みを逸脱するものではなかった。政治



制度の歴史から見ると、アンデスの都市化はまず「伝播型権力」が物質化したものである(Mann 1986)。したがって、都市は宗教イデオロギーの手段や舞台であり、また社会的記憶を景観に刻む強力な道具として定義できる(Silverman 2002)。複雑な首長制社会や初期国家のエリートは、これらの仕組み、祖先から受け継いだ資源を利用し、基本的に覇権型性格の権力のネットワークを繋いでいった(D'Altroy 2002)。海上・陸上輸送手段が十分に発達していなかったため、後期ホライズンに至るまで、領域型の権力が組織されるのに著しい制約があった。そこから、調査の歴史の中で最近用いられるようになった「ヘテラルキー分析」という手法は、センターの特徴と機能を理解するのに非常に有益である(例えば Dillehay 2001; Janusek 2010; Vega-Centeno 2004, 2008a, 2008b)。

筆者の仮説によれば、「アンデス独特の」都市化の特異な特徴は次のようなものである。

- ①セトルメント・システムの不安定性。長期にわたって断続的に居住された結果、何層にも堆積したテルのようなものを含む都市が存在せず、代わりに遺跡の空間分布は突然変化し、400～600年ごとに移動する。
- ②公共建造物の優位性。平均で遺跡の全面積の60%を占める。現在まで報告されている都市と考えられる全ての建築複合は、聖なる空間を内包し、生活空間は周縁にある。
- ③都市センター、行政センターとされる遺跡では、広場、半地下式広場、囲われた部屋状構造、階段状基壇、傾斜路を伴うピラミッドといった形態の祭祀建築が繰り返し認められる。
- ④①～③で挙げたアンデスの祭祀建築の多くと特異なセトルメント・パターンは、驚くほど早い時代から存在する。特に先土器時代(古期)後期から顕著であるが、中期に遡るものもある。

多くの研究者は、アンデスの都市化の起源を、「人々の住む祭祀センター」という定義に当てはまる特殊なタイプの広大な遺跡と結びつけている。このタイプの遺跡は記念碑的公共建造物を伴い、居住域が限定されており、先土器時代後期(およそ前2700～1800/1500年)のペルー北海岸・北高地に同時に現れる。それよりも前の先土器時代中期の先行形態が断片的に確認されており(Dillehay et al. 1997)、多くの植物の栽培化プロセスの完了とこのタイプの遺跡の登場が編年的に直接関係する。そのため、中央アンデスで早い時期に現れる公共建造物は、農業(Burger 1992, 2007; Dillehay et al. 2004, 2005)、牧畜(Bonnier and Rosenberg 1988)を営む定住社会の成立プロセス自体の一部となっている。海産資源の利用の役割は重要なのであるが(Chu 2008)、モーズリーが考えたほどではなかったようだ(Moseley 1975, 1985)。最近の食性分析の結果や(Dillehay et al. 2004)、海岸から離れた山地で記念碑的建造物が早くから発展したこと(Bonnier 1997; Bonnier and Rosenberg 1988; Dillehay et al. 2005)が示していることだが、海産資源が特に重要であったわけではない。基壇、ピラミッド、屋根付きの部屋や屋根なしの部屋、階段付円形広場、階段なし円形広場など、様々な形態の祭祀建造物が、カラルでは一緒に確認されており(Vega-Centeno 2004, 2010)、「都市的な」外見を呈しているが、スーペ川でも近隣の河川流域でも、それらが単独で存在したり、いくつか組み合わせたりして、非常に多様な様相を示していることを強調したい。ベガ=センテノによれば、「正面、側面に出入口があり、

背面にも出入口が1つあり、側面と奥にベンチを伴い、正面近くに炉を伴う2つの部屋が連結した構造物」(Vega-Centeno 2008b: 47)が、低いマウンド内部によく見つかっており、あるいは建て重なってピラミッド状になっている。また、しばしば円形広場とともに現れる。少なくともこのタイプの遺跡が各河川流域の一部にはある。他方、各遺跡内にある記念碑的建造物の数は、およそ12から24の間である。最もよくあるのは約12という数であるが(例えばセロ・ランパイ; Vega-Centeno 2004, 2008b)、特に頻繁に現れる数のパターンはない(Shady 2003a, 2003b; 2006)。ベガ=センテノが見事に観察したように、遺跡の広がり、記念碑的建造物の数、建設の際に動かされた土砂と壁の体積は様々であり、ヘテラルキー的秩序の要素と関係があるようである(Vega-Centeno 2008a, 2008b, 2010)。例えば、河川間の道や耕作地と祭祀センターの位置の関係、1つあるいは複数の集団が集まりのためにこの空間を利用した期間、などである。居住の痕跡が確認された範囲は、祭祀用の公共空間と比較して極めて狭く、カラルも例外ではなく1%以下である。これらを考慮にいった、最も適切な説明は以下のようになる。建造物の敷地面積の広さや複雑さは何世紀にもわたって増大した結果であり、その中には放棄された構物もあれば、再利用されたもの、前の構造物の上に作られたもの、何もなかった所に新たに建てられたものがある。カラルで少なくとも1000年の間に建設された空間のどれだけの割合が同時に利用されたかという問題は、まだ解決されていない。

土器の導入は重要な文化変化を示すわけではなく、先土器時代から現れた建築伝統はおよそ前800年まで継続して発展した(Burger 1992; Donnan (ed.) 1985; Kaulicke and Onuki (ed.) 2010)。形態に注目すると、後の時代の公共建造物を伴う遺跡の一般的なタイプは全てすでに現れている。たとえば、孤立した祭祀構造(ラス・アルダス、ラ・ガルガーダ、ミナ・ペルディエダ)、祭祀構造物複合(アスペロ、サリナス・デ・チャオ; 図5)、チュパシガロ=カラル、タウカチ=コンカン、コトシュ)、動線に沿って並び、広場を囲み連結された計画的建築複合(エル・パライソ、モヘケ; 図2)、があげられる。後の時代の遺跡複合に匹敵する要素は他にもある。

- ①祭祀建造物を儀礼的に埋めその上に他の同様の建造物を建てる習慣。
- ②220ヘクタールに至る広さ。例えば、カバリョ・ムエルト。
- ③日干しレンガと石で建設された建造物の膨大な体積。例えば、セチン・アルトは300×250×44m。
- ④具象的な壁面装飾。例えば、ガラガイ、セロ・セチン、セロ・ベントロン、リモンカーロ。
- ⑤建築の形態と、おそらく機能の多様性。例えば、モヘケ(図2)、ワカ・デ・ロス・レイエス。

遺跡の調査の進展や保存状態によるため、生活空間や貯蔵についてのデータは偏っている。しかしながら、上に述べた3つのカテゴリーのいずれかに当てはまる遺跡の要素として、例えば、カラル、カルダル、モンテ・グランデ、モヘケ(図2)においては、居住空間が見つかっている(Burger 1992, 2007; Pozorski and Pozorski 1987, 1991; Tellenbach 1986)。アンデスにおける「狭義の」都市化の始まりに早い年代をあてるのに好都合なこう

した証拠は全て、社会経済的文脈とは対照をなすようにみえる。埋葬習慣から見ると、比較的平等で平和な社会であったというイメージが浮かび上がる。首長であったと仮定されている人々の中には、男性も女性もあり、しばしば当時としては非常に高齢な人物がいる。埋葬の副葬品には、シャーマンあるいは狩人、漁師の達人としての熟練さが顕著に見て取れる (Burger 2008; Chapdelaine and Pimentel 2008)。外来の原料や品物 (スポンディルス貝、セルバ地帯のトリの羽や植物の種) がある場合もあるが、首長の副葬品は、後の時代のエリートのもものと比較して非常に質素である。

先土器時代に始まった巨大な祭祀センターの建設の時代は、地域によっては 3000 年続いたが、突然終わってしまう。重要な技術が進歩したにもかかわらず、この伝統が衰退したことは、逆説的である。なぜなら、スチュワード (Steward et al. 1955)、チャイルド (Child 1974[1950])、サーヴィス (Service 1975)、シャデル (Schaedel 1978, 1980a, 1980b) らの、影響力をもったプロセス考古学のモデルにおいて、技術の進歩は社会内の分化 (階層分化や分業) と「都市革命」を推し進める要素と常に考えられてきたからである。およそ前 1 千年紀の前半から原料 (黒曜石、金、スポンディルス貝、ラクダ科動物の毛) と儀礼用道具 (土器、織物、金製品) の長距離交換が次第に活発化した (Burger 1988, 1992, 1993)。ラクダ科動物の家畜化は南から北へ広まり (Uzawa 2010)、織物製作、冶金、金属細工に関して主要な技術革新が起こったが、それらの重要性は先スペイン期のその後の時代に見て取れる。例えばクントゥル・ワシの墓に見られるように (Onuki (ed.) 1995)、疑いなくこの時代から社会の階層化は進み、リーダーの地位は制度化され、彼らの性格は変わっていった。武器や防御用構造物などの戦争の証拠は前期ホライズン (形成期中期、およそ前 800~200 年) の間に明確になる (Chamussy 2009; Ghezzi 2006, 2008a; Topic and Topic 1997)。凶像と墓の副葬品を見れば、戦争の準備が、社会階梯を上りエリート階層に入るための主要な条件の 1 つであったことは疑いない (Makowski 2010)。さらにエリートは戦士としての衣装と持ち物を身につけている。

社会経済発展のこうした傾向を、チャビン・デ・ワントル神殿周辺域の漸次的な拡張や (Burger 1992, 1993)、サン・ディエゴ (Pozorski and Pozorski 1987)、ワンバチョ (Chicoine 2006, 2010) のような直交構造の建築のある遺跡の出現と関連づけ、初期の都市化の現れとして説明しようとして試みられてきた。しかしながら、チャビン・デ・ワントルにおいてさえも、今述べた変化が実際に恒常的な人口の増加によるもので、特定の祭祀機能に起因するわけではないということを証明することはできなかった。巡礼者の宿泊所、儀礼的饗宴の部屋、儀礼用道具の生産工房なども、都市の前段階 (プロト・アーバン) の遺跡に類似した痕跡を残すことがある。ワンバチョ (Chicoine 2006) とサン・ディエゴ (Ghezzi 私信) の事例では、祭祀的理由によって建造物が建てられたことは疑いない。様々な形態や規模の直交設計の建造物が、隣接して繰り返し建てられたが、それらには柱廊、ベンチ、壁の装飾用壁龕が伴っていた。飲み物や食べ物を振る舞うための土器と楽器は、特によく見つかる。それぞれの建造物に、祭祀の日に役人や儀礼参加者といった特定の集団が泊まることがあったと想定すべきだろう。

チャンキリヨはその複雑さと大きさで知られるが、公共建造物を伴う新しいタイプの遺跡の代表例である。ペルー北海岸のモチエ谷よりも南に位置し、チャビン・デ・ワントルの衰退のさなか、衰退後に建設された。また同様の建造物はさらに南のノルテ・チョコ地域

まで認められる (Brown-Vega 2010)。一般的に言うと、この遺跡は丘の頂上に位置する要塞化した神殿であり、何重もの堂々たる周壁で同心円状に囲まれている。またもう 1 つの丘には 13 ある塔状構造物が 1 列に並び、その両側に直交構造の大複合建造物が広がり、神殿の麓まで達している。直交構造の複合建造物には広場と部屋があるが、屋根がかけられているものは少ない。調査の結果、この遺跡は見かけとは異なり大祭祀センターであり、儀礼的格闘など、年間を通じて様々な祭祀が催されたことが示されている。広場に集った参加者は祭祀に参加し、祭祀において塔状構造物によって示された線を基準として太陽と月の出入りが観測され、重要な日取りが決定された。神殿はまた本当の戦いの場合には逃げ場として機能し、実際この神殿を利用していた人々が、おそらく近隣の集団に敗北して、神殿は放棄された (Ghezzi 2006, 2008a, 2008b; Ghezzi and Ruggles 2011)。

上で見たように、ペルー北部の先土器時代・形成期の祭祀建造物の大伝統は、前期中間期・中期ホライズン (前 200 年～後 900 年) の祭祀センターと「都市」センターの直接の祖型とはならなかった。北部におけるチャビン文化・クピスニケ文化の衰退は、建築の設計図や建築技術に特別に力を費やす文化の断絶を示している。前 200 年～後 200 年までの間は、セトルメント・パターンは分散している場合が大半で、おそらく防御的性格の建造物が、祭祀構造物よりも頻繁に認められる。チャンキリョなどの例外はあるものの、祭祀構造物は一般に大きくはない。また建造物内部にあるおそらく祭祀の機能をもつ要素は、防御的な複数の部屋状構造と結びついている (Topic and Topic 1997)。サリナル文化のセロ・アレナの集合構造物は、例外的に居住専用の巨大な遺跡であり、防御的性格で、エリート区画もある (Brennan 1980)。ここまで述べたことから分かるように、前期ホライズンから前期中間期までの間に、中央アンデスの北半分で、社会的時間を費やす方法に劇的な変化が生じた。祭祀建造物へ時間を費やすことは極端に減少し、その対象は主要な政治センターに限られた。その代わり、原料の入手や工芸品 (特に衣服、頭飾り、装飾品) の製作に充てられる時間が増加し、それらは共同体を越えた範囲での儀礼の遂行に必要不可欠と考えられていた。これらの工芸品は墓に埋められ、権力の象徴を示し、おそらく支配者を祖先化・神格化した姿を通じて権力を正当化したのである (Makowski 2005b, 2010)。形成期の終わりの前期ホライズンより前の時期に数百もの祭祀センターが建設された河川流域では、前期ホライズンから、丘の上に防御化した周壁と部屋状構造物を、労力を費やして建設するようになった。筆者にとって、チャビンの衰退が、権力の 2 つの異なる戦略を分ける分水嶺となったことは殆ど疑いない。おそらく定住化そのものに関係する古い権力戦略では、村落間の政治関係は、共に行う祭祀を通じ平和的に交渉された。人間の大量の生け贄の凶像を伴うセロ・セチンなどの場合を除き、本質的に平和な共存の基盤となる宗教イデオロギーは、祭祀センターの建設、周期的改修を通じて景観に刻み込まれた。その代わり、それ以降の時代の村人は、儀礼的戦闘や戦争、またイニシエーション儀礼の舞台、戦士を教育する舞台となる建造物を建設した。資源、土地、水、狩猟・採集・貝採集・漁撈域の利用を求めて近隣の集団間で競争が劇的に増加したため、制度化された暴力が明白に現れるようになった。

南部では北部に比べ、記念碑的建造物を建設する地域的な伝統が現れたのは 2000 年ほど遅く、前期ホライズンからであり (Silverman 2009)、その形態的・機能的特徴は前期中間期まで続いた。ティティカカ湖周辺の形成期の状況もほぼ同じである。ティティカカ湖周

辺のアルティプラノで最も古いこうした伝統は、チリパとプカラに認められる (Stanish 2003; Tantaleán 2010)。そして、海岸ではイカ川流域の祭祀センターであるラス・アニマス (前4~1世紀のパラカス・カベルナス期) を、バホ・チンチャ (トパラ) とカワチ (図1; ナスカ文化; 後2~5世紀) の先行形態と考えることができる。これらの3つの遺跡には階段状基壇があり、方形部屋状構造、頂上に屋根付き空間を伴っている。3つの事例では、拡張の証拠や、古い時期の建造物を基壇内に意図的に埋めて新しい建造物の基礎とする証拠が見つかっている (Gavazzi 2010)。カワチ (図1) の場合、建設者は同じように、土留め壁や埋め土によって、土製のレリーフに変更を加えた。シルヴァマン (Silverman 1993, 2002) とオレフィチ (Orefici (ed.) 2009) は発掘によって、カワチは恒常的に人がいない、あるいは殆どいなかった祭祀センターであり (Llanos 2009)、様々な共同体の協同労働で建設され、各共同体がそれぞれの空間を拡張したことを示した。同じ時代には、直交構造の大規模な一連の建築が知られている。例えばチョンゴス、パラカス (54ヘクタール)、ベンティリヤ (200ヘクタール)、ドス・パルマス、コルデロ・バホである (Massey 1986; Peters 1987-88; Rowe 1963: pl. I; Tello and Mejía Xessepe 1959: 251-261, Figs. 76, 78, 81)。それらのいくつかはコルデロ・バホのように明らかに居住用であるが (Massey 1986)、チョンゴスのように、部屋状構造の大きさや共伴遺物の特徴からして公共的・祭祀的機能を果たしたように思えるものもある (Peters 1987-88)。ペルー北海岸でも後2世紀以降、類似した遺跡の集中 (核形成) 傾向が認められる (Wilson 1988)。そして、これらの遺跡の分布は二極化している。一方は、階段状基壇の上に築かれた記念碑的神殿の周囲あるいは側面に広大に分布する遺跡の集合であり、海岸に位置し、各河川に1つずつある。例えばガジナソ文化の諸遺跡、ワンカコ、モチェ遺跡 (図4)、ワカ・カオ、マランガである (Canziani 2009)。他方は、村落、エリートの居住地、防衛的建造物であり、河川を遡った所にある、水路の取水口付近の山の斜面に築かれたテラス上にいくつかに分かれて集中している。この例はビルー川とサンタ川流域に認められる (Willey 1953; Wilson 1988)。

多くの研究者の一致した意見によれば、中央アンデスに「狭義の都市」がはじめて現れるのは前期中間期の終わりと中期ホライズンの間の後400~1000年の時代である (Canziani 1992, 2009; Collier 1955; Lumbreras 1974, 1975, 1987; Schaedel 1966, 1978, 1980a, 1980b; Shimada 1994; von Hagen and Morris 1998)。この考えを支持する主な論拠として挙げられるのは、建造物の集中した大遺跡が急に一般的になること、および計画的設計がおそらく広まったことである。1つ目の論拠には説得力がある。都市に見え、部分的に無秩序に増加した遺跡複合——例えばガリンド、パンパ・グランデ、マルカワマチュコ、カハマルキリヤ、ワリ (図3)、ティワナク——には祭祀建造物のある広い中核地域、生産工房、大量の食事を用意する地区、貯蔵施設、エリートの住居、臣民の居住域があり、それらは後6世紀以降にかなりのスピードで建設された (Canziani 2009; Isbell 2001; Janusek 2004; Mogrovejo and Segura 2001; Shimada 1991, 1994; von Hagen and Morris 1998)。ワリが拡大する前と拡大中の時代状況では、自然災害 (長期間にわたる干ばつ、メガ・ニーニョ) が生じ政治紛争が起こっており、こうしたことが海岸における政治的危機状況の要因となったということはある。主な水路の取水口付近に遺跡が集まっているため、戦士エリートは灌漑システムの戦略的中心地点において、水路の周囲を防御することができた。

都市遺跡には計画的設計があるはずだという前提は、疑いなく地中海の都市の碁盤目設計と暗黙のうちに比較されているためである。これは伝統的にミレトスのヒッポダモス (Ward Perkins 1974) に端を発する都市空間の配置に従っており、ウィトルウィウスなどが書き残したおかげで、近代の都市化の理論に組み込まれている。スペイン王室がイベリア半島と植民地に「新たに」設置した都市の特徴である碁盤目設計は南北アメリカ大陸に広まった。そのため、多くの調査者はそれを全ての都市に内在する特徴と捉えている (Collier 1955; Hardoy 1999; Schaedel 1966, 1978, 1980a, 1980b)。しかしながら、ウルク、ローマ、アテネ、セビーリヤや中世の都市など、長い期間にわたって発展した都市にはこのタイプの設計は認められない (Buko and McCarthy (ed.) 2010)。反対にこのような進化型都市化の場合や、他の多くの事例では、曲がりくねった狭い道が通る都市集合は、程度の差はあるが無秩序に広まり、それを制限するのは公共の場所とおそらく市壁のみであった。

直交構造の設計という基準は、全ての都市遺跡の特質と想定されているが、筆者の判断では、様々な経験的・理論的理由からアンデスの場合には適用できない。第 1 に、複数の時期にわたって利用され重なり合う居住の痕跡が認められる、都市的と考えられる遺跡において、初期に規則的な設計が存在し、その設計に従って遺跡の空間組織が決定されたということは確認されたことがない。アンデス考古学では数十年の間、ワリ (帝国とされている) とタワントゥスユという 2 つの帝国が、スペイン人が持ち込んだものと類似した直交構造に従った、都市的な性格の首都と行政センターを設置したという仮説が効力を保っていた (Hyslop 1990; Isbell 1988; Schaedel 1978, 1980a, 1980b)。

その後、センター自体で面的発掘が始まったが、この仮説は証明されていない。ガリンド、パンパ・グランデ、パカトナムー、チャンチャンなど、ペルー北海岸の遺跡 (Bawden 1982; Campana 2006; Donnan and Cock (ed.) 1986; Moseley and Cordy-Collins (ed.) 1990; Shimada 1994)、またカハマルキリヤ、パチャカマク (図 6) など中央海岸の遺跡は外見が計画的であるが、それがおそらくワリの建設者によって設置されたことに起因するという可能性は排除された。パチャカマクなどの場合、都市的な外観はインカの介入による結果である (Makowski (ed.) 2006, 2008, 2010, 2011)。カハマルキリヤなどの場合、中期ホライズン 2 期前後の遺跡の空間組織は、明らかに在地の規範に従っている (Mogrovejo and Makowski 1999; Mogrovejo and Segura 2001; Narváez Luna 2006)。さらにマルカワマチュコ (Topic 1991; Topic and Topic 2001) やホンコパンパ (Tschauner 2003) など、ペルー北部高地のいくつかの都市複合の設計がワリに起因するという考えも、正当な方法によって、厳しい批判にさらされている。他方、地域的伝統においても、帝国の伝統においても、これまで報告されている計画化の基準には、近代の都市化に認められる規則や設計順序のようなものがないことが経験的に知られている。ギリシア・ローマに明らかな起源をもつ西洋の都市では、居住区域と生産区域を繋ぐ動線となる街路も、広場の周りの公共空間も、同じように設計の本来の軸に従って配置されている。

アンデスの都市化の場合、中期ホライズンやその後の時代の計画的な外観は一般に、壁で囲まれた部屋状構造が 1 つずつ順番に建設された結果形成された。部屋状構造内部の複雑さは地域や時代によって変わる。よく知られている例として、北海岸のチャンチャンのシウダデーラ (チャンチャンに約 10 ある建築単位) のような囲われた構造や、インカ建築の

カンチャ (Hyslop 1990) を挙げることができる。多くの事例では、部屋状構造の設計や正確な方向を決める際、他の部屋状構造を基準とはしない。部屋状構造はまた、規模や内部の空間組織がそれぞれ違う。しかしながら、方形設計であるため、またチャンチャン (Sakai 1998) やティワナク (Benitez 2009) などの建造物の場合は天文学的な方向の基準と一致している可能性があるため、空間配置が前もって定められたという誤った印象を抱かせる。しかし、チャンチャン (Campana 2006; Kolata 1982, 1990)、ティワナク (Vranich 2006, 2009)、ワリ (図3; Isbell 2001, 2004, 2009; Ochatoma and Cabrera 2010)、パチャカマク (図6; Eeckhout 1999, 1999-2000, 2004a, 2004b; Makowski (ed.) 2006, 2008, 2010, 2011) など、面的発掘が行われた先スペイン期の大センターの規範となる全ての事例では、部屋状構造や、基壇上の中庭 (例えばティワナクの場合) は、比較的の短期間で迅速に建設され、その後、前時期の部屋状構造の隣、あるいはその上にも新たに建設されている。一方で、ピキリヤクタ (McEwan (ed.) 2005)、ピラコチャパンパ (Topic 1991)、アサンガロ (Anders 1986, 1991)、ヒンカモッコ (Schreiber 1992) などのワリの地方行政センターの大部分が、前もって考案された設計図に従って建設されたことも確かである。その設計は明らかに、完全に幾何学的で、建築形態の組み合わせの論理に従っている。さらに、壁を建てるために土地に印された線や、建設の進行段階を示す建設途中の建造物が、状態よく保存されている (McEwan (ed.) 2005; Topic 1991)。イズベルは、中央の中庭を基準として設計が組織されたと述べている (Isbell 2004, 2006)。つまり、中心の中庭を囲んで、同じような方形の建造物が建てられたという。マキューワンは、建設者が限られたレパトリの建築形態を組み合わせ、行政センター内部の空間を組織したことを示した (McEwan (ed.) 2005)。それによれば、中庭の周りを屋根付きの建造物が囲む構造が単位となり、それが隣接して建てられたという。アンダースは、アサンガロでは、暦に関する数を含む非常に複雑なコスモロジーが、部屋状構造の数と対称的配置に物的に示されていると述べている (Anders 1986, 1991)。しかし、強調しておきたいのは、ワリの全ての行政センターでは、規模、組織、また規格化された建築単位 (屋根付きも、屋根なしもある) が、それぞれ異なるという事実である (Schreiber 1992; Schreiber and Edwards 2010)。コンチョパタ (Isbell 2001) やセロ・バウル (Nash and Williams 2005; Williams et al. 2008) のような場合には、設計に明確な計画性が認められない。他方、例えばワリ (図3) やピキリヤクタの場合、動線や居住空間への出入口に従って通りが配置されているわけではないという事実も注目に値する。つまり、壁で挟まれた通りは建物、空間を繋ぐのではなく、全く反対に、広場と内庭を内包する2つの建築複合を分断していると解釈することができる。そして通りは、第3の建築複合に繋がっており、さらに第4・第5の建造物に通じている場合もある。建設者の意図は特定の建築空間へ人々を導くことにあり、複数の建築空間の間を実際に移動する動線を作ることではなかったように見える。この特殊性はワリの都市化に限定されるわけではない。例えばパチャカマク (図6) など、インカ建築でも確認されている (Makowski 2006a, 2006b, 2008b)。近年カンパーナは、チャンチャンでは東と北から記念碑的な中核部に向かって、複数の通りが平行して走っていることに注意を促した (Campana 2006: 156, Fig.124)。しかし、地中海の都市やテオティワカンとは異なり、これらの通りがシウダデーラの部屋状構造を組織しているわけではないことは明らかであり、ましてや不規則に並んだ中規模の居住建築の場合にはなおさらである。

中期ホライズンやその後の時代の居住建築が碁盤目状に設計されておらず、通りに沿って分布しているわけでもないことは明らかである。このことは、地表から観察した場合、面的に発掘した場合のいずれの場合でも確認されており、壁で囲われた記念碑的な建築複合に隣接する居住区域についても当てはまる。つまり、従来の想定とは正反対の調査結果が報告されている。研究が比較的進んでいる例のみを挙げると、ワカ・デ・ラ・ルナ (図 4 ; Chapdelaine 2002, 2003)、ガリンド (Bawden 1990)、パンパ・グランデ (Shimada 1994)、ティワナク (Aldenderfer (ed.) 1993; Aldenderfer and Stanish 1993; Bermann 1994; Couture 2003; Escalante 2003)、チャンチャン (Topic 1990)、プエブロ・ピエホ=プカラ (図 7 ; Makowski 2004; Makowski et al. 2008a; Makowski and Ruggles 2011) では、居住用家屋は中庭単位となっており、それらが集中していたり、あるいは分散したりしている。一般的な印象では、壁で囲まれた記念碑的複合建築とは異なり、住居はいくつかのまとまりごとに、あるいは地区ごとに計画的に設計されたわけではない。各建築単位の方向は土地の起伏に合わせて変化することがある。例えばチャンチャンでは、動線と「シウダデーラ」の間、あるいは動線と 2 次「エリートの家」の間に、特別な関連性は認められない。通りの特殊性を特に明解に示しているのは、ワカ・デ・ラ・ルナ (図 4) の都市複合内にある唯一の通りであり、それによって神殿に隣接する祭祀的地区と、居住・生産域が分断されている。家屋の集合に通じているのは狭い通路であり、それを通って行き止まりの小さい中庭まで行き、そこから住居へ入ることができる (Chapdelaine 2002, 2003)。

ごく最近ガヴァッツィは、アンデス建築の空間組織は、西洋建築やその起源となる古代の建築とは完全に異なる基本概念に従っていると述べているが (Gavazzi 2010)、筆者の提案と合致している (Makowski 1996, 2002)。ガヴァッツィによれば、西洋の伝統では一般的な建築空間の概念、特に都市空間の概念は人間中心である (Gavazzi 2010)。都市は周囲の景観から切り取られた生活の場と認識され、市壁、「ポメリウム (ローマの聖なる境界線)」、周りの帯状の庭によって分断され、農村とは正反対の関係にある。都市とその周囲の自然との対立は、事前に計画化された市街の場合、特に明確に物的に示されている。設計者は、野生で無秩序と考えられる周囲の自然から空間の一部を切り取り、全く異なる文明化された秩序を与え、以前はなかった動線、視覚的に認識するための軸を新たに作り上げた。西洋の都市では方向、移動システムの全てが、権力関係を含む人間間の関係に従い、それを示していた。主要な街路は 1 つあるいは複数の広場に繋がり、広場には主要な公共建築が集中し、都市議会、元老院などの世俗の建造物も、神殿や祭壇などの宗教的空間もあった。

このようなヨーロッパの都市とは異なり、アンデスの都市複合を支配していたのは、コスモロジーを中心とした組織であった (Gavazzi 2010)。都市を設置するために様々な場所が選ばれたが、ほぼ決まって耕作地の外側であった。都市の位置する場所には、マチュ・ピチュやチョケキラオなど行きにくい所や、ティワナクやワヌコ・パンパなど見るからに自然環境が厳しい所があり、そこを訪れるヨーロッパ人は驚くのである。もう 1 つ注目に値する点だが、建造物と建築グループの間の明確な関係が欠如していることがよくある。各建造物は他の建造物とは関係がない、あるいはそのようにしばしば見える。公共的性格の建築空間を扱った調査によって明らかになっていることだが、主要な軸の視覚的方向は、太陽や月が昇るあるいは沈む方向、プレアデス星団、ケンタウルス座の  $\alpha$  星や  $\beta$  星などの星



座の半日出、半日没の方向、水平方向に見える山の山頂、谷間、川の源流、泉、特殊な形の岩などの方向を向いている (Bauer and Dearborn 1995; Benitez 2009; Ghezzi and Ruggles 2011; Janusek 2010; Makowski and Ruggles 2011)。それゆえ、建造物を配置する基準は夜空を含む周囲の自然空間と統合することを意図しており、人間中心的な原理に支配された西洋の都市のように、軸によって、さらには視覚的に想起させ、建造物と建造物を関係づけるという絶対的必要性に由来するわけではない。ジャヌセク (Janusek 2010) は最近、ティティカカ湖周辺の遺跡という具体的事例について、ガヴァッツィ (Gavazzi 2010) と同じような結論に達し、次のように述べている。

「ティワナクの都市的発展は、周囲の環境を抽象化し弱める西洋の都市化とは似ていない。建設者の意図は活動的な景観の要素を再現することであり、それによって自然の力を制御する、あるいは少なくともそれに影響を与える機会がもたらされた。」 (Janusek 2010: 55)

「支配者と臣民の認識では、社会の安寧と権力の正統性は、自然の力と周期に依存し、それは空 (星) と地上 (自然景観の特徴、季節のリズム) における表れを通じて認識することができた。自然の周期を保ち、自然の力を鼓舞することは、なによりも政治にとって必要不可欠なことであった。」 (Janusek 2010: 40)

都市遺跡の計画性、公共建造物の機能というテーマ (それらがなければ都市という名に値しない) は、問題のある他の 2 つのパラダイムと関係しており、このパラダイムに基づいてプロセス考古学の議論がなされている。そのパラダイムの 1 つは、全ての都市社会には世俗的な性格が認められるという想定である。もう 1 つは、神殿と宮殿の二項対立が普遍的に認められる特徴であるという仮定であり、神殿はピラミッド状の形態で、宮殿は直交構造で水平方向に広がるとされる。コリアー (Collier 1955)、シャデール (Schaedel 1966)、ルンブレラス (Lumbreras 1974, 1987) 以降現在まで、都市と国家の誕生は世俗化の進行を意味するという考えが効力を保っている。都市は祭祀センターに取って代わり、宮殿は神殿と入れ替わると想定される。また、アンデスでこのタイプの変化は、形成期よりも後に起こったと考えられてきた。現在、筆者を含む多くの調査者が、世俗化という考え方は、近代の社会的政治的特徴を、あまり根拠のない方法で拡大適用して、先産業社会に一般化した結果であると考えている (Makowski 2000, 2002, 2005a, 2005b, 2008a, 2008b 2010; Rappaport 1999)。この考えと同じ方向性を示しているのが、ジャヌセク (Janusek 2010) やガヴァッツィ (Gavazzi 2010) の調査、タウンティンスユの権力システム、都市化についての堅実な研究の大部分である。経験的な言葉を用いれば、プロセス考古学のモデルを支持する者はいつも次のように考えている。階段状ピラミッド、またおそらく単独の基壇、複数のテラスからなる複合的基壇は常に祭祀的機能を有し、一方で水平に広がった直交設計の計画的な建造物は世俗的な性格を有し、エリートの住居であったり、行政的な性格の機能を備えたりして、信仰とは切り離されていた<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> 例えばカラルの研究ではピラミッドは神殿で、直交構造はエリートの住居とされ (Shady 2003a, 2006)、チャンチャンの研究では「シウダデーラ」は宮殿=行政センターであり、

この前提の妥当性は、いかなる都市複合における発掘調査でも確認されていない。このことを示すには、いくつかの例を挙げるだけで十分である。ペルー北海岸の後期中間期の3つの地域的中心のうち、バタン・グランデ（シカン）では王族の墓を伴う大ピラミッドが分散しており（Shimada 1995）、トゥクメではピラミッド状構造物、中規模建造物が集まり（Heyerdahl et al. 1995）、チャンチャンにおいてのみ直交する計画的設計図が存在する。モーズリー（Moseley and Cordy-Collins (ed.) 1990; Moseley and Day (ed.) 1982）、コンラッド、トピック（Topic 1990; Topic and Moseley 1983）のしっかり論証された解釈によれば、チャンチャンの居住区域は、無秩序に増大しており、家屋や工房や、神殿や宮殿のための労働を行う他の場所がまとまっている。「シウダデーラ＝宮殿」は王が亡くなった後に聖所となり、死後の信仰が行われた。チャンチャンやその外側に住んでいた職人や農民の労働はかなりの程度、首都の儀礼に必要なものを満たすように定められていた。チャンチャンの宮殿建築の多くの部分は、マンチャンやファルフアンなど地方の行政センターでも繰り返し認められる（Mackey 2006; Moore and Mackey 2008）。特に税の徴収（部屋状構造、アウディエンシア、貯蔵庫）と国家の宗教暦による祭祀と関係した建造物が目立つ。植民地時代の記録者によって素描されたクスコのイメージもだいたい同じに見える。記念碑的建造物のある中核部では、2つの広場の周りに、インカ王の親族集団（パナカ）の創始者を崇拝する宮殿、ミイラを納める建造物、神殿が位置した。中核部の外側には耕作の段々畑と分散した村があった。クスコはまた、国家信仰を中心としたシステムの心臓部であり（Bauer 2004）、その世俗的機能と宗教的機能は絡み合っていた。このことを示しているのは、首都の周りの地形を聖化する「セケ・システム」の政治的重要性だけではない（Bauer 1998; Zuidema 2010）。「カパック・ニャン」という立派な道で連結された、ワヌコ・パンパ（Morris and Thompson 1985）、プンプ（Matos 1994）などの地方行政センター、2次行政センター、インカの居住地（例えばビルカスワマン、マチュ・ピチュ；Burger and Salazar (ed.) 2004）、さらに「タンブ」では、「ウシュヌ」という祭壇を伴う広場が建築複合の中心要素となっている。それらの設計は常に地形に合わせてあり、そのためにそれぞれの遺跡における設計は、他の地域では適用できない固有のものであった。それらの遺跡では、方形区画を取り入れることも、放射状の軸の枠組みを採用することも、記念碑的建造物のある中核部の輪郭を神話的動物の形と一致させることもあった（Gasparini and Margolis 1980; Hyslop 1990; Kendall 1985）。記念碑的建造物によって定められた主要な視覚軸は、岩、アパチェタ（積まれた石群）、スカンカ（標柱）、山の頂、湖や、天頂・天底・至点・分点の時に太陽の昇り沈む方向に合わせてされていた（Bauer and Dearborn 1995; Pino Matos 2010; Ziegler and McKim Melville 2011; Ziólkowski and Sadowski 1992）。建造物の設計を規定する軸の選択は実用的な理由ではなく、遺跡の位置と聖なる場所、祭祀的道との間の関係によった。

近代の西洋の伝統で用いられる建築形態の用語や定義をアンデスの現実に当てはめることは難しい（Makowski and Hernández 2010）。このことは、後の時代の記念碑的建造物において実施された体系的な発掘から明らかである。まず、建造物の形態によって、ある遺跡の建造物が、宮殿、あるいは逆に神殿の機能を果たしていたと判断することが可能で

---

ワカ・デル・ドラゴンの基壇は神殿と考えられている（Campana 2006; Kolata 1990）。

あるのかという問題がある (Eeckhout 1999, 1999-2000, 2003; Isbell 2004)。上述したように、確かに後の時代には大規模で複雑な設計の建造物が建てられ、それらは基本的に、祭祀の時に、エリートの代表者や高官が公の前に現れる場であった。社会の膨大な労働力が費やされたことを示すこれらの建造物は、1世代か数世代という短期間に建設され利用され放棄された。このことは、後の時代のこれらの建造物が、ある特定の集団の栄光のために建てられたことによる。つまりそれらは、何世紀もの間にわたって拡張され景観に共同体の威信が刻みこまれた、古期・形成期の神殿の場合とは異なっていたのである。バタン・グランデ (Shimada 1995) やチャンチャン (Pillsbury and Leonard 2004) など多くの場合には、このような建造物に統治者が埋められ、死後その親族集団の成員によって崇拝された。多くの調査者が、こうした建造物を「宮殿」という、アンデス考古学では新しい用語で呼ぶことを適切だと考えている (Christie and Sarro (ed.) 2006; Evans and Pillsbury (ed.) 2004; Pillsbury 2004)。しかし、特異な特徴を有するアンデスでは、活動的な景観が儀礼の舞台であったことを見失ってはならない。スペイン人による征服後に見られたように、儀礼の舞台は大都市の内部の神殿や広場に限定されるわけでは決してない。このことはモチェ (Swenson 2003) やクスコ (Bauer 1998; Zuidema 2010) の事例が示している。景観の中にも同じように、生きている王や王のミイラ、ワカ、神々、様々な階級・起原の祖先を崇拝するために祭祀を執り行う空間があったのである (Dillehay 2004, 2007; Silverman 2002 を参照)。

## 6. パチャカマクとルリン谷におけるインカ期の都市化

ここ 20 年の間にルリン谷のインカ期の遺跡について調査が進んだが、パチャカマク (図 6) の建築の特徴に関する最近の論争は、この論文で提示した視点をよく映し出している。パチャカマクについてはスペイン人が書き残した 16 世紀の多くの史料 (Ravines n.d.; Rostworowski 1992) があり、比較的保存状態の良い記念碑的建造物のある地区内部で考古学調査が行われた。そのおかげでパチャカマクは、神殿とエリートの宮殿を伴うアンデスの首長制社会の中心 (Eeckhout 1999, 2008; Tello 1960; Uhle 2003)、ワリとインカの建設者が設計した都市的密集地 (Patterson 1966: 16; Shimada 1991)、人々の住む祭祀センター (Makowski (ed.) 2006, 2008; Ravines n.d.; Rostworowski 1992:78-87) を定義する際に必ず参照されなければならない遺跡であるとなつて考えられてきた。パチャカマクが記念碑的特徴を有するようになったのは後 5~6 世紀のリマ中期であるため (Patterson 1966; Shimada 1991, 2007)、同遺跡が連続的、あるいは断続的に利用された期間は、チュパシガロ=カラルと同様に、約 1000 年間である。

最近の発掘によって明らかになったことだが (Eeckhout 1999, 2008; Makowski (ed.) 2006, 2008, 2010, 2011; Ramos and Paredes 2010; Shimada et al. 2004)、聖所パチャカマクが現在のような記念碑的外観を有するようになったのは、基本的に、後期ホライズンに集中的に建設活動が行われた結果である。インカ期に建てられた建造物は、以前考えられていたように、太陽の神殿 (プンチャオの神殿)、巡礼者の広場、アクリャワシ、タウリチュンビの宮殿 (Eeckhout 1999; Ravines n.d.) に限定されるわけではなく、通路、周壁、「傾斜路付ピラミット」を伴う様々な方形部屋状構造物、などもある。計画的な外観であるのは、

まさに通りと周壁があるためであることを述べておく必要がある。南北方向に走る通りが1本、東西方向に走る通りが2本あり、それぞれ直角に交わっている。「第2周壁」と呼ばれる堂々たる周壁は、ルリン谷方面からやってきた人々を、2つ並んだ出入口に通して、記念碑的複合に導くようになっている。「第3周壁」も同じ時期に立てられている。日干しレンガでできた短い壁で、その入口は広く、片側が「稜堡」のように内側に出っ張っており、補強されてある (Guerrero in press.)。この2つの周壁の間は、ウーレの先駆的研究以来、都市空間と考えられていた (Shimada 1991)。しかし、ゲレロ (Guerrero in press) と筆者 (Makowski (ed.) 2006, 2010, 2011) の発掘結果に照らし合わせれば、この仮説は放棄すべきである。そこには都市的設計はなく、見つかったのは建設労働者の宿泊所、日干しレンガと壁の外装用の石のブロックの生産工房、工芸品 (おそらく儀礼用道具) の製作場所であった。この区域が利用されたのは後期ホライズンの、周壁が建設されていた間だけである。

「第1周壁」(部分的に太陽のピラミッド、彩色神殿、ウーレの基壇、旧神殿を囲っている)も同様に、層位から判断すると、後期ホライズンのおそらく終末期に立てられている。南側のいくつかの発掘地点の証拠は、この周壁の建設が未了であったことをはっきり示している。インカによる征服以前のこの周壁の古い痕跡が、海岸寄りに存在するという可能性は完全に排除された (Makowski (ed.) 2010, 2011)。このことは、聖なる部屋、つまり建築の特徴によって囲われた特別な空間が存在したわけではないということを示している。

エークハウト (Eeckhout 1999, 2008) と筆者 (Makowski (ed.) 2006, 2008) の発掘の結果によれば、イチマ後期の傾斜路付ピラミッドと壁で囲われた広い部屋状構造は、いくつも隣接して建てられ、それらの多くは短期間に集中的に秩序立って使用され、その後少しずつ放棄された。ルリン谷からパチャカマクの記念碑的建造物へ至る移動システムは、イチマ後期の間に作られ修正されたが (Vallejo 2004)、年代的には部分的あるいは完全に後期ホライズンに対応する (Eeckhout 1995, 1999-2000; Feltham and Eeckhout 2004; Makowski et al. 2008b; Ramos and Paredes 2010)。いずれにせよ、壁の基礎、地山の上から見つかる後期ホライズンの遺物、それに共伴する床、水路の特徴から、記念碑的な2つの入口、およびそこに導く周壁が、インカ行政の主導によって建設されたことはほとんど間違いない。2つの入口のうち古い方からは、南北に走る通りに出ることができ、その通りは2つの側壁に挟まれている。この南北に走る通りの側壁の両側に、方形部屋状構造物があり、それらは傾斜路付ピラミッドを伴う中庭を囲んでいる。その壁の積み方は一様で、第2周壁とそれに伴う出入口の特徴と同じである。出入口の周りの層位は、傾斜路付ピラミッド (それを囲む壁は南北方向に走る通りに東側から接している) が通りよりも先に作られたことを示している。また、傾斜路付ピラミッド1番と4番 (それを囲む壁が通りに西側から接している) は、通りと一緒に作られた。ウーレの研究が出版されてから、ローマの計画的都市においてカルドとデクマヌスという2つの通りを交差させたのと同様に、南北に走る通りがそれと似た東西に走る通りと交差すると想定されてきた。また、この通りが主要な通りとなり、第2周壁と第3周壁にある出入口から、神殿の聖なる部屋と巡礼者の広場まで、訪れた人々を導いたと考えられていた (Eeckhout 2008; Patterson 1966: 115)。しかし、この仮説とは反対に、ウーレ自身が出版したパチャカマクの図面には、彼が「西通り」(Western Street) と名付けた場所に、古い時代の採石による窪みと石くずの

集まりがあったことが記されている。同時代の遺跡カハマルキリヤ (Mogrovejo and Makowski 1999) と同じようにパチャカマクでも、数百㎡もの広い範囲にわたる急激な落ち込みが確認されており、それらは記念碑的建造物の間に位置している。つまり、窪みがあるため、南北に走る通りに沿って旧神殿まで行くことはできない。このことから、外見的な美しさよりも、日干しレンガやタピア用の土や、壁の仕上げ用の石を運んでくる時間を節約する方が重要だったと推測される。

「東通り」(Eastern Street) はまっすぐ走り、側壁で挟まれているため道の保存状態が良く、多くの傾斜路付ピラミッドを伴う中庭に通じている。東通りとは異なり、西通りはウーレの時代にも現在にも、不規則な形の空間があり、出入口の前に立つ壁の裏側に瓦礫や有機物のゴミが古い時代にたまりマウンド状になっている。いわゆる西「通り」はどこにも通じていないのである。このことはラビーネスが的確に観察している (Ravines n.d.)。西通りの現在の地表面は、南北方向の通りと東通りが交差する所の道よりも 3m ほど低く、採石所の底の高さと一致している。そのため、2本の主要な通りを基準とする線によって、パチャカマクの空間を秩序づけることが意図されたことは決してなかったことは、明らかである。南北方向の通りは、旧神殿までのびているのではなく、隣の巡礼者の広場のあたりで直角に曲がり、傾斜路付ピラミッド 2 番に通じている (Franco 1998; Paredes 1988; Ramos and Paredes 2010)。また、この通りから、傾斜路付ピラミッド 12 番や 1 番など他の建造物に横から行くこともできる。

東西方向の通りに平行のもう 1 本の通りは、第 2 周壁に沿ってその外側を走っているが、建設途中で終わっている。その隣の傾斜路付ピラミッド 8 番とともに建設されたようである。後期ホライズンの終わりに地震が起これ、この通りの脇の周壁の一部が壊れ、この通りへの入口は閉じられた。その場を、宿泊所や工房の構造が占め、その隣には建設が終了したばかりの傾斜路付ピラミッド 8 番がある。その場所にはかつて広い入口があり、その片側に第 3 周壁に通じる入口、もう片側には傾斜路付ピラミッド 1 番に通じる入口があった。後者の入口は、傾斜路付ピラミッド 1 番と 4 番の前にある壁で囲われた広い中庭に通じていた。

以上に述べたことから分かるように、パチャカマクには後期ホライズンより前に、計画的な設計は存在せず、その空間組織は時代によって大きく変化した。後期中間期の終わりには、パチャカマクの景観には傾斜路付ピラミッド 3 番 (Eeckhout 1995, 1999, 2003) がそびえており、それは彩色神殿よりもずっと堂々としていた。後期ホライズンの彩色神殿は正面が階段状になっており、保存状態が良く壁画が描かれている。この建造物は「旧神殿」として知られるリマ文化のピラミッドの側面を、自然のマウンドのように再利用している (Franco and Paredes 2001; Paredes 1985)。後期中間期には彩色神殿は比較的簡素な基壇であった。傾斜路付ピラミッド 3 番と彩色神殿の間の空間にはより小規模な他の建造物があったが、その壁は現在では、墓の集中している場所と同様 (Shimada et al. 2004)、後期ホライズンの建造物の下にある (Pavel Svendsen 2011)。後期ホライズンにおけるような記念碑的な通りの存在は確認されていないため、後期中間期のそれぞれの構造物は他からは独立した入口を有していたと想定すべきである。後期中間期の明らかに先インカ期である特徴の時期的変遷は最近の研究テーマであるが、まだ未出版である。

前期中間期と中期ホライズンはじめのパチャカマクの空間組織は、後期中間期とは全く

異なる。旧神殿のピラミッドが景観にそびえ立ち、直交設計の様々な小規模建造物が池（ウルパイアワチャク）の周りに分散していた（Shimada 2007）。見たところ、この3つの時期の記念碑的建造物の空間組織の間には、何の連続性も認められない。パチャカマクで一見「聖なる都市」に見える外観が形成されたのは、インカの時代に計画的な設計がかぶせられたためであることを強調したい。この時代に、周壁、壁で囲われた大広場、側壁に挟まれた通りが、それ以前の時代の日干しレンガ製の建築の上に建てられた。こうした印象は、建設労働者や巡礼者の残した宿泊所やゴミ捨て場の範囲が広いことから裏付けられる。先インカ期のパチャカマクは、カラル=チュパシガロとある意味で似ている。両遺跡では、谷の中で目立つ砂状の高台の上に、ピラミッド型の建造物が比較的無秩序に散らばっており、ピラミッドのそばには直交構造の建造物が水平に広がっている。

クスコ様式の建築がなく、後期イチマの日用土器（粗製土器）が多いという在地の特徴のために、当初は後期中間期に時期比定されていた先スペイン期の遺跡が（Eeckhout 1999; Feltham 1983）、ここ20年の間に、実際にはインカ行政の主導によって建設されたことが明らかになった（Álvarez-Calderón 2009; Feltham and Eeckhout 2004; Makowski et al. 2008b; Pavel Svendsen 2011; Ramos and Paredes 2010）。パチャカマクやトゥクメでは、現地の労働者は自分たちの知識を用いて、ミタ（インカ帝国で課された労役）による義務労働を果たし、首長や特権集団の住居、集まりの場、倉庫、神殿を建設した。これらの建造物の多くは地域的特徴を残している。例えば傾斜路付基壇が多く、それを規模に関係なく「傾斜路付ピラミッド」の категорияに含めることが多かったため（Eeckhout 1999）、当初の時期比定が混乱したのである。編年が見直された結果、ルリン谷におけるインカの存在の性格の理解について、重大な影響がでた。現在では、帝国行政によって大規模に建設作業が進められ、新しい建造物が作られ古い時代の遺跡が完全に改変された結果、ルリン谷の景観が変容したことは明らかである。

パチャカマクは当然ルリン谷で最大面積の遺跡で、建造物の規模も最大である。ルリン谷で登録された後期ホライズンの他の遺跡が全て、パチャカマクの壁で囲まれた範囲に収まってしまふかもしれない。しかし、今までのところ、人々が恒常的に生活した居住建築のある地区は見つかっていない。「タウリチュンビの宮殿」と遺跡の東側に分散しているいくつかの建造物が、エリートの住居の機能を果たした可能性があるだけである。後期ホライズンに使用された傾斜路付ピラミッドを伴う中庭は、様々な訪問者集団が集うための場だった。いくつかの集団は食べ物などを貢納品や奉納物として持ってきた。これらの物資はピラミッドの裏側によくある広い倉庫に収められた。調理場や、調理やチチャの運搬のための日用土器の大量の破片があるため（Feltham and Eeckhout 2004）、ここでもてなしの準備がされたことを示している。また、穴の中に多くの奉納品（パゴと呼ばれる）が納められたことや（Farfán 2004）、倉庫が墓としてしばしば再利用されたことは、これらの建築空間が聖なる性格を有していたことを証明している。神殿の1つ（サル神殿）はピラミッド3番に隣接している。傾斜路付ピラミッド1番、2番、4番、12番は特権的な位置を占め、それぞれ広い中庭の中にあり、そこに行くにはパチャカマクの周壁の入口から直接入る（1番や4番）か、記念碑的な通路を通して入る（2番、12番）。そのため、これらの建造物が、ルリン谷側から聖所に入った訪問者を迎えるためにあったことは疑いない。

登録されている全ての傾斜路付ピラミッドは、一般的設計図、屋根付きの部屋・屋根な

しの部屋の分布、倉庫の分布などの点でそれぞれ異なる (Eeckhout 1999, 1999-2000)。しかしながら、この種類の建造物は全て、多少の違いはあるものの、空間組織の機能に関する同一のコンセプトに従って繰り返し建設されている。記念碑的性格の屋根付きの部屋は、いつも最も高い基壇上に位置し、倉庫とは離れている。各建造物の中核部には、中心に傾斜路を伴う1段の基壇、あるいは階段状基壇がある。また建築複合は高い周壁で囲まれている。基壇の前面には広い中庭が作られ、一般に入口は1つである。上述のことから、これらの建造物が大衆の集まる劇場のような場であったことは明らかである。そこでは、台や基壇、あるいは参加者を日差しから守る柱などによって、地位の差が際だたせられた。他方、権力の二元組織を示すような空間組織もよく見られるが、これは中央海岸の共通の特徴である (Rostworowski 1983)。例えば同じ空間の中にあるそれぞれ異なる方向を向いたピラミッド(1番、4番)、2つの中庭、2つの基壇(1番と2番)などである。この種の二元組織はより規模の大きい建造物に認められる。

同じく明らかなことだが、後期ホライズンには複数の部屋が同時期に使用され、その上同じアクセス(例えば南北方向の通りと東の通り)が共有された。また、全ての方形部屋状構造に傾斜路付ピラミッドがあるわけではないことも想起すべきだろう。このような建造物の構造上の違いを考慮すれば、建造物の用途はそれぞれ異なっていたようだ。しかし、こうした観察は全て、パチャカマクの直交構造の記念碑的部屋状構造は、出身も地位も異なる様々な人間集団のためのものと認識されていたという結論に繋がっている。また、各集団がなぜそこにいたか、その理由も同じではなかったかもしれない。エークハウト (Eeckhout 1999, 2004a, 2004b)、ファルフアン (Farfán 2004)、フランコ (Franco 1998)、パレデス (Paredes 1988)、ラモス (Ramos 私信) が発見したコンテクストからは、土器職人、チチャ醸造者、ラクダ科動物を管理し生け贅用の個体を選別した牧民など、様々な役割の人間がいたと思われる。建築複合は人々の動きを、出身地方、半族、パルシアリダ(人間集団の部分単位、千世帯程度を指すことが多い)、さらにはアイリュ(祖先を同じくする集団単位、百世帯程度)に従って、また特定の役割に応じて組織化した。

他方、パチャカマクが活発な建設活動の舞台であったことについては、筆者はエークハウト (Eeckhout 1999, 2004b) と同意見である。イチマ中期・後期の細かい編年がまだないため、パチャカマクの発展の順序と各建造物の建設順序について合意があるわけではない。しかし、いずれにせよ、各サパ・インカ(インカ王)が建造物と通りの建設を進めたということは十分あり得る。また、中央海岸に住んでいた首長と民族集団との間の権力関係がインカによる征服前と後で変化し、遺跡の空間組織にその痕跡が残されている可能性も、考慮する必要がある。編年に関する論争は別にして、筆者にとって明らかなのは、傾斜路付ピラミッドについて、宮殿や在地の神の神殿であるという解釈 (Eeckhout 1999, 1999-2000) は、その機能を説明するのに説得的なシナリオではないということである。この傾斜路付ピラミッドが奉納を捧げ、死者を埋葬し、祖先を崇拜するための聖なる場、ワカであることは殆ど疑いない。他方、これらの建築は祭祀の時に支配者が公の前に現れるのには完璧な舞台であった。また、傾斜路付ピラミッドがイチマの首長の主要な住居として建設され、多くの人々が住んだ (Villacorta 2004, 2010) という解釈もありそうにない。こうした視点から見ると、パチャカマクには人口の多い首都、都市センターという特徴が欠如している。「人々の住む祭祀センター」という用語は、都市という言葉よりもずっと適切

に、後期ホライズンのセトルメント・システムにおけるパチャカマクの役割を説明している。

ルリン川流域で実施された遺跡分布調査の結果から (Feltham 1983; Patterson et al. 1982)、ルリン谷の人々は前期中間期のはじめから限られた範囲内で分散して居住し、居住地は等間隔で分布し、耕作地と明らかに結びついていたことが判明した。後期ホライズンには、しばしば 10 ヘクタールを越える広まりを有する大建築複合が建設され、景観が変容した。これらの遺跡には住居＝中庭の単位がいくつも見られる。パンパ・デ・ラス・フローレス (Eeckhout 1999, 2003) やパンキルマ (López-Hurtado and Nesbit 2010) など、それらの多くには傾斜路付ピラミッドがあり、他の遺跡とは異なっている。それらは形態の面ではパチャカマクの傾斜路付ピラミッドに類似しているところもあるが、規模はより小さい。パンキルマ (López-Hurtado 2010, 2011)、ワイカン・デ・シエネギリャ (Álvarez-Calderón 2009)、プエブロ・ビエホ＝プカラ (図 7; Makowski 2004; Makowski et al. 2008a, 2008b) の 3 つの遺跡は、記念碑的建造物が比較的大きく、公共建築が存在するため、それらの建築複合は文献でしばしば都市的とされてきたが、最近の発掘調査によってそれらの様々な特徴が疑いなく居住的性格を示すことが明らかになった。

ロペス＝ウルタドは、パンキルマの広まりを 30 ヘクタールと見積もっている (López-Hurtado 2010, 2011)。建築の特徴から判断すると、この遺跡は 3 つの区域から構成されている。第 1 区は、遺跡の中央に位置し、他の 2 つの間にある。小規模な傾斜路付ピラミッドが 3 つあり、それに関連して迷路のように密集した部屋状構造があり、エリート居住域と解釈されている。第 2 区は最も広く、複数家族用の住居が集まった単位が 15 ある。各単位には、屋根付きの部屋状構造、墓室、様々な小規模な中庭などが多くあり、周壁で他の単位とは分断されている。ピラミッドに近い所にある建造物とその他の建造物の間には明確な違いはない。いくつかの単位の間には、建設されたわけではないが不規則な空間が残されている。しかし、厳密な意味での通りを構成してはいない。遺跡はあらかじめあった計画に従って拡大したわけではない。ロペス＝ウルタドは、各家屋は家族の増大に伴って外側に拡張したと考えている (López-Hurtado 2011)。作物乾燥用の台、おそらく社会的地位の低い人々の居住地、臼と貯蔵施設のある活動域が、遺跡の上半分を囲んでおり、斜面や支流の河床に分布している。ロペス＝ウルタドによれば、利用時期は層位的に 2 時期に分かれ、イチマ後期の土器が共伴する。地方インカ様式土器の割合は、2 時期目に増加する。

パンキルマのように、ワイカン・デ・シエネギリャは 1 つの支流内の堆積土の上に広まっている。ルリン川の反対側、つまり左岸に位置しており、約 18 ヘクタールの広まりである。全ての建築時期、利用時期は後期ホライズンに対応することが確認された (Álvarez-Calderón 2009)。先スペイン期の建築の一部は壊れ、ワイコと呼ばれる土砂崩れに覆われた。一見すると、これらの 2 つの遺跡は類似している。ワイカン・デ・シエネギリャは、およそ 15 ある複数家族の大きな居住単位からなり、墓室と貯蔵施設を伴っている。遺跡にはまだ傾斜路付基壇が残っている。斜面や一番高い部分は作物乾燥用の台、活動域で覆われており、おそらく地位の低い人々の居住構造もある。しかし、類似性はあるが、顕著な違いもある。最も重要な違いは、傾斜路付基壇の役割に関してである。この建造物は、パンキルマの場合と異なり、公共の祭祀的性格の建造物の内部にはない。ワイカ



ン・デ・シエネギリヤでは、傾斜路付の低い基壇を伴う中庭の周りを囲んでより複雑な建築の居住構造がある。アルバレス＝カルデロンは、外からこの中庭に入るアクセスが意図的に非常に制限されていたことを確認した (Álvarez-Calderón 2009)。むしろ空間は、出入口や通路によって、他の家屋の部屋と互いに連結されていた。従って、これらの特別な空間は、居住していた各拡大家族によって組織された、それらの集団内部の祭祀のために用いられたと考えられる。

プエブロ・ビエホ＝プカラ (図 7) は、12 ヘクタールに建造物が分散し、段々畑や周辺の小遺跡が 26 ヘクタールを占めている遺跡である。全体の広がりには約 40 ヘクタールである。インカによる征服後に居住されたルリン谷の遺跡の中では最も広く、住居的性格の遺跡で、現在まで保存状態よく残っている。ルリン川左岸の迷宮のように入り組んだいくつもの支流の中に位置し、それらの支流はアンデス山脈から延びている尾根に切り込んでいく。海岸に近い所にある最も高い丘 (ロマス・デ・プカラ、マンサノ) との位置関係、および海拔 400-600m という標高のおかげで、ロマス現象 (霧で覆われる) が生じる好条件が整っており、6、7 月から 10、11 月までの川の水位が低い間、この付近一帯はイネ科の植物、灌木、ミトと呼ばれる低木、野生のパパイヤでびっしり覆われる。タラやグアランゴという木もわずかだがある。過去には斜面に、アカシア、ルクマ、メスキートなどの木があった。

発掘調査は「ロマス・デ・ルリン」考古学プロジェクト (セメントス・リマ会社とペルー・カトリック大学の協定によるもので、発掘調査実習も兼ねる) の一部として、筆者が指揮し、1999 年から続けられている (現在は「パチャカマク谷考古学プロジェクト」に名称変更した)。これまで遺跡の 5 つの発掘区で 12000 m<sup>2</sup>以上の面積が調査された。記念碑的建造物の 1 つで放棄後の層からガラス製の玉 2 つが見つかっており、おそらく第 1 首長のものと考えられる住居があるが、釉薬のかかった陶器は欠如している。このことは、ルリン谷にスペイン人征服者が現れたすぐ後にこの遺跡が放棄されたことを示している。また、居住複合の内部でもそれに関連するゴミ捨て場でも、地山直上の最初の層から特徴的な地方インカ様式土器が見つかるため、この遺跡が後期ホライズンに建設されたことは明らかである。大部分の地区で層位的に 2 時期設定されているが、いずれも後期ホライズン (後 1470～1533 年頃) に対応する。建造物の崩壊を引き起こした地震が、第 1 期の終わりを示している。その後、遺跡は同じ建築伝統、一般的空間組織を維持し再建された。

この遺跡が、ルリン谷の上流域から海岸方面にミティマエス (インカ帝国の支配下で移動させられた集団) として連れてこられた、山地の住民によって建設されたことを、次のような特徴が示している。まず、丘の中腹に建造物が集中する。次に、現在まで山地のサント・ドミンゴ・デ・ロス・オリェロスの牧民が利用する牧草地帯に遺跡が位置している。さらに、壁の石組みが中央海岸では知られておらず、ワロチリ地方の高地で広く見られる。また、生活空間組織の基本設計、埋葬の特徴、出土土器に山地の要素が認められる。そのため、エスノヒストリーの証拠と完全に一致している。史料は、カリングス・デ・ワロチリの人々を、ルリン谷の左岸に住んでいた先住民のマクロ・アイリュの 2 つのパルシアリダのうちの 1 つとして言及している。カリングスの人々はインカス・デ・シシカヤの人々とともに洗礼を受け、もう片方のパルシアリダのイチマ＝カリングよりも特権的地位を保ち続けた (Makowski 2004)。

「ロマス・デ・ルリン」プロジェクトで詳細が明らかになった遺跡の空間組織も、山地でよく見られる特徴を示している。遺跡の半分は丘の上に広がり、もう半分は丘の両側にある2本の支流沿いの低い部分にあり、2本の支流は合流してケブラダ・デ・リオ・セコ（別名ケブラダ・プエブロ・ビエホ）となる。半分の丘の上にあるため難攻不落の要塞という外観を示し、そのためケチュア語で砦を意味する「プカラ」という名にふさわしい。

遺跡には居住建築のまとまりが4つあり、それぞれが平均200～300m離れている。そのほかに直交設計の複合構造が2つあり、中庭と貯蔵用の広い空間を伴い、エリートの住居という特徴を有している（Makowski et al. 2008a）。さらに山地から来る道沿いに、小さな衛星遺跡が2つある。4つの居住建築群の2つとエリートの住居の1つは遺跡の高い丘の上に位置し、そこから海岸方面に目を向けると、ルリン谷の入口と、パチャカマク聖所に南側から入るアクセスがよく見える。4つの居住建築群の残り2つと、2つあるエリートの居住建築のうちより記念碑的な建築の方は、ケブラダ・プエブロ・ビエホから分かれた支流の奥に隠れ、2つのプカラ（砦）の裏にあり、氷河地形のモレーンに類似した古い時代の土地の隆起によって形成された自然の周壁に守られている。遺跡の立地は攻撃の面でも防御の面でも戦略的である。居住建築群のそれぞれは、多くの広場単位で構成されており、各単位には3つから5つの家屋群があり、家屋の入口は、部分的に壁で囲われた不規則な形の広い共有空間に面している。

一般的な家屋建築とエリートの住居は、同じ基本設計に沿って配置されている。1つの基本単位は1本の通路両側に配置された2つの方形の部屋であり、各部屋は2層構造の倉庫を2つずつ伴い、倉庫間も短い通路で繋がり、全体が1列に並んでいる。しかし、倉庫の1つの位置がずれて、一直線ではなくL字形の配置となっている場合も多い。各居住複合を建設する際には、はじめに倉庫が建てられた。倉庫は2つの部屋を分け、時には隣接する家屋との区切りとなっているが、それだけでなく残りにくい素材でできた勾配の緩い切妻型屋根の支えにもなっている。床面付近などにある小窓は石板で閉じられているが、それが倉庫内部に入る唯一の入口である。外側からこうした基本設計に従った建築単位に入ると、2つの方形部屋のうちの1つに出る。遺跡で最も多く見られる形態は、建築の基本単位が全て揃った形である。特権的な位置を占める家屋のいくつかには、正面にベンチを伴う柱付テラスがある。

我々が発掘した3つの構造物（うち2つは直交構造）は、疑いなくエリートの住居であり、2つから6つの基本建築単位から構成され、それぞれが柱付テラスを伴い、共通の中庭に向いている。また外側からの出入りは制限されている。それらは中庭に大きな調理場を伴う唯一の例であり、共食のために大量の飲み物と食べ物が準備された証拠がある。これらの建造物のうち最も大きなものは記念碑的外観を呈し、広い中庭を3つ伴い、生活用の部屋や広い家畜用の囲いなどが付随している。2つの中庭は生活地区と繋がっておらず、スポンディルス貝が見つかっており、中心に岩があることから、祭祀的機能を有していたと思われる。

居住複合の大部分には、埋葬区域も見つかっている。倉庫のいくつかは墓室として再利用され、複数の遺体が見つかっている。以上の証拠から、都市的遺跡（プエブロ・ビエホ＝プカラ）における支配的な社会関係について次の3つの仮説を提示することができる。

- ①同じ中庭に面した居住複合の居住者は、おそらく血縁関係、もしくは十分に強い親族関係で結ばれており、そのため同じ建築複合内、さらには同じ墓室内に埋葬された。
- ②居住者の政治的地位と同じ建造物の居住者（親族？）の数の間には、おそらく直接的関係がある。つまり人数が多いほど、家族の長の地位は高い。この結論は、地位の指標となる遺物の量と質からも引き出される。つまり、地位の指標となる遺物の数は計画的な直交設計の大規模建造物の中では、劇的に増える。
- ③上の2つの仮説から第3の仮説が導かれる。遺跡の空間組織は、山地によく見られる社会組織を想起させる。つまり、上と下の2つの半族があること、それぞれに2つの地区（合計で4つのアイリュ？）があること、そして、そのほかに宮殿のような大きな住居があり、いくつかの建造物が付随していること（第5の支配的アイリュの長の住居？）、である。

プエブロ・ビエホ＝プカラを建設した人々が山地出身であるという結論は、遺跡の空間組織や、埋葬儀礼の特徴のみに基づいているわけではない。パンキルマやワイカン・デ・シエネギリヤなどの、ルリン川下流の後期ホライズンの記念碑的建造物を有する他の遺跡と比較すれば、同じ結論に達する。プエブロ・ビエホ＝プカラはそれらの遺跡とは、石組みも建築設計も似ておらず、逆に隣接する山地のワロチリの建築と類似している。

各居住建築群の特徴は、それぞれの建築群の居住者が別の建築群の居住者とは別に生活していたことを示している。未発表の自然人類学的研究も同様の結論に達している。地位の高い集団は第II区の宮殿的建造物と第I区に生活しており、両区は遺跡の低い場所に位置し、その隣に家畜を選別し交配させるための囲いがある。川の水位の低い時期にはすばらしい牧草が近くにあり、パチャカマク神殿にも近く、ワロチリの牧草地への道沿いにあるため、この地区の居住者が同神殿の家畜の管理をしていたということは十分に考えられる。一方で、遺跡の下半分の第II区に位置する、共同体の作物用乾燥台と倉庫を伴う広い活動域は、この遺跡の住人が基本的に農業に携わっていたことを示している。第IV区では、石製棍棒頭の製作工房、および尖頭器が保管された場所がよくみられ、また丘の上の明らかに防御的な立地からも、そこの住人は戦士エリートであったのではないかと考えられる。非常に特殊な内部設計のエリートの居住構造が2つ、尾根上の神殿の脇に位置するため、住人の地位が特別で、祭祀的であったことを示している。これらの建造物が第V区に対応する。

公共的な性格の建造物は、1つの区に集中しているわけではない。公共生活の心臓部には、下半分に位置する宮殿、すなわち第1首長の住居がある。この住居の西側には、壁で囲まれ、互いに連結された大きな広場が2つある。この2つの広場にはウシュヌという基壇が構えている。この基壇からは、尾根上の神殿の方向を向くと、2つの塔の間からリヤマの星座が現れるのが見える（Makowski and Ruggles 2011）。これらの広場は宮殿の中心の中庭に繋がっており、そこで饗宴が催された（Makowski et al. 2008a）。ウシュヌから下に、ワンカ（崇拜対象の石）を伴う祭壇も見え、その隣に家畜用の囲いがある。第II区の大広場は2番目に重要な公共の場であり、基壇と集まり用の屋根付きの建造物に囲まれていた。この広場は植民地時代初期に遺跡の公共の中心になり、その後すぐに放棄されたのではないと思われる。放棄後宮殿はただの地区の1つになり、ウシュヌと広場は機能を停止し

た。主な祭祀は、宮殿と神殿で行われたようである。神殿はロマス・プカラという険しい尾根上の 2 つの丘の間の鞍部に位置している。そこから遺跡の大部分を見渡すことができる。

神殿は 1 つの基壇と 2 つの円形建造物からなり、各円形建造物にはそれぞれ入口が 2 つある。建築の特徴やおそらく信仰の対象であった場に捧げられた奉納から、建築複合の祭祀的機能が推測される。基壇を建設するため、北側に高さ約 1.5m の土留め壁が立てられた。土留め壁には 8 段の記念碑的階段があり、それが唯一の正式な入口となっている。他の三方から祭祀地区には何の障害もなく入ることができるため、この階段にはむしろ象徴的な意味があった。円形構造物は、プエブロ・ビエホ＝プカラ遺跡全体で唯一の例である。1 つは意図的に成形された張り出した岩を囲んでおり、もう 1 つには円形の窪んだ痕跡があり、そこにはおそらくワンカがあったと思われる。両構造物の内部空間は狭いため、ワンカの周りを、ましてや岩の露頭の周りを、簡単に歩くことはできない。そのため、円形構造物に入口が 2 つある理由は、あらかじめ設定した方向から光を取り込むためであったことが分かる。

岩の露頭に刻まれた穴や壁龕からは奉納物が見つかっており、金属の板、金属の垂れ飾り、スポンディルス貝製のビーズと破片、ラクダ科動物の骨、調理用・給仕用・食器用の土器が含まれていた。同様に、床面付近では、スポンディルス貝の多くの破片と、金属の小破片が見つかった。また、直接共伴はしていないが、壁が崩壊した後の地表付近の層から、信仰の他の証拠が見ついている。特に言及に値するのは、トウモロコシの形をした石製コノパ（代々受け継いだ信仰の対象物）、スポンディルス貝の貝殻、ビーズ、加工片などである。完成品も加工破片もあるため、専門職人がここで奉納品を作ったと考えられる。またこの建造物の近くには一時的な製作工房の痕跡は見つかっていない。第 1 円形建造物の西にある第 2 円形構造物の中心にある穴には、おそらくワンカが立てられていた。その穴からはスポンディルス貝の加工片多数が、床面付近と構造物崩壊後の上の層から見つかっている。

第 IV 区の小宮殿は、おそらく上半分の首長の住居であり、内中庭と外中庭を伴っている。これが第 3 番目の公共生活の核である。第 II 区の主宮殿と同様に、広い調理場、多くの倉庫、および多くの人々をもてなした証拠が見ついている。

ここまで概略した 3 つの遺跡の事例は、インカ行政によって設置された遺跡パターンの特徴をよく映し出している。居住用家屋の特徴と空間分布の違いは、インカの行政官が多くの集団をミティマエスとしてルリン谷に移住させたという明白な証拠となっている。プエブロ・ビエホ＝プカラの集団などは近隣の山地から、他の人々はおそらく中央海岸の他の谷から連れてこられた。各遺跡、各住居単位で共通に見られる死者崇拜の証拠から判断すると、地縁・血縁共同体ごとにまとまった複数の家族が、広い耕作地、牧草地の管理を担っていたと考えられる。都市的に見える広大な遺跡の住人は、活動内容の点では他の住人と変わりはない。全ての住人は、典型的な農民生活の活動に携わっていた。おそらく全員が収穫、乾燥の労働を行っていた。しかし、倉庫は拡大家族の各家屋にあった。パンキルマの事例の傾斜路付ピラミッドや、第 1 首長や第 2 首長の住居は、インカ帝国が課した労役によって生産された物資が蓄えられた場所であったことは疑いない。これらの生産物の大部分は最終的にパチャカマクまで運ばれ、大きな祭祀で使用され、再分配されたと思

われる。

フルタイムの専門労働者はパチャカマクには住んでいなかったし、ましてやルリン谷の他の遺跡にもいなかったようだ。土器、織物、金属器の生産に関する現在までの研究は、ある親族集団、個人、共同体が、その家族の他の成員の助けを受け、製作活動に優先的に従事したことを示している。ルリン谷はタウンティンスユのなかで「都市的」特徴が非常に色濃く認められる谷の1つであるが、その景観は本質的には「農村的」であった。カパック・ニャン（インカ道）の支道が、山地の人々の偉大なるアプ（信仰の対象であった山の頂）であったパリアカカと、パチャカマクにおける海岸（ユンガ）の人々の神々とを結んでいた。国家に対する義務は、疑いなく祭祀暦の中に位置づけられていた。小地域レベルの祭祀は各首長の住居で行われ、大地域レベルではパチャカマクで催され、物資を交換し、奉納物を捧げ、贈り物をする機会となっていた。インカ期のルリン谷では行政官、貴族、職人が恒常的に生活する都市と、質素な農民が生活する農村という区分はなかった。

確かに政治的地位と生活条件に関しては違いが認められる。最も大きい家族は、親戚の数が多く、住居も広く、より大きな権力を有し、その力は他の人々をもてなし、祖先を崇拜する能力によって表された。プエブロ・ビエホ＝ブカラでは、これらの「有力な」家族の家屋は、IからIVの全区にあり、中庭と4つから6つの屋根付き住居が配置されていた。未発表の比較研究は、現在のところ、これらのエリートと他の人々との間で、奢侈品や食料の利用に大きな違いはないことを示している。第II区の主宮殿の発見物と他の区の証拠を比較すると、違いが目立つ。しかし、この場合であっても、首長が集める努力をした物資は、その後多くの祭祀や饗宴の際に、影響力のある家族の長の間で分配されたのだろう。

## 7. 結論 「反都市的な」システムとしてのアンデスの都市化

アンデス、メソアメリカ、近東における都市化の現れを比較検討した結果、筆者は、コーギルの考えと一部重なる結論に達した (Cowgill 2004; cf. Smith 2003 (ed.)). 共通するのは、様々な社会の事例が極めて多様な社会政治的、経済的組織を示しており、そのため都市かそうでないかを定義することは完全に論点がずれており、その試み自体が有効ではない、という点である。コーギルは次のように述べている。

「全体のサイズや文字の使用といったいかなる単一の基準も適切ではなく、全ての都市を全ての非都市から明確に分けうるような基準を確立しようとするよりも、むしろいくらかファジーなコア概念を用いることの方が最善であるように思われる。私は、都市をさしあたり次のように曖昧なかたちで定義する。すなわち、1つの社会によって占められた大きなテリトリー内の恒久的な居住地であり、相当な規模の居住者がそこをホームであるとみなし、彼らの活動、役割、実践、経験、アイデンティティ、態度は、その居住地の外の「農村」的地域と密接に結びついているような当該社会の他の成員のものとは顕著に異なる、と」 (Cowgill 2004: 526)。

このコーギルの広くとても実用的な定義でさえも、上述したインカ期のルリン谷の事例には当てはまらない。先スペイン期アンデスにおいては、都市の住民と農村の人々という区別は存在しない。クスコの貴族、パナカの成員が常に首都の密集地の外側に様々な居住地を有しており、農業活動におおいにそしんでいたことを理解するためには、植民地時

代の記録文書や裁判記録を読むだけで十分である (Makowski and Hernández 2010; Sherbondy 1986)。グアマン・ポマ・デ・アヤラや他の記録者の著作において、国家の祭祀暦が農事暦と密接に結びついていたことは偶然ではない (Ziólkowski and Sadowski (ed.) 1989; Zuidema 2010)。こうした帝国の首都の特殊な特徴は、ロウが先駆的に指摘しているが (Rowe 1967)、豊かな先スペイン期アンデスの他の地域、他の時代にも繰り返り認められる。パチャカマク、クスコ、カラルの比較、そして本論文で提示した他の判断要素から、筆者の次のような印象が裏付けられる。先土器時代後期 (先土器形成期)・草創期の「人々の住む祭祀センター」に、都市的内容を見取る仮説では、記念碑的建造物の機能を適切に説明できないし、ましてやこうした現象が中央アンデスに例外的にそして「非常に早く」現れた理由を説明することはより難しい。「人々の住む祭祀センター」を都市とみなす仮説では、それらを建設した人々に彼らが持ち得ない特徴を付与してしまうため、その背景となる社会的経済的組織を理解することにもならない。例えば、この仮説によれば、人口密度が高く、非常に安定した定住生活を送り、物理的・社会的な意味で移動性が殆どなく (規則的な移動はなく、社会階級間の対立関係も変化しなかった)、「都市民」と考えられる人々の食糧供給を確保するための制度化された商業が決定的役割を担っていたと想定される。このような仮説に対して、本稿では、証拠に裏付けられた、別のシナリオを提示した。

初期の記念碑的建造物を構成する建築群の形式的な密度の高さは、信仰に関わる必要性から説明できる。例として、饗宴、断食、踊り、神殿共同体への貢納、奉納物、犠牲、イニシエーション儀礼、神託を受ける空間、などを挙げるができる。同じ祭祀センター内、あるいは複数の祭祀センター間で、面積、建造物の体積、連続的に利用された期間は異なるが、それはその場の恒常的な人口数と直接比例するわけではなく、定期的に訪れる人の数、従ってセンターの宗教的政治的威信と関係している。共同労働による記念碑的祭祀空間の建設活動 (1つの共同体、あるいは複数の共同体の連携による)、その維持、時々のはげは、こうした文脈で、記憶を物質化する仕組みとなった。それは儀礼的親族関係に立脚し、この繋がり自体も建設維持活動によって構築され、儀礼を共に行うことによって定期的に正当化された。おそらくこの種の親族関係によって、かなりの程度婚姻関係が規定され、様々なものの恒常的な交換が可能となった。交換されたのは、生産物、原料、他の共同体の土地の通行権、そしておそらく、同盟関係にある他の共同体によって統御された土地での耕作権などである。こうした視点から見ると、早期の記念碑的建造物の建設現象は、中央アンデスにおける特殊な「反都市的」(筆者の定義による)システムの先駆けとして理解できる。このことは、先土器時代の祭祀センターとインカ期のパチャカマクが比較的似ていることが示している。この2つの事例、および本論文で分析した全ての事例では、首都と神託のための聖所は、人々の住む祭祀センターという特徴を共有している。

この中央アンデス独特の都市化は、実際には、コスモロジーを中心として進んだ。基本的に祭祀に用いられた公共建造物、神殿、宮殿、祖先崇拜用のモニュメントは、都市的設計に従っているわけではないし、必ずしも首都の記念碑的センターのみに集中しているわけでもない。全く逆で、各建造物はその他の建造物から独立しており、しばしば視覚的軸と結びついた固有の方向を有し、それらの軸は景観内にある聖所の方向や、太陽、月、星座などが現れる方向を指し示していた。各建造物はそれを利用する人々によって建設され、また維持されたようだ。利用の周期は短く、改修は頻繁であった。建設・改修は決して終

わることはなく、決定的なものでもなかった。公共建造物も信仰の場も、西洋の人間中心的な都市化の場合のように、人々が生活していた場に必ずしも集中するわけではない。逆に、建造物は宗教祭祀の舞台として景観を組織する一助となった。非常に特殊なこのシステムは、アンデスにおける生活の社会的現実、技術的経済的側面と非常に整合しているのである。それは社会生活の物質的表現であり、この社会では基本的な食料生産活動を行う共同体組織が技術発展に伴い衰退することはなかったし、1人の個人、つまり核家族の長(家長)が政治や経済の面で親族関係よりも上に位置づけられることもなかった。またアンデスの「反都市的」システムと経済組織の間にもしかるべき整合性が認められる。アンデスでは、商人が自分たちの資本を投資する商業の代わりに、交換、国家による再分配、贈与が効果的に機能していた。このアンデス的システムでは、土地や家畜は必ず共有された。西洋で有用であったモデルとは距離を置き、「アンデスの都市化」の例外的な特徴を十分に理解し、複雑な人類史に対してアンデス文明が果たした独自の寄与を妥当に評価することが必要だと、筆者は考えている。

## 謝辞

筆者は、本論文を日本語に訳した渡部森哉氏に感謝申し上げます。また渡部氏には日本滞在中に大変お世話になった。

## 訳者註

アンデス考古学では2種類の時期区分が用いられており、本論文ではその2つが両方用いられている。

1つはアメリカ人が一般的に用いる編年である。先土器時代前期・中期(前2700年以前)、先土器時代後期(前2700~1800/1500年)、草創期(前1800/1500~800年)、前期ホライズン(前800~200年)、前期中間期(前200年~後600年)、中期ホライズン(後600~900年)、後期中間期(後900~1450年)、後期ホライズン(後1450~1532年)という名称が用いられる。

もう1つは、古期(前1800/1500年以前)、形成期(前1800/1500~50年)、地方発展期(前50~後600年)、ワリ期(後600~1000年)、地方王国期(後1000~1450年)、インカ期(後1450~1532年)という編年である。

従来、古期と形成期の区分は土器の有無により、前1800/1500年頃とされていたが、祭祀センターの有無によって、前2700年に設定し、前2700~1800/1500年の時代に「先土器形成期」という時期名称をあてることを著者は提案している。ちなみに日本の研究者は、この時代を「形成期早期」という名称で呼んでいる。

## 訳者謝辞

松本雄一氏には本訳文を原文と照らし合わせチェックして頂いた。記してお礼申し上げます。

参考文献

Adams, R. M.

1966 *The Evolution of Urban Society. Early Mesopotamia and Prehistoric Mexico.* Chicago: Aldine.

1981 *Heartland of Cities: Surveys of Ancient Settlement and Land Use on the Central Floodplain of the Euphrates.* Chicago: University of Chicago Press.

Adams, R. M. and H. Nissen.

1972 *The Uruk Countryside.* Chicago: University of Chicago Press.

Akkermans, P. M. M. G. and G. M. Schwartz

2003 *Archaeology of Syria: From Complex Hunter Gatherer to Early Urban Societies (ca. 16,000 – 300 B.C.).* Cambridge: Cambridge University Press.

Aldenderfer, M. S. (ed.)

1993 *Domestic Architecture, Ethnicity, and Complementarity in the South-Central Andes.* Iowa City: University of Iowa Press.

Aldenderfer, M. S. and C. Stanish

1993 "Domestic Architecture, Household Archaeology, and the Past in the South-Central Andes," In Aldenderfer, M. S. (ed.), *Domestic Architecture, Ethnicity, and Complementarity in the South-Central Andes*, pp.1-12, Iowa City: University of Iowa Press.

Algaze, G.

1993 *The Uruk World System.* Chicago: University of Chicago Press.

2001 "The Prehistory of Imperialism: The Case of Uruk Period Mesopotamia," In Rothman, M. S. (ed.), *Uruk Mesopotamia and Its Neighbors: Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation*, pp.27-83, Santa Fe/Oxford: School of American Research Press/James Currey.

Alva, W.

1986 *Cerámica Temprana en el Valle de Jequetepeque, Norte del Perú.* Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie 32. Munich: Verlag C. M. Beck.

Alvarez-Calderón, R.

2009 *Aproximaciones al Uso de los Espacios Comunitarios en un Asentamiento del Horizonte Tardío: El Caso de Huaycán de Cieneguilla en el Valle de Lurín.* Tesis para optar por título de licenciada en arqueología. Lima: Facultad de Letras y Ciencias Humanas, Pontificia Universidad Católica del Perú.

Anders, M. B.

1986 *Dual Organization and Calendars Inferred from the Planned Site of Azangaro:*



- Wari Administrative Strategies*. Ph.D. dissertation. Ithaca: Department of Anthropology, Cornell University.
- 1991 "Structure and Function at the Planned Site of Azangaro: Cautionary Notes for the Model of Huari as a Centralized Secular Site," In Isbell, W. H. and G. F. McEwan (ed.), *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, pp.165-197, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Barrett, J. C. and I. Ko
- 2009 "A Phenomenology of Landscape: A Crisis in British Landscape Archaeology?," *Journal of Social Archaeology* 9-3: 275-294.
- Bauer, B. S.
- 1998 *The Sacred Landscape of the Inca: The Cuzco Ceque System*. Austin: University of Texas Press.
- 2004 *Ancient Cuzco: Heartland of the Inca*. Austin: University of Texas Press.
- Bauer, B. S. and D. S. P. Dearborn
- 1995 *Astronomy and Empire in the Ancient Andes: the Cultural Origins of Inca Sky Watching*. Austin: University of Texas Press.
- Bawden, G.
- 1982 "Galindo: A Study of Cultural Transition during the Middle Horizon," In Moseley, M. E. and K. C. Day (ed.), *Chan Chan: Andean Desert City*, pp.285-320, Albuquerque: University of New Mexico Press.
- 1990 "Domestic Space and Social Structure in Pre-Columbian Northern Perú," In Kent, S. (ed.), *Domestic Architecture and the Use of Space: An Interdisciplinary Cross-Cultural Study*, pp.153-171, Cambridge: Cambridge University Press.
- Benitez, L.
- 2009 "Descendants of the Sun: Calendars, Myths and the Tiwanaku State," In Young-Sánchez, M. (ed.), *Tiwanaku: Papers from the 2005 Mayer Center Symposium at the Denver Art Museum*, pp.49-82, Denver: Denver Art Museum.
- Bermann, M.
- 1994 *Lukurmata Household Archaeology in Prehispanic Bolivia*. Princeton: Princeton University Press.
- Bonnier, E.
- 1997 "Preceramic Architecture in the Andes: The Mito Tradition," In Bonnier, E. and H. Bischof (ed.), *Arquitectura y Civilización en los Andes Prehispánicos. Architecture and Civilization in the Prehispanic Andes*, pp.120-144, Heidelberg: Sociedad Arqueológica Peruano-Alemana/Reiss-Museum Mannheim.
- Bonnier, E. and C. Rosenberg

- 1988 "Del santuario al caserío. Acerca de la neolitización en la Cordillera de los Andes Centrales," *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 17-2: 23-40.
- Bourdieu, P.  
1977 *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brennan, C. T.  
1980 "Cerro Arena: Early Cultural Complexity and Nucleation in North Coastal Peru," *Journal of Field Archaeology* 7: 1-22.
- Brown Vega, M.  
2010 "Regional Pattern of Fortification and Single Forts: Evaluating the Articulation of Regional Sociopolitical Dynamics with Localized Phenomena," In Cutright, R. E., E. López-Hurtado and A. J. Martin (ed.), *Comparative Perspectives on the Archaeology of Coastal South America*, pp.169-190, Pittsburgh/Lima/Quito: Center for Comparative Archaeology, Department of Anthropology, University of Pittsburgh/Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Peru/Ministerio de Cultura de Ecuador.
- Buko, A. and M. McCarthy (ed.)  
2010 *Making a Medieval Town: Patterns of Early Medieval Urbanization*. Warsaw: Polish Academy of Sciences/Institute of Archaeology, University of Warsaw.
- Burger, R. L.  
1988 "Unity and Heterogeneity within the Chavín Horizon," In Keatinge, R. W. (ed.), *Peruvian Prehistory*, pp.99-104, Cambridge: Cambridge University Press.  
1992 *Chavín and the Origins of Andean Civilization*. London: Thames and Hudson.  
1993 "The Chavín Horizon: Stylistic Chimera or Socioeconomic Metamorphosis?," In Rice, D. S. (ed.), *Latin American Horizons*, pp.41-82, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.  
2007 "Los fundamentos sociales de la arquitectura monumental del Período Inicial en el valle de Lurín, Perú," In Williams, V., B. Ventura, A. Callegari and H. Yacobaccio (ed.), *Sociedades Precolombinas Surandinas: Temporalidad, Interacción, y Dinámica Cultural del NOA en el Ambito de los Andes Centro-Sur*, pp.343-362, Buenos Aires.  
2008 "Los señores de los templos," In Makowski, K. (ed.), *Señores de los Reinos de la Luna*, pp.13-38, Lima: Banco de Crédito del Perú.
- Burger, R. L. and L. C. Salazar (ed.)  
2004 *Machu Picchu: Unveiling the Mystery of the Incas*. New Haven and London: Yale University Press.
- Butterlin, P.  
2003 *Les Temps Proto-Urbaines de Mésopotamie*. Paris: CNRS éditions.
- Butzer, K.  
1976 *Early Hydraulic Civilization in Egypt: A Study in Cultural Ecology*. Chicago:

University of Chicago Press.

Campana, C.

2006 *Chan Chan del Chimo*. Lima: Editorial Orus S.A.

Canziani, J.

1987 *Asentamientos Humanos y Formaciones Sociales en la Costa Norte del Antiguo Perú*. Lima: INREA.

1992 "Arquitectura y urbanismo del periodo Paracas en valle de Chincha," *Gaceta Arqueológica Andina* 6-22: 87-117.

2009 *Ciudad y Territorio en los Andes: Contribuciones a la Historia del Urbanismo Prehispánico*. Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

Chamussy, V.

2009 *Les débuts de la Guerre Institutionalisée dans l'Aire Andine Centrale: vers la Formation de l'État, du Formatif à la Période Intermédiaire Ancienne (2000 av. J.-C. 500 apr.J.-C)*. BAR International Series 2017. Paris Monographs in American Archaeology 24. Oxford: Hadrian Books.

Chapdelaine, C.

2002 "Out the Streets of Moche: Urbanism and Sociopolitical Organization at a Moche IV Urban Center," In Isbell, W. H. and H. Silverman (ed.), *Andean Archaeology I: Art, Landscape and Society*, pp.53-88, New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.

2003 "La ciudad Moche: urbanismo y estado," In Uceda, S. and E. Mujica (ed.), *Moche hacia el Final del Milenio. Actas del Segundo Coloquio sobre la Cultura Moche (Trujillo, 1 al 7 de agosto de 1999)*, vol. II, pp.247-285, Trujillo/Lima: Universidad Nacional de Trujillo/Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

Chapdelaine, C. and V. Pimentel

2008 "Personaje de alto rango en San Juanito, valle de Santa," In Makowski, K. (ed.), *Señores de los Reinos de la Luna*, pp.248-253, Lima: Banco de Crédito del Perú.

Chicoine, D.

2006 "Early Horizon Architecture at Huambacho, Nepeña Valley, Peru," *Journal of Field Archaeology* 31-1: 1-22.

2010 "Elite Strategies and Ritual Setting in Coastal Perú during the 1st Millenium B.C.," In Cutright, R. E., E. López-Hurtado and A. J. Martin (ed.), *Comparative Perspectives on the Archaeology of Coastal South America*, pp.191-212, Pittsburgh/Lima/Quito: Center for Comparative Archaeology, Department of Anthropology, University of Pittsburgh/Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Peru/Ministerio de Cultura de Ecuador.

Childe, V. G.

- 1974[1950] "The Urban Revolution," In Sabloff, J. and C. C. Lamberg-Karlovsky (ed.), *The Rise and Fall of Civilizations*, pp.6-14, Menlo Park: Cummings.
- Christie, J. J. and P. J. Sarro (ed.)
- 2006 *Palaces and Power in the Americas: From Peru to the Northwest Coast*. Austin: University of Texas Press.
- Chu, A.
- 2008 *Bandurria: Arena, Mar y Humedal en el Surgimiento de la Civilización Andina*. Huacho: Proyecto Arqueológico Bandurria.
- Clark, J. E.
- 2009 "El alba de Mesoamerica," *Boletín de Arqueología PUCP* 11[2007]: 167-204.
- Collier, D.
- 1955 "Development of Civilization on the Coast of Peru," In Steward, J. H., R. M. Adams, D. Collier, A. Palerm, K. A. Wittfogel and R. L. Beals (ed.), *Irrigation Civilizations: A Comparative Study*, pp.19-27, Washington, D.C.: Pan American Union.
- Cordova, C. E.
- 2005 "The Degradation of the Ancient Near Eastern Environment," In Snell, D. C. (ed.), *A Companion to the Ancient Near East*, pp.109-125, Oxford: Blackwell.
- Couture, N. C.
- 2003 "Ritual, Monumentalism, and Residence at Mollo Kontu, Tiwanaku," In Kolata, A. L. (ed.), *Tiwanaku and Its Hinterland: Archaeology and Paleocology of an Andean Civilization, Vol. 2, Urban and Rural Archaeology*, pp.202-225, Washington and London: Smithsonian Institution Press.
- Cowgill, G. L.
- 2004 "Origins and Development of Urbanism: Archaeological Perspectives," *Annual Review of Anthropology* 33: 525-549.
- Crawford, H.
- 2004 *Sumer and the Sumerians*. Cambridge: Cambridge University Press.
- D'Altroy, T.
- 2002 *The Incas*. Malden: Blackwell.
- DeMarrais, E., L. J. Castillo and T. Earle
- 1996 "Ideology, Materialization, and Power Strategies," *Current Anthropology* 37: 15-31.
- Dillehay, T. D.
- 2001 "Town and Country in Late Moche Times: A View from Two Northern Valleys," In Pillsbury, J. (ed.), *Moche Art and Archaeology in Ancient Perú*, pp.259-284, New Haven: Yale University Press.
- 2004 "Social Landscape and Ritual Pause: Uncertainty and Integration in Formative Peru," *Journal of Social Archaeology* 4-2: 239-268.
- 2007 *Monuments, Empires, and Resistance: The Araucanian Polity and Ritual*

- Narratives*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dillehay, T. D., D. Bonavia and P. Kaulicke  
2004 "The First Settlers," In Silverman, H. (ed.), *Andean Archaeology*, pp.16-34, Malden/Oxford/Carlton: Blackwell.
- Dillehay, T. D., H. H. Eling, Jr. and J. P. Rossen  
2005 "Pre-ceramic Irrigation Canals in the Peruvian Andes," *Proceedings of the National Academy of Sciences* 102-47: 17241-17244.
- Dillehay, T. D., J. Rossen and P. J. Netherly  
1997 "The Nanchoc Tradition: The Beginnings of Andean Civilization," *American Scientist* 85: 46-55.
- Donnan, C. B. (ed.)  
1985 *Early Ceremonial Architecture in the Andes*. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Donnan, C. B. and G. Cock (ed.)  
1986 *The Pacatnamú Papers, vol. 1*. Los Angeles: Fowler Museum of Cultural History, University of California.
- Eeckhout, P.  
1995 "Piramide con rampa nº3, Pachacamac. Resultados preliminares de la primera temporada de excavaciones (zona 1 y 2)," *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 24-1: 54-106.  
1999 *Pachacamac durant l'Intermédiaire Récent: Étude d'un Site Monumental Préhispanique de la Côte Centrale du Pérou*. BAR International Series 747. Oxford.  
1999-2000 "The Palace of the Lords of Ychsma: An Archaeological Reappraisal of Function of Pyramids with Ramps at Pachacamac, Central Coast of Peru," *Revista de Arqueología Americana* 17-19: 217-254.  
2003 "Diseño arquitectónico, patrones de ocupación y formas de poder en Pachacamac, costa central del Perú," *Revista Española de Antropología Americana* 33: 17-37.  
2004a "La sombra de Ychsma: ensayo introductorio sobre la arqueología de la costa central del Perú en los periodos Tardíos," *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 33-3: 403-424.  
2004b "Pachacamac y el proyecto Ychsma (1999-2003)," *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 33-3: 425-448.  
2008 "El oráculo de Pachacamac y los peregrinajes a larga distancia en el mundo antiguo andino," In Curatola P., M. and M. S. Ziolkowski (ed.), *Adivinación y Oráculos en el Mundo Antiguo Andino*, pp.161-180, Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú/Instituto Francés de Estudios Andinos.
- Engel, F.

- 1957 "Sites et établissements sans céramique de la Côte péruvienne," *Journal de la Société des Americanistes* 46: 67-155.
- 1987 *De las Begonias al Maíz: Vida y Producción en el Perú Antiguo*. Lima: Universidad Nacional Agraria.
- Escalante, J.
- 2003 "Residential Architecture in La K'arana," In Kolata, A. L. (ed.), *Tiwanaku and Its Hinterland: Archaeology and Paleoecology of an Andean Civilization, Vol. 2, Urban and Rural Archaeology*, pp.316-326, Washington and London: Smithsonian Institution Press.
- Evans, S. T. and J. Pillsbury (ed.)
- 2004 *Palaces of the Ancient New World*. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Farfán, C.
- 2004 "Aspectos simbólicos de las pirámides con rampa: ensayo interpretativo," *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 33-3: 449-464.
- Feltham, J.
- 1983 *The Lurín Valley Perú, A.D. 1000-1532*. Ph.D. dissertation. London: Institut of Archaeology, London University.
- Feltham, J. and P. Eeckhout
- 2004 "Hacia una definición del estilo Ychsma: aportes preliminares sobre la cerámica Ychsma tardía de la pirámide III de Pachacamac," *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 33-3: 643-680.
- Franco, R.
- 1998 *La Pirámide con Rampa n°2 de Pachacamac: Excavaciones y Nuevas Interpretaciones*. Trujillo.
- Franco, R. and P. Paredes
- 2001 "El Templo Viejo de Pachacamac: nuevos aportes al estudio del Horizonte Medio," *Boletín de Arqueología PUCP* 4[2000]: 607-630.
- Frangipane, M.
- 2001 "Centralization in Greater Mesopotamia Uruk," In Rothman, M. S. (ed.), *Mesopotamia and Its Neighbors: Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation*, pp.307-347, Santa Fe/Oxford: School of American Research Press/James Currey.
- Gasparini, G. and L. Margolies
- 1980 *Inca Architecture*. Bloomington: Indiana University Press.
- Gavazzi, A.
- 2010 *Arquitectura Andina*. Lima: Apus/Graph Editores.
- Ghezzi, I.
- 2006 "Religious Warfare at Chankillo," In Isbell, W. H. and H. Silverman (ed.), *Andean Archaeology III: North and South*, pp.67-84, New York: Springer.

- 2008a "Los primeros tambores de la guerra," In Makowski, K. (ed.), *Señores de los Reinos de la Luna*, pp.3-19, Lima: Banco de Crédito del Perú.
- 2008b "Chankillo," In Makowski, K. (ed.), *Señores de los Reinos de la Luna*, pp.258-261, Lima: Banco de Crédito del Perú.
- Ghezzi, I. and C. L. N. Ruggles
- 2011 "The Social and Ritual Context of Horizon Astronomical Observation at Chankillo," In Ruggles, C. L. N. (ed.), *Archaeoastronomy and Ethnoastronomy: Building Bridges between Cultures*, pp.144-153, Cambridge: Cambridge University Press.
- Gimbutas, M.
- 1991 *The Civilization of the Goddess: The World of Old Europe*. San Francisco: Harper.
- Guerrero, D.
- In press "Excavaciones en la Portada de la IIIra muralla," In Makowski, K. (ed.), *El Valle de Lurín en el Horizonte Tardío*, Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.
- Haas, J.
- 1987 "The Exercise of Power in Early Andean State Development," In Haas, J., S. Pozorski and T. Pozorski (ed.), *The Origins and Development of the Andean State*, pp.31-35, Cambridge: Cambridge University Press.
- Haas, J. and W. Creamer
- 2004 "Cultural Transformations in the Central Andean Late Archaic," In Silverman, H. (ed.), *Andean Archaeology*, pp.35-50, Maldon/Oxford/Carlton: Blackwell.
- Haas, J., W. Creamer and A. Ruiz
- 2004 "Dating the Late Archaic Occupation of the Norte Chico Region in Perú," *Nature* 432: 1020-1023.
- 2005 "Power and the Emergence of Complex Polities in the Peruvian Preceramic," In Vaughn, K. J., D. E. Ogburn and C. A. Conlee (ed.), *Foundations of Power in the Preceramic Andes*, pp.37-52, Washington, D.C.: American Anthropological Association.
- Hardoy, J. E.
- 1999 *Ciudades Precolombinas*. 2nd ed. Buenos Aires: Ediciones Infinito.
- Hayden, B.
- 2001 "Fabulous Feasts: A Prolegomenon to the Importance of Feasting," In Dietler, M. and B. Hayden (ed.), *Feasts: Archaeological and Ethnographic Perspectives on Food, Politics, and Power*, pp.23-64, Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.
- Heyerdahl, T., D. H. Sandweiss and A. Narváez
- 1995 *Pyramids of Túcume: The Quest for Perú's Forgotten City*. London: Thames and Hudson.

Hodder, I.

2006 *Çatal Hüyük: The Leopard's Tale*. London: Thames and Hudson.

2007 "Çatal Hüyük in the Context of the Middle Eastern Neolithic," *Annual Review of Anthropology* 36: 105-120.

Hyslop, J.

1990 *Inka Settlement Planning*. Austin: University of Texas Press.

Isbell, W. H.

1988 "City and State in Middle Horizon Wari," In Keatinge, R. W. (ed.), *Peruvian Prehistory*, pp.164-189, Cambridge: Cambridge University Press.

2001 "Repensando el Horizonte Medio: el caso de Conchopata, Ayacucho, Perú," *Boletín de Arqueología PUCP* 4[2000]: 9-68.

2004 "Palaces and Politics of Huari, Tiwanaku and the Middle Horizon," In Evans, S. T. and J. Pillsbury (ed.), *Palaces of the Ancient New World*, pp.191-246, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

2006 "Landscape of Power: A Network of Palaces in Middle Horizon Peru," In Christie, J. J. and P. J. Sarro (ed.), *Palaces and Power in the Americas: From Peru to the Northwest Coast*, pp.44-98, Austin: University of Texas Press.

2009 "Huari: A New Direction in Central Andean Urban Evolution," In Manzanilla, L. R. and C. Chapdelaine (ed.), *Domestic Life in Prehispanic Capitals: A Study of Specilization, Hierarchy, and Ethnicity*, pp.197-219, Ann Arbor: The Museum of Anthropology, University of Michigan.

Isbell, W. H. and G. F. McEwan (ed.)

1991 *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Janusek, J. W.

2004 *Identity and Power in the Ancient Andes: Tiwanaku Cities through Time*. New York and London: Routledge.

2010 "El surgimiento del urbanismo en Tiwanaku y del poder político en el altiplano andino," In Makowski, K. (ed.), *Señores de los Imperios del Sol*, pp.39-55, Lima: Banco de Crédito del Perú.

Kaulicke, P. and Y. Onuki (ed.)

2010 *El Periodo Formativo. Enfoques y Evidencias Recientes. Cincuenta Años de la Misión Arqueológica Japonesa y Su Vigencia*. Boletín de Arqueología PUCP 12(2008)&13(2009). Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

Kemp, B.

1989 *Ancient Egypt: Anatomy of a Civilization*. London: Routledge.

Kendall, A.

1985 *Aspects of Inca Architecture: Description, Function and Chronology*. BAR



International Series 242. 2 vols. Oxford: B. A. R.

Kolata, A. L.

- 1982 "Chronology and Settlement Growth of Chan Chan," In Moseley, M. E. and K. C. Day (ed.), *Chan Chan: Andean Desert City*, pp.67-85, Albuquerque: University of New Mexico Press.
- 1990 "The Urban Concept of Chan Chan," In Moseley, M. E. and A. Cordy-Collins (ed.), *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chimor*, pp.107-144, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Library and Collection.
- 1997 "Of Kings and Capitals: Principles of Authority and the Nature of Cities in the Native Andean State," In Nichols, D. L. and T. H. Charlton (ed.), *The Archaeology of City-States: Cross-Cultural Approaches*, pp.245-254, Washington and London: Smithsonian Institution Press.

Liverani, M.

- 2006 *Uruk: The First City*. London: Equinox.

Llanos, O.

- 2009 *Le Bassin du Rio Grande de Nazca, Pérou, Archéologie d'un État Andin, 200 av. J.C. -650 ap. J.C.* BAR International Series 1990. Oxford: Archeopress.

López-Hurtado, E.

- 2010 "Pachacamac y Panquilma: relaciones de poder en la costa central durante los periodos tardíos," In Romero Velarde, R. and T. Pavel Svendsen (ed.), *Arqueología en el Perú: Nuevos Aportes para el Estudio de las Sociedades Andinas Prehispánicas*, pp.311-326, Lima: Facultad de Humanidades, Universidad Nacional Federico Villarreal/Anheb Impresiones.
- 2011 *Ideology and the Development of Social Power at the Site of Panquilma, Peruvian Central Coast*. Ph.D. Dissertation. Pittsburgh: Department of Anthropology, University of Pittsburgh.

López-Hurtado, E. and J. Nesbitt

- 2010 "Provincial Religious Centers in the Inka Empire: Propagators of Official Ideology or Spaces for Local Resistance?," In Cutright, R. E., E. López-Hurtado and A. J. Martin (ed.), *Comparative Perspectives on the Archaeology of Coastal South America*, pp.213 - 230, Pittsburgh/Lima/Quito: Center for Comparative Archaeology, Department of Anthropology, University of Pittsburgh/Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Peru/Ministerio de Cultura de Ecuador.

Lumbreras, L. G.

- 1974 *The Peoples and Cultures of Ancient Peru*. City of Washington: Smithsonian Institution Press.
- 1975 *Las Fundaciones de Huamanga*. Lima: Editorial Nueva Edición.
- 1987 "Childe and the Urban Revolution: The Central Andean Experience," In Manzanilla, L. R. (ed.), *Studies in the Neolithic and Urban Revolution: The*

*Gordon V. Childe Colloquium, Mexico, 1986*, pp.327-344, BAR International Series 349. London.

- 2006 "Un Formativo sin cerámica y cerámica preformativa," *Estudios Atacameños* 32: 11-34.

Mackey, C.

- 2006 "Elite Residences at Farfán: A Comparison of the Chimú and Inka Occupations in," In Christie, J. J. and P. J. Sarro (ed.), *Palaces and Power in the Americas: From Peru to the Northwest Coast*, pp.323-352, Austin: University of Texas Press.

Makowski, K.

- 1996 "La ciudad y el origen de la civilización en los Andes," *Cuadernos de la Facultad de Letras y Ciencias Humanas* 15: 63-88.
- 1999 "Las primeras civilizaciones en los Andes," In *Tesoros del Perú Antiguo*, pp.19-49, Córdoba: Publicaciones Obra Social y Cultural Caja Sur.
- 2000 "El síndrome de Catal Hüyük: observaciones sobre las tendencias aglomerativas tempranas," *Arqueología y Sociedad* 13: 99-119.
- 2002 "Il fenomeno dell'urbanizzazione: la nascita e lo sviluppo delle città in America Meridionale," In *Il Mondo dell'Archaeologia. Vol. I, s.v.*, Roma: Istituto della Enciclopedia Italiana.
- 2004 "Arquitectura, estilo e identidad en el Horizonte Tardío: el sitio de Pueblo Viejo-Pucará, valle de Lurín," *Boletín de Arqueología PUCP* 6[2002]: 137-170.
- 2005a "La religión de las altas culturas de la costa del Perú prehispánico," In Marzal, M. M. (ed.), *Religiones Andinas*, pp.39-88, Madrid: Editorial Trotta.
- 2005b "Deificación frente a la ancestralización del gobernante en el Perú prehispánico: Sipán y Paracas," In (ed.), *Arqueología, Geografía a Historia: Aportes Peruanos en el 50º Congreso de Americanistas, Varsovia, Polonia 2000*, pp.39-80, Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú/PromPerú.
- 2006a "Prehispanic Societies of the Central Andes," In Makowski, K., A. Rosenzweig and M. J. Jiménez (ed.), *Weaving for the Afterlife: Peruvian Textiles from the Maiman Collection, vol. II*, pp.13-65, Tel Aviv: AMPAL/MERHAV Group of Companies.
- 2006b "Late Prehispanic Styles and Cultures of the Peruvian North Coast: Lambayeque, Chimú, Casma," In Makowski, K., A. Rosenzweig and M. J. Jiménez (ed.), *Weaving for the Afterlife: Peruvian Textiles from the Maiman Collection, vol. II*, pp.103-138, Tel Aviv: AMPAL/MERHAV Group of Companies.
- 2008a "Andean Urbanism," In Silverman, H. and W. H. Isbell (ed.), *Handbook of South American Archaeology*, pp.633-657, New York: Springer.
- 2008b "La arquitectura pública del Período Precerámico Tardío y el reto conceptual

- del urbanismo andino," *Boletín de Arqueología PUCP* 10[2006]: 167-199.
- 2010 "Los hombres guerreros, las mujeres alfareras: cambios sociales tras el ocaso de Chavín," In Makowski, K. (ed.), *Señores de los Imperios del Sol*, pp.3-19, Lima: Banco de Crédito del Perú.
- Makowski, K. (ed.)
- 2006 *Proyecto Arqueológico-Taller de Campo "Lomas de Lurín" PATL (antes Tablada de Lurín)*. Lima: Instituto Nacional de Cultura.
- 2008 *Proyecto Arqueológico-Taller de Campo "Lomas de Lurín" PATL (antes Tablada de Lurín). Informe de la Temporada de Trabajo 2007/2008*. Lima: Instituto Nacional de Cultura.
- 2010 *Programa Arqueológico-Escuela de Campo "Valle de Pachacamac" PATL (antes Tablada de Lurín, Valle de Lurín). Informe de la Temporada de Trabajo 2009/2010*. Lima: Instituto Nacional de Cultura.
- 2011 *Programa Arqueológico-Escuela de Campo "Valle de Pachacamac" PATL (antes Tablada de Lurín, Valle de Lurín). Informe de la Temporada de Trabajo 2010/2011*. Lima: Ministerio de Cultura.
- Makowski, K., M. F. Córdova, P. Habetler and M. Lizárraga
- 2008a "La plaza y la fiesta: reflexiones acerca de la función de los patios en la arquitectura pública prehispánica de los periodos tardíos," *Boletín de Arqueología PUCP* 9[2005]: 297-333.
- Makowski, K., I. Ghezzi, D. Guerrero, H. Neff, M. Jimenez, G. Oré and R. Alvarez-Calderón
- 2008b "Pachacamac, Ychsma y los Caringas: estilos e identidades en el valle de Lurín Inca," In Pinedo, O. and H. Tantalean (ed.), *Arqueología de la Costa Centro-Sur*, pp.267-316, Lima: Auqui Editores.
- Makowski, K. and C. Hernández
- 2010 "Las casas de Sapa Inca," In Makowski, K. (ed.), *Señores de los Imperios del Sol*, pp.173-184, Lima: Banco de Crédito del Perú.
- Makowski, K. and C. L. N. Ruggles
- 2011 "Watching the Sky from the Ushnu: The Sukanka-like Summit Temple in Pueblo Viejo-Pucará (Lurín Valley, Perú)," In Ruggles, C. L. N. (ed.), *Archaeoastronomy and Ethnoastronomy: Building Bridges between Cultures*, pp.169-177, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mann, M.
- 1986 *The Source of Social Power, Vol. 1: A History of Power from the Beginning to AD 1760*. Cambridge: Cambridge University Press. (マン、M. 2002 『先史からヨーロッパ文明の形成へ』 森本醇・君塚直隆訳、NTT 出版)
- Marcus, J. and J. Sabloff (ed.)
- 2008 *The Ancient City: New Perspectives on Urbanism in the Old and New World*. Santa Fé.: SAR Press.

Massey, S. A.

- 1986 *Sociopolitical Change in the Upper Ica Valley, B.C. 400 to 400 A.D.: Regional State on the South Coast of Peru*. Ph.D. Dissertation. Los Angeles: Department of Anthropology, University of California.

Matos, R.

- 1994 *Pumpu: Centro Administrativa Inka de la Puna de Junin*. Lima: Editorial Horizonte.

McEwan, G. F. (ed.)

- 2005 *Pikillacta: The Wari Empire in Cuzco*. Iowa City: University of Iowa Press.

Mellaart, J.

- 1967 *Çatal Hüyük: A Neolithic Town in Anatolia*. New York: McGraw-Hill Book Company.

Midant-Reynes, B.

- 2000 *The Prehistory of Egypt: From the First Egyptians to the First Pharaohs*. Oxford: Blackwell.

Mogrovejo, J. and K. Makowski

- 1999 "Cajamarquilla y los Mega Niños en el pasado prehispánico," *Íconos: Revista Peruana de Arte, Conservación y Arqueología* 1: 46-57.

Mogrovejo, J. and R. Segura

- 2001 "El Horizonte Medio en el conjunto arquitectónico Julio C. Tello de Cajamarquilla," *Boletín de Arqueología PUCP* 4[2000]: 565-582.

Moore, J. D. and C. Mackey

- 2008 "The Chimí Empire," In Silverman, H. and W. H. Isbell (ed.), *Handbook of South American Archaeology*, pp.783-808, New York: Springer.

Morris, C.

- 1972 "State Settlements in Tawantinsuyu: A Strategy of Compulsory Urbanism," In Leone, M. P. (ed.), *Contemporary Archaeology: A Guide to Theory and Contributions*, pp.393-401, Carbondale: Southern Illinois University Press.

Morris, C. and D. E. Thompson

- 1985 *Huánuco Pampa: An Inca City and Its Hinterland*. London: Thames and Hudson.

Moseley, M. E.

- 1975 *The Maritime Foundation of Andean Civilization*. Menlo Park: Cummings.

- 1985 "The Exploration and Explanation of Early Monumental Architecture in the Andes," In Donnan, C. B. (ed.), *Early Ceremonial Architecture in the Andes*, pp.29-58, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Moseley, M. E. and A. Cordy-Collins (ed.)

- 1990 *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chimor*. Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

- Moseley, M. E. and K. C. Day (ed.)  
1982 *Chan Chan: Andean Desert City*. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Narváez Luna, J. J.  
2006 *Sociedades de la Antigua Ciudad de Cajamarquilla: Investigaciones Arqueológicas en el Sector XI del Conjunto Tello y un Estudio de la Colección Tardía del Conjunto Sestieri*. Lima: Avqi Eds.
- Nash, D. J. and P. R. Williams  
2005 "Architecture and Power on the Wari-Tiwanaku Frontier," In Vaughn, K. J., D. Ogburn and C. A. Conlee (ed.), *Foundations of Power in the Prehispanic Andes*, pp.151-174, Washington, D.C.: American Anthropological Association.
- Neely, J. A. and H. T. Wright  
1994 *Early Settlement and Irrigation on the Deh Luran Plain: Village and Early State Societies in Southwestern Iran*. Ann Arbor: Museum of Anthropology, University of Michigan.
- Ochatoma, J. and M. Cabrera  
2010 "Los espacios de poder y el culto de los ancestros en el Imperio Huari," In Makowski, K. (ed.), *Señores de los Imperios del Sol*, pp.129-141, Lima: Banco de Crédito del Perú.
- Onuki, Y. (ed.)  
1995 *Kuntur Wasi y Cerro Blanco: Dos Sitios del Formativo en el Norte del Perú*. Tokyo: Hokusen-Sha.
- Orefici, G. (ed.)  
2009 *Nasca: The Desert of the Cahuachi Divinities*. Lima: Graph Ediciones.
- Paredes, P.  
1985 "La huaca pintada o el templo de Pachacamac," *Boletín de Lima* 41: 70-84.  
1988 "Pachacamac – Pirámide con rampa n°2," *Boletín de Lima* 55: 41-58.
- Patterson, T. C.  
1966 *Pattern and Process in the Early Intermediate Period Pottery of the Central Coast of Peru*. University of California Publications in Anthropology 3. Berkeley: University of California.
- Patterson, T. C., J. P. MaCarthy and R. A. Dunn  
1982 "Politics in the Lurin Valley Peru, during the Early Intermediate Period," *Ñawpa Pacha* 20: 61-82.
- Pavel Svendsen, T.  
2011 *La Presencia Inca en las Pirámides con Rampa de Pachacamac: Una Propuesta para Su Cronología y Función desde la Perspectiva de Cerámica*. MA thesis. Lima: Programa de Estudios Andinos. Escuela de Graduados PUCP.
- Peters, A. H.

1987-88 "Chongos: sitio Paracas en el valle de Pisco," *Gaceta Arqueológica Andina* 16: 30-34.

Pillsbury, J.

2004 "The Concept of the Palace in the Andes," In Evans, S. T. and J. Pillsbury (ed.), *Palaces of the Ancient New World*, pp.181-190, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Pillsbury, J. and B. L. Leonard

2004 "Identifying Chimú Palaces: Elite Residential Architecture in the Late Intermediate Period," In Evans, S. T. and J. Pillsbury (ed.), *Palaces of the Ancient New World*, pp.247-297, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.

Pino Matos, J. L.

2010 *El Ushnu Inca de Huánuco Pampa: Organización Espacial, Arquitectura y Uso Ceremonial*. M.A. thesis. Lima: Programa de Estudios Andinos, Escuela de Graduados PUCP.

Pozorski, S. and T. Pozorski

1987 *Early Settlement and Subsistence in the Casma Valley, Peru*. Iowa City: University of Iowa Press.

1991 "Storage, Access, Control and Bureaucratic Proliferation: Understanding the Initial Period (1800-900 B.C.) Economy at Pampa de las Llamas-Moxeke, Casma Valley, Peru," *Research in Economic Anthropology* 13: 341-371.

1994 "Early Andean Cities," *Scientific American* 270 -6: 46-51.

Ramazzotti, M.

2002 "La «Rivoluzione urbana» nella Mesopotamia meridionale: Replica versus processo," *Atti della Accademia Nazionale dei Lincei. Classe di Scienze Morali, Storiche e Filologiche, Rendiconti* 13-4: 641-752.

2003 "Modeli insedimentali alle soglie del protodinastico in Mesopotamia Meridionale, Centrale e Nord-Orientale. Apunti per una critica alla formazione «secondaria» degli stati nel III millennio a.C.," In *Contributi e Materiali di Archeologia Orientale IX*, pp.15-71, Roma: Dipartimento di Scienze Storiche, Archeologiche e Antropologiche dell'Antichità, Università degli Studi di Roma «La Sapienza».

Ramos, J. and P. Paredes

2010 "Excavaciones en la segunda muralla – sector Puente Lurín: correlación estratigráfica de los estilos cerámicos durante el Horizonte Tardío en el santuario de Pachacamac," *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 39-1: 105-166.

Rappaport, R. E.

1999 *Ritual and Religion in the Making of Humanity*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Ravines, R.  
n.d. *Pachacamac: Santuario Universal*. Lima: Los Pinos.
- Rostworowski, M.  
1983 *Estructuras Andinas del Poder*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.  
1992 *Pachacamac y el Señor de los Milagros: Una Trayectoria Milenaria*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.
- Rothman, M. S.  
2004 "Studying the Development of Complex Society: Mesopotamia in the Late Fifth and Fourth Millennia B.C.," *Journal of Archaeological Research* 12-1: 75-119.
- Rothman, M. S. (ed.)  
2001 *Uruk, Mesopotamia and Its Neighbors: Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation*. Santa Fe/Oxford: School of American Research Press/James Currey.
- Rowe, J. H.  
1963 "Urban Settlements in Ancient Peru," *Ñawpa Pacha* 1: 1-28.  
1967 "What Kind of a Settlement Was Inka Cuzco?," *Ñawpa Pacha* 5: 59-76.
- Ruiz, A., W. Creamer and J. Haas  
2007 *Investigaciones Arqueológicas en los Sitios de Arcaico Tardío (3000 a 1800 Años a.C.) del Valle de Pativilca, Perú*. Barranca: Instituto Cultural del Norte Chico.
- Sakai, M.  
1998 *Reyes, Estrellas y Cerros en Chimor: El Proceso de Cambio de la Organización Espacial y Temporal en Chan Chan*. Lima: Editorial Horizonte.
- Schaedel, R. P.  
1966 "Incipient Urbanization and Secularization in Tiahuanacoid Perú," *American Antiquity* 31-3: 338-344.  
1978 "The City and the Origin of the State in America," In Schaedel, R. P., J. E. Hardoy and N. S. Kinzer (ed.), *Urbanization in the Americas from Its Beginnings to the Present*, pp.31-49, The Hague: Mouton.  
1980a "The Growth of Cities and the Origins of Complex Societies in the New World," In Schaedel, R. P. (ed.), *Origins of Cities and Complex Societies in the Americas: A Brief Reader*, pp.1-9, Berlín: Latin American Institute.  
1980b "The Commonality in Processual Trends in the Urbanization Process: Urbanization and the Redistributive Function in the Central Andes," In Schaedel, R. P. (ed.), *Origins of Cities and Complex Societies in the Americas: A Brief Reader*, pp.10-24, Berlín: Latin American Institute.
- Schmidt, K.  
2009 "Göbekli Tepe: santuarios de la Edad de Piedra en la Alta Mesopotamia," *Boletín de Arqueología PUCP* 11[2007]: 263-287.

Schreiber, K. J.

- 1992 *Wari Imperialism in Middle Horizon Peru*. Ann Arbor: Museum of Anthropology, University of Michigan.

Schreiber, K. J. and M. J. Edwards

- 2010 "Los centros administrativos huari y las manifestaciones físicas del poder imperial," In Makowski, K. (ed.), *Señores de los Imperios del Sol*, pp.153-161, Lima: Banco de Crédito del Perú.

Seidlmayer, S.

- 1996 "Town and State in the Early Old Kingdom: A View from Elephantine," In Spencer, J. (ed.), *Aspects of Early Egypt*, pp.108-127, London: British Museum Press.
- 2009 "El origen del estado en el antiguo Egipto," *Boletín de Arqueología PUCP* 11[2007]: 325-352.

Service, E. R.

- 1975 *Origins of the State and Civilization*. New York: W. W. Norton.

Shady, R.

- 2000 "Los orígenes de la civilización y la formación del estado en el Perú: las evidencias de Caral-Supe (primera parte)," *Boletín del Museo de Arqueología y Antropología* 13: 2-7.
- 2003a "Los orígenes de la civilización y la formación del estado en el Perú: las evidencias arqueológicas de Caral-Supe," In Shady, R. and C. Leyva (ed.), *La Ciudad Sagrada de Caral-Supe: Los Orígenes de la Civilización Andina y la Formación del Estado Prístino en el Antiguo Perú*, pp.93-122, Lima: Instituto Nacional de Cultura/Proyecto Especial Arqueológico Caral-Supe.
- 2003b "Caral-Supe y la costa norcentral del Perú: la cuna de la civilización y la formación del estado prístino," In Shady, R. and C. Leyva (ed.), *La Ciudad Sagrada de Caral-Supe: Los Orígenes de la Civilización Andina y la Formación del Estado Prístino en el Antiguo Perú*, pp.139-167, Lima: Instituto Nacional de Cultura/Proyecto Especial Arqueológico Caral-Supe.
- 2006 "America's First City?: The Case of Late Archaic Caral," In Isbell, W. H. and H. Silverman (ed.), *Andean Archaeology III. North and South*, pp. 29-66, New York: Springer.
- 2008 "La civilización Caral: sistema social y manejo del territorio y sus recursos. Su trascendencia en el proceso cultural andino," *Boletín de Arqueología PUCP* 10(2006): 59-89.

Shady, R., J. Haas and W. Creamer

- 2001 "Dating Caral, a Preceramic Site in the Supe Valley on the Central Coast of Peru," *Science* 292: 723-726.

Shady, R., C. Dolorier, F. Montesinos and L. Casas

- 2003 "Los orígenes de la civilización en el Perú: el área nor-central y el valle de



Supe durante el Arcaico Tardío," In Shady, R. and C. Leyva (ed.), *La Ciudad Sagrada de Caral-Supe: Los Orígenes de la Civilización Andina y la Formación del Estado Prístino en el Antiguo Perú*, pp.51-91, Lima: Instituto Nacional de Cultura/Proyecto Especial Arqueológico Caral-Supe.

Shady, R. and C. Leyva (ed.)

2003 *La Ciudad Sagrada de Caral-Supe: Los Orígenes de la Civilización Andina y la Formación del Estado Prístino en el Antiguo Perú*. Lima: Instituto Nacional de Cultura/Proyecto Especial Arqueológico Caral-Supe.

Sherbondy, J.

1986 "Los ceques: códigos de canales en el Cusco incaico," *Allpanchis* 27: 39-74.

Sherratt, A.

1995 "Instruments of Conversion?: The Role of Megaliths in the Mesolithic/Neolithic Transition in Northern Europe," *Oxford Journal of Archaeology* 14-3: 245-260.

Shimada, I.

1991 "Pachacamac Archaeology: Retrospect and Prospect," In *Pachacamac: A Reprint of the 1903 Edition by Max Uhle*, pp.XV-LXVI, Philadelphia: University Museum of Archaeology and Anthropology, University of Pennsylvania.

1994 *Pampa Grande and the Mochica Culture*. Austin: University of Texas Press.

1995 *Cultura Sicán: Dios, Riqueza y Poder en la Costa Norte del Perú*. Lima: Banco Continental.

2007 "Las prospecciones y excavaciones en Urpi Kocha y Urpi Wachaq: estudio preliminar," In *Cuadernos de Investigación del Archivo Tello n°5. Arqueología de Pachacamac: Excavaciones en Urpi Kocha y Urpi Wachak*, pp.13-18, Lima: Museo de Arqueología y Antropología, Universidad Nacional Mayor de San Marcos.

Shimada, I., R. Segura Llanos, M. Rostworowski de Diez Canseco and H. Watanabe

2004 "Una nueva evaluación de la Plaza de los Peregrinos de Pachacamac: aportes de la primera temporada 2003 del Proyecto Arqueológico Pachacamac," *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 33-3: 507-538.

Silverman, H.

1993 *Cahuachi in the Ancient Nasca World*. Iowa City: University of Iowa Press.

2002 *Ancient Nasca Settlement and Society*. Iowa City: University of Iowa Press.

2009 "Comparaciones y contrastes entre la costa sur y la costa central del Perú durante el Periodo Formativo," In Burger, R. L. and K. Makowski (ed.), *Arqueología del Periodo Formativo en la Cuenca Baja de Lurín*, pp.429-490, Lima: Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

Smith, M. L. (ed.)

2003 *The Social Construction of Ancient Cities*. Washington, D.C.: Smithsonian

Books.

Southall, A.

1998 *The City in Time and Space*. Cambridge: Cambridge University Press.

Stanish, C.

2003 *Ancient Titicaca: The Evolution of Complex Society in Southern Peru and Northern Bolivia*. Berkeley: University of California Press.

Stein, G. J.

2001 "Indigenous Social Complexity at Hacinebi," In Rothman, M. S. (ed.), *Mesopotamia and Its Neighbors: Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation*, pp.265-304, Santa Fe/Oxford: School of American Research Press/James Currey.

Steinkeller, P.

2007 "City and Countryside in Third-Millennium Southern Babylonian," In Stone, E. C. (ed.), *Settlement and Society: Essays Dedicated to Robert McCormick Adams*, pp.185-211, Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology, University of California.

Steward, J. H., R. M. Adams, D. Collier, A. Palerm, K. A. Wittfogel and R. L. Beals

1955 *Irrigation Civilizations: A Comparative Study*. Washington, D.C.: Pan American Union.

Stone, E.

1997 "City-States and Their Centers: The Mesopotamian Example," In Nichols, D. L. and T. H. Charlton (ed.), *The Archaeology of City-States: Cross-Cultural Approaches*, pp.15-26, Washington and London: Smithsonian Institution Press.

1999 "The Constraints on State and Urban Form in Ancient Mesopotamia," In Hudson, M. and B. A. Levine (ed.), *Urbanization and Land Ownership in the Ancient Near East*, pp.203-270, Cambridge: Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.

Swenson, E. R.

2003 "Cities of Violence: Sacrifice, Power and Urbanization in the Andes," *Journal of Social Archaeology* 3-2: 256-296.

Tantaleán, H.

2010 *Ideología y Realidad en las Primeras Sociedades Sedentarias (1400 ANE – 350 DNE) de la Cuenca Norte del Titicaca, Perú*. BAR International Series 2150. Oxford: Archaeopress, Gordon House.

Tellenbach, M.

1986 *Las Excavaciones en el Asentamiento Formativo de Montegrando, Valle de Jequetepeque en el Norte del Perú*. *Materiales zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie* Band 39. Munich: Verlag C. M. Beck.

Tello, J. C.

- 1960 *Guía de las Ruinas de Pachacamac*. Lima: Tipografía Peruana.
- Tello, J. C. and T. Mejía Xesspe  
1979 *Paracas. Segunda Parte: Cavernas y Necrópolis*. Lima: Publicación Antropológica del Archivo J. C. Tello de la U.N.M.S.M.
- Tilley, C.  
1994 *A Phenomenology of Landscape: Places, Paths and Monuments*. Oxford: Berg.  
2004 *The Materiality of Stone: Explorations in Landscape Phenomenology*. Oxford/New York: Berg.
- Topic, J. R.  
1990 "Craft Production in the Kingdom of Chimor," In Moseley, M. E. and A. Cordy-Collins (ed.), *The Northern Dynasties: Kingship and Statecraft in Chimor*, pp.145-176, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Library and Collection.  
1991 "Huari and Huamachuco," In Isbell, W. H. and G. F. McEwan (ed.), *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, pp.141-164, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks Research Library and Collection.
- Topic, J. R. and M. E. Moseley  
1983 "Chan Chan: A Case Study in Urban Change in Peru," *Nawpa Pacha* 21: 153-182.
- Topic, J. R. and T. L. Topic  
1997 "Hacia una comprensión conceptual de la guerra andina," In Varón Gabai, R. and J. Flores Espinoza (ed.), *Arqueología, Antropología e Historia en los Andes: Homenaje a María Rostworowski*, pp.567-590, Lima: Instituto de Estudios Peruanos.  
2001 "Hacia la comprensión del fenómeno Huari: una perspectiva norteña," *Boletín de Arqueología PUCP* 4[2000]: 181-217.
- Trigger, B. G.  
1985 "The Evolution of Pre-Industrial Cities: A Multilinear Perspective," In Geus, F. and F. Thill (ed.), *Mélanges Offerts à Jean Vercoutter*, pp.243-253, Paris: Editions Recherches sur les Civilizations.  
1995 *Early Civilizations: Ancient Egypt in Context*. Cairo: The American University in Cairo Press. (トリッガー、B. 2001 『初期文明の比較考古学』川西宏幸訳、同成社。)  
2003 *Understanding Early Civilizations: A Comparative Study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tschauner, H.  
2003 "Honco Pampa: arquitectura del élite del Horizonte Medio en el Callejón de Huaylas," In Ibarra Asencios, B. (ed.), *Arqueología de la Sierra de Ancash: Propuestas y Perspectivas*, pp.191-220, Lima: Instituto Cultural Runa.

Uhle, M.

- 2003 *Pachacamac: Informe de la Expedición Peruana William Pepper de 1896.* Lima: Universidad Nacional Mayor de San Marcos/Cooperación Financiera de Desarrollo.

Ur, J.

- 2010 "Cycles of Civilization in Northern Mesopotamia, 4400–2000 BC," *Journal of Archaeological Research* 18-4: 387-431.

Uzawa, K.

- 2010 "La difusión de camélidos domesticados en el norte del Perú durante el Periodo Formativo," *Boletín de Arqueología PUCP* 12[2008]: 249-260.

Vallejo, F.

- 2004 "El estilo Ychsma, características generales, secuencia y distribución geográfica," *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 33-3: 595-642.

van de Mierop, M.

- 1997 *The Ancient Mesopotamian City.* New York: Oxford University Press.

Vega-Centeno, R.

- 2004 "Arquitectura pública del Arcaico Tardío en el valle de Fortaleza: reflexiones sobre las sociedades complejas tempranas en la sierra norcentral," *Arqueología y Sociedad* 15: 29-56.
- 2008a "Consumo y ritual en la construcción de espacios públicos para el Periodo Arcaico Tardío: el caso de Cerro Lampay," *Boletín de Arqueología PUCP* 9[2005]: 91-121.
- 2008b "El estudio de complejidad social en el Periodo Arcaico Tardío de la costa norcentral del Perú," *Boletín de Arqueología PUCP* 10[2006]: 37-58.
- 2010 "Cerro Lampay y el Arcaico Tardío de la costa norcentral," In Romero Velarde, R. and T. Pavel Svendsen (ed.), *Arqueología en el Perú: Nuevos Aportes para el Estudio de las Sociedades Andinas Prehispánicas*, pp.1-12, Lima: Facultad de Humanidades, Universidad Nacional Federico Villarreal/Anheb Impresiones.

Vermeulen, F. and M. de Dapper

- 2000 *Geoarchaeology of the Landscapes of Classical Antiquity / Geo-Archéologie des Paysages de l'Antiquité Classique.* Babesch Supplementa 5. Leuven: Peeters Publ.

Villacorta, L. F.

- 2004 "Los palacios en la costa central durante los Periodos Tardíos: de Pachacamac al Inca," *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 33-3: 539-570.
- 2010 "Palacios yungas y racionalidad andina en la costa central prehispánica," In Makowski, K. (ed.), *Señores de los Imperios del Sol*, Lima: Banco de Crédito del Perú.

von Hagen, A. and C. Morris

- 1998 *The Cities of the Ancient Andes*. London: Thames and Hudson.
- Vranich, A.
- 2006 "Construction and Reconstruction of Ritual Space at Tiwanaku, Bolivia (A.D. 500-1000)," *Journal of Field Archaeology* 31-2: 121-136.
- 2009 "The Development of the Ritual Core of Tiwanaku," In Young-Sánchez, M. (ed.), *Tiwanaku: Papers from the 2005 Mayer Center Symposium at the Denver Art Museum*, pp.11-34, Denver: The Mayer Center for Pre-Columbian & Spanish Colonial Art at the Denver Art Museum.
- Ward-Perkins, J. B.
- 1974 *Cities of Ancient Greece and Italy: Planning in Classical Antiquity*. New York: George Braziller.
- Wason, P. K.
- 1994 *The Archaeology of Rank*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wilkinson, T. A. H.
- 1996 *State Formation in Egypt: Chronology and Society*. BAR International Series 651. Cambridge Monographs in African Archaeology 40. Oxford: Tempus Reparatum.
- 2001 *Early Dynastic Egypt*. London/New York: Routledge.
- Wilkinson, T. J.
- 2000 "Regional Approaches to Mesopotamian Archaeology: The Contribution of Archaeological Surveys," *Journal of Archaeological Research* 8-3: 219-267.
- 2003 "Archaeological Survey and Long-Term Population Trends in Upper Mesopotamia and Iran," In Miller, N. F. and K. Abdi (ed.), *Yeki Bud, Yeki Nabud: Essays on the Archaeology of Iran in Honor of William M. Sumner*, pp.9-51, Los Angeles: Cotsen Institute of Archaeology, University of California.
- Willey, G. R.
- 1953 *Prehistoric Settlements Patterns in the Virú Valley, Peru*. Bureau of American Ethnology, Bulletin 135. Washington, D.C.: Smithsonian Institution.
- Williams, C.
- 2001 "Urbanismo, arquitectura y construcción en los wari: un ensayo explicativo," In Millones, L. (ed.), *Wari: Arte Precolombino Peruano*, pp. 59-98, Sevilla: Fundación El Monte.
- Williams, P. R., D. J. Nash, M. E. Moseley, S. DeFrance, M. Ruales, A. Miranda and D. Goldstein
- 2008 "Los encuentros y las bases para la administración política wari," *Boletín de Arqueología PUCP* 9[2005]: 207-232.
- Wilson, D. J.
- 1988 *Prehistoric Settlement in the Lower Santa Valley, Peru*. Washington, D.C.: Smithsonian Institution Press.

- 1997 "Early State Formation on the North Coast of Peru: A Critique of the City-State Model," In Nichols, D. L. and T. H. Charlton (ed.), *The Archaeology of City-States: Cross-Cultural Approaches*, pp.229-244, Washington and London: Smithsonian Institution Press.
- Wolf, E. R.
- 1982 *Europe and the People without History*. Berkeley: University of California Press.
- Yoffee, N.
- 2005 *Myths of the Archaic State: Evolution of the Earliest Cities, States, and Civilizations*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ziegler, G. R. and J. McKim Melville
- 2011 "Topa Inca's Machu Picchu: A Royal Estate and Ceremonial Center," In Ruggles, C. L. N. (ed.), *Archaeoastronomy and Ethnoastronomy: Building Bridges between Cultures*, pp.162-168, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ziółkowski, M. S. and R. Sadowski
- 1992 *La Arqueoastronomía en la Investigación de las Culturas Andinas*. Quito: Instituto Otavaleño de Antropología.
- Ziółkowski, M. S. and R. M. Sadowski (ed.)
- 1989 *Time and Calendars in the Inca Empire*. Oxford: Archeopress.
- Zuidema, R. T.
- 2010 *El Calendario Inca: Tiempo y Espacio en la Organización. La Idea del Pasado*. Lima: Fondo Editorial del Congreso del Perú/Fondo Editorial de la Pontificia Universidad Católica del Perú.

図版

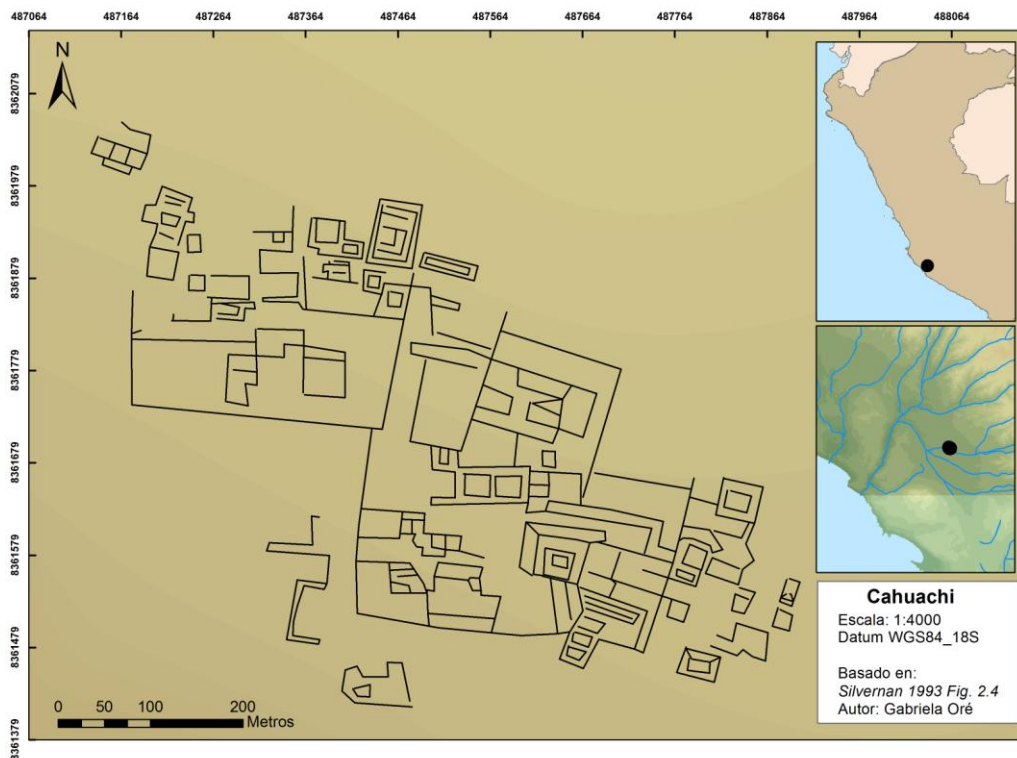


図1：カワチ遺跡 (Canziani 2009; Silverman 1993: Fig. 2.4 を改変)。ペルー南海岸、地方発展期 (ナスカ文化)。

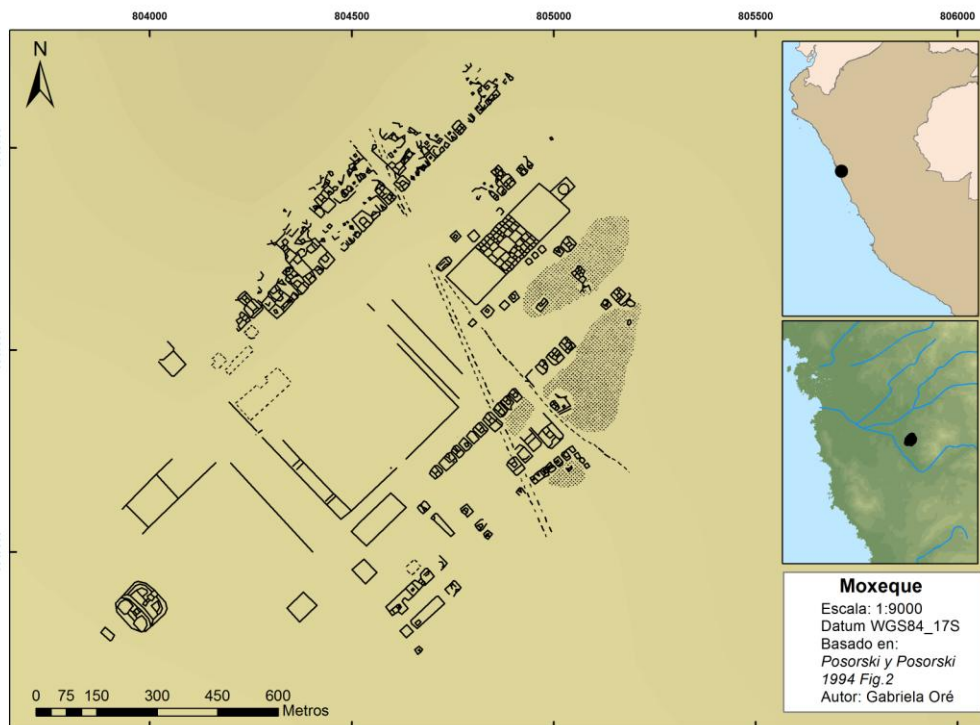


図2：モヘケ遺跡 (Canziani 2009; Pozorski and Pozorski 1994: Fig. 2 を改変)。ペルー北海岸南部、形成期。

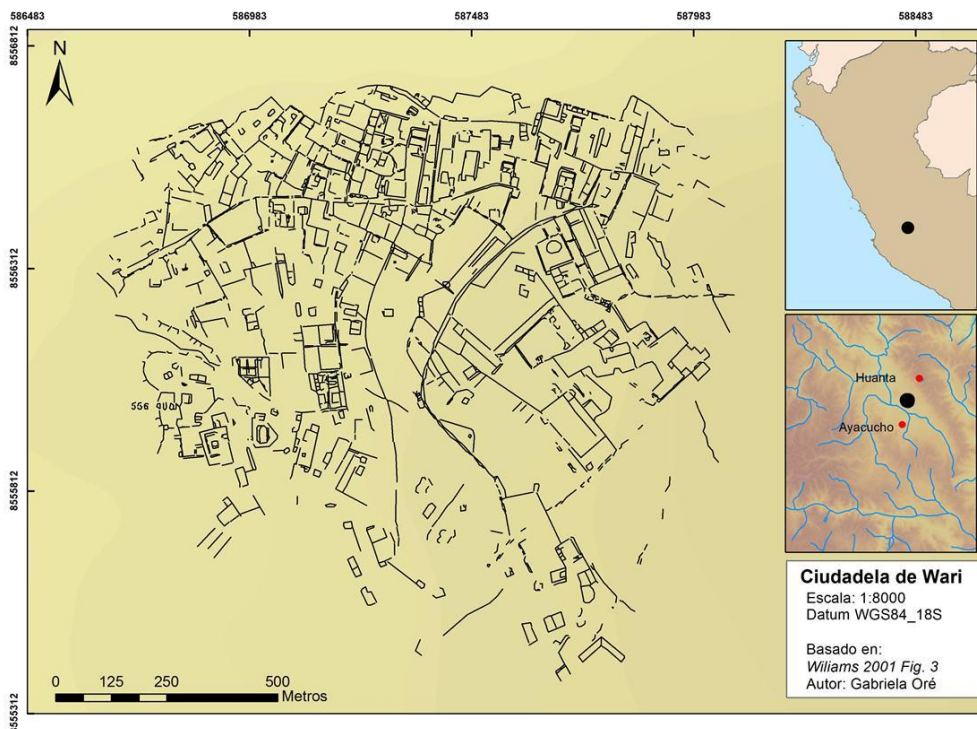


図 3 : ワリ遺跡 (Canziani 2009; Williams 2001: Fig. 3 を改変)。ペルー中央高地南部、中期ホライズン (ワリ期)。

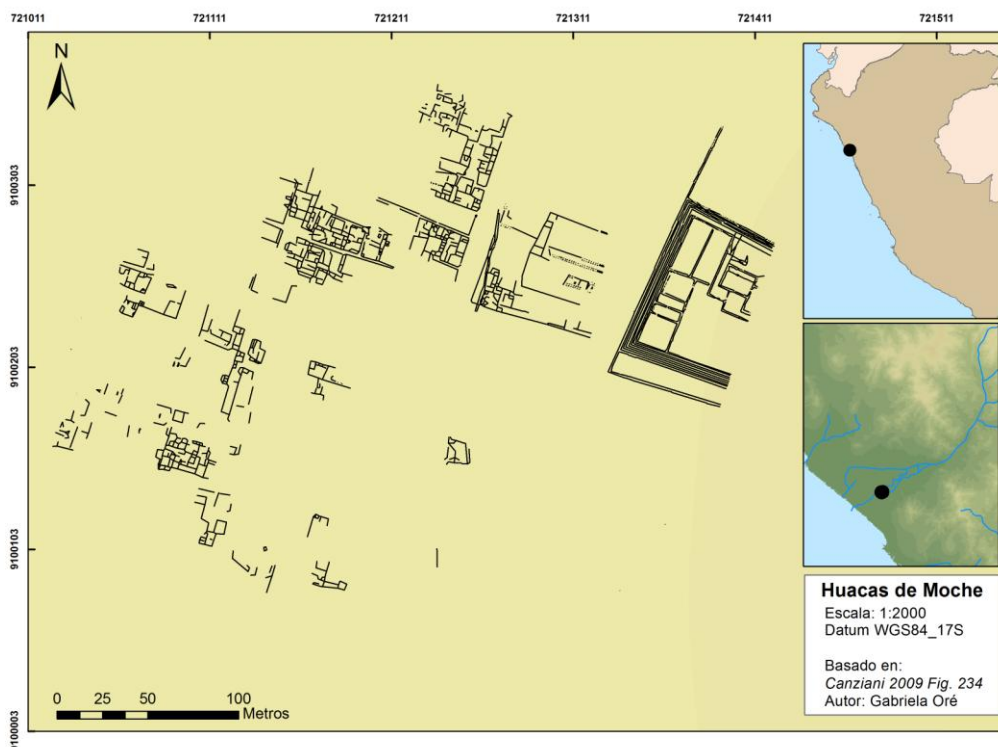


図 4 : モチェ遺跡 (Canziani 2009: Fig.234 を改変)。内部にはワカ・デル・ソル (太陽の神殿) とワカ・デ・ラ・ルナ (月の神殿) という大きな建造物がある。ペルー北海岸、地方発展期。



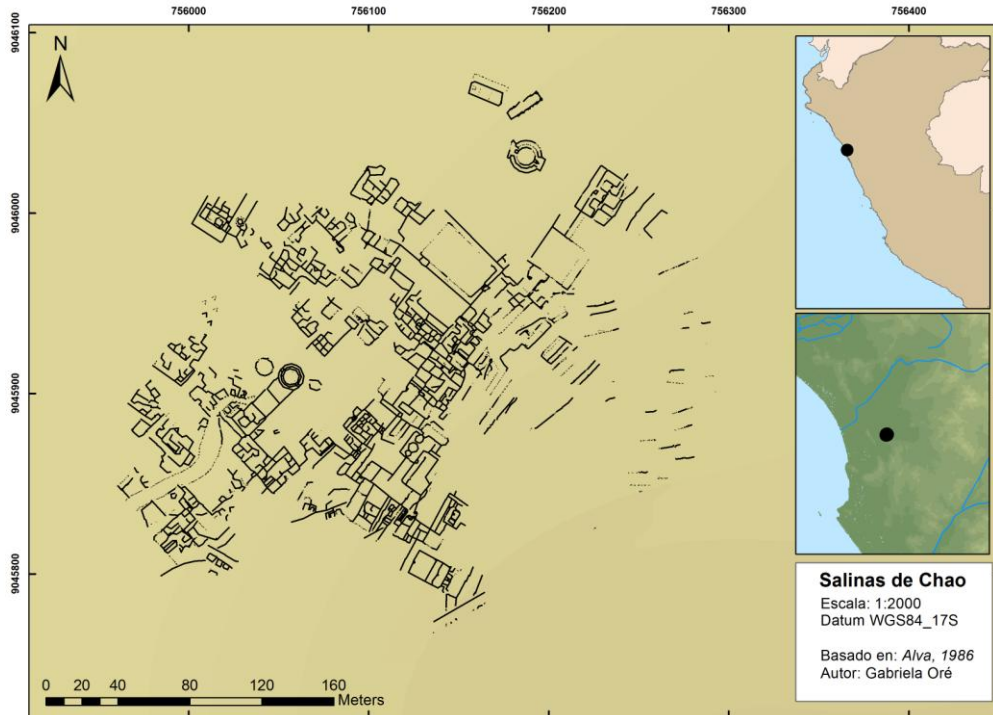


図 5 : サリナス・デ・チャオ遺跡 (Alva 1986; Canziani 2009 を改変)。ペルー北海岸、先土器時代 (古期) 後期。

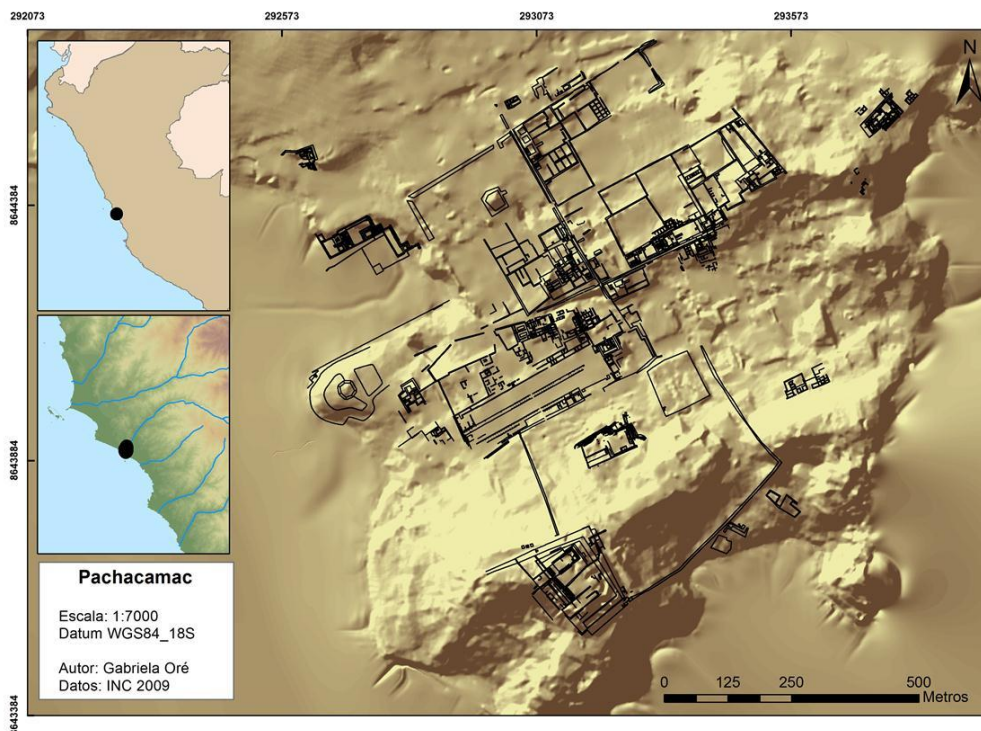


図 6 : パチャカマク遺跡。ペルー中央海岸、中期ホライズン (ワリ期) から後期ホライズン (インカ期)。

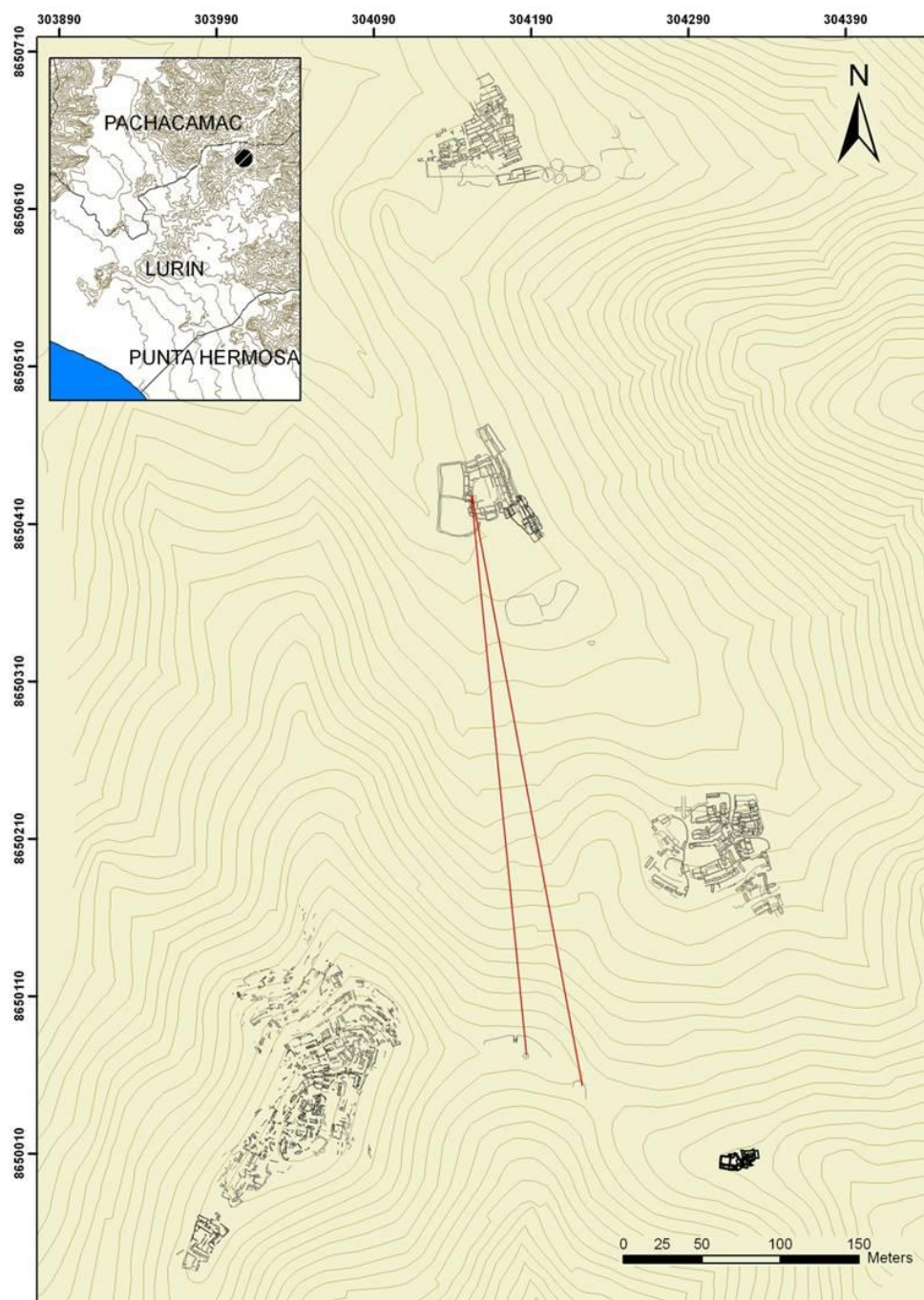


図7：プエブロ・ビエホ＝プカラ遺跡。ペルー中央海岸。後期ホライズン（インカ期）。